埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第３集

前 中 西 遺 跡 Ⅳ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ｖ－

2009

埼 玉 県 熊 谷 市 教 育 委 員 会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第３集

前中西遺跡Ⅳ

（まえなかにしいせき）

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅴ－

2009

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めております。市内上之地区で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から中世に至るおびただしい遺跡が確認されました。熊谷市教育委員会では遺跡の重要性を鑑みて、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事等に関しては、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、平成9・12年度に発掘調査を行った前中西遺跡について報告するものでございます。遺跡からは弥生時代から奈良時代にかけての集落跡が確認されました。中でも弥生時代の住居跡からは大量の遺物が出土しており、土器や石器の他に土偶や翡翠製の首飾りなどといった特殊な遺物も発見され、大変貴重な成果を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く御活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、御理解ご協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理中央事務所、並びに地元関係者には厚くお礼申しあげます。

平成21年3月

熊谷市教育委員会
教育長 **野原　晃**

例　　言

1　本書は、埼玉県熊谷市中西四丁目2539番地1他に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号59－092）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章3のとおりである。

4　発掘調査期間は、下記のとおりである。

　　平成９年度：平成10年２月３日～平成10年３月31日

　　平成12年度：平成12年９月18日～平成13年３月30日

　整理・報告書作成期間は、平成20年４月15日から平成21年３月19日までである。

5　発掘調査の担当は、平成９年度を熊谷市教育委員会権田宣行が、平成12年度を熊谷市教育委員会金子正之・松田　哲が行い、本書の執筆・編集は、松田が行った。

6　発掘調査における写真撮影は各年度の担当者が、遺物の写真撮影は松田が行った。

7　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

8　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

　　柿沼幹夫　小林　高　鈴木敏昭　知久裕昭　鳥羽政之　村松　篤　吉田　稔

　　埼玉県教育局生涯学習文化財課　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡　　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

　調査区全測図…1／600・1／300　住居跡・竪穴状遺構・土坑…1／60　溝跡平面図…1／100

　溝跡断面図…1／60　土器棺墓…1／20

2　遺構挿図中のスクリーントーン等は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

　＝地　山　＝焼　土

3　遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

　弥生土器・須恵器・土師器・陶器・土錘…1／4　土偶・石製品…1／2　石器…1／4

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

　弥生土器・土師器・土錘・石製品断面：白抜き　須恵器断面：黒塗り　赤彩：

　須恵器底部調整　回転ヘラ削り　＼

6　遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

7　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

　法量の単位はcm、ｇである。() が付されるものは推定値、現存値を表す。

　胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

　　A…白色粒子　B…黒色粒子　C…赤色粒子　D…褐色粒子　E…赤褐色粒子

　　F…白色針状物質　G…長石　H…石英　I…白雲母　J…黒雲母　K…角閃石

　　L…片岩　M…砂粒　N…礫

8　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

9　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行　1994）を参考にした。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　発掘調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・1
　1　調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・1
　2　発掘調査・報告書作成の経過・・・・・・1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織・・・2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 ・・・・・・・・・・・・4
Ⅲ　遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・9
　1　過去の調査について ・・・・・・・・・9
　2　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・11
　3　検出された遺構と遺物 ・・・・・・・・13
Ⅳ　遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・17
　1　住居跡・・・・・・・・・・・・・・17
　2　竪穴状遺構・・・・・・・・・・・・71
　3　溝　跡・・・・・・・・・・・・・・74
　4　土　坑・・・・・・・・・・・・・・84
　5　土器棺墓・・・・・・・・・・・・・88
　6　ピット・・・・・・・・・・・・・・91
　7　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・92
　8　試掘調査出土遺物・・・・・・・・・96
Ⅴ　調査のまとめ・・・・・・・・・・・・98

挿図目次

第１図　埼玉県の地形・・・・・・・・・・・4
第２図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・6
第３図　調査地点位置図・・・・・・・・・・10
第４図　調査区全測図・・・・・・・・・・・12
第５図　第１区全測図・・・・・・・・・・・14
第６図　第２区全測図・・・・・・・・・・・14
第７図　第３区全測図・・・・・・・・・・・15
第８図　第１号住居跡・出土遺物 ・・・・・・17
第９図　第２号住居跡・出土遺物 ・・・・・・19
第10図　第３・４号住居跡 ・・・・・・・・・20
第11図　第３号住居跡出土遺物・・・・・・・21
第12図　第４号住居跡出土遺物・・・・・・・21
第13図　第５号住居跡・・・・・・・・・・・23
第14図　第５号住居跡出土遺物・・・・・・・24
第15図　第６号住居跡・・・・・・・・・・・27
第16図　第７・８号住居跡・第７号住居跡出土遺物　28
第17図　第８号住居跡出土遺物（1）・・・・・30
第18図　第８号住居跡出土遺物（2）・・・・・31
第19図　第８号住居跡出土遺物（3）・・・・・32
第20図　第９号住居跡 ・・・・・・・・・・・35
第21図　第９号住居跡出土遺物 ・・・・・・・36
第22図　第10号住居跡・・・・・・・・・・・39
第23図　第10号住居跡出土遺物・・・・・・・40
第24図　第11号住居跡・・・・・・・・・・・41
第25図　第11号住居跡出土遺物・・・・・・・42
第26図　第12号住居跡・出土遺物・・・・・・・44
第27図　第13・14号住居跡 ・・・・・・・・・45
第28図　第13号住居跡出土遺物・・・・・・・47
第29図　第14号住居跡出土遺物・・・・・・・47
第30図　第15号住居跡・・・・・・・・・・・49

第31図　第15号住居跡出土遺物（1）・・・・50
第32図　第15号住居跡出土遺物（2）・・・・52
第33図　第16号住居跡 ・・・・・・・・・・54
第34図　第16号住居跡出土遺物（1）・・・・56
第35図　第16号住居跡出土遺物（2）・・・・57
第36図　第17・18号住居跡・・・・・・・・・59
第37図　第19・20号住居跡・・・・・・・・・61
第38図　第19号住居跡出土遺物（1）・・・・62
第39図　第19号住居跡出土遺物（2）・・・・64
第40図　第19号住居跡出土遺物（3）・・・・66
第41図　第19号住居跡出土遺物（4）・・・・67
第42図　第19号住居跡出土遺物（5）・・・・68
第43図　第20号住居跡出土遺物 ・・・・・・70
第44図　第１号竪穴状遺構 ・・・・・・・・72
第45図　第１号竪穴状遺構出土遺物・・・・・73
第46図　第１～11号溝跡・・・・・・・・・・76
第47図　第１～11号溝跡断面図・・・・・・・77
第48図　溝跡出土遺物（1）・・・・・・・・80
第49図　溝跡出土遺物（2）・・・・・・・・81
第50図　溝跡出土遺物（3）・・・・・・・・82
第51図　第１～５号土坑・・・・・・・・・・85
第52図　第６・７号土坑 ・・・・・・・・・・87
第53図　土坑・ピット出土遺物 ・・・・・・・88
第54図　第１～３号土器棺墓・・・・・・・・89
第55図　第１～３号土器棺墓出土遺物・・・・90
第56図　遺構外出土遺物（1）・・・・・・・93
第57図　遺構外出土遺物（2）・・・・・・・94
第58図　試掘調査出土遺物・・・・・・・・・97

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 ・・・・・・・・・7
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表 ・・・18
第３表　第２号住居跡出土遺物観察表 ・・・19
第４表　第３号住居跡出土遺物観察表 ・・・21
第５表　第４号住居跡出土遺物観察表 ・・・21
第６表　第５号住居跡出土遺物観察表 ・・・25
第７表　第７号住居跡出土遺物観察表 ・・・29
第８表　第８号住居跡出土遺物観察表 ・・・32
第９表　第９号住居跡出土遺物観察表 ・・・37
第10表　第10号住居跡出土遺物観察表 ・・・40
第11表　第11号住居跡出土遺物観察表 ・・・42
第12表　第12号住居跡出土遺物観察表 ・・・44
第13表　第13号住居跡出土遺物観察表 ・・・48
第14表　第14号住居跡出土遺物観察表 ・・・48
第15表　第15号住居跡出土遺物観察表・・・52
第16表　第16号住居跡出土遺物観察表・・・58
第17表　第19号住居跡出土遺物観察表・・・68
第18表　第20号住居跡出土遺物観察表・・・71
第19表　第１号竪穴状遺構出土遺物観察表・・74
第20表　溝跡出土遺物観察表・・・・・・・・83
第21表　土坑出土遺物観察表・・・・・・・・88
第22表　第１号土器棺墓出土遺物観察表・・・91
第23表　第２号土器棺墓出土遺物観察表・・・91
第24表　第３号土器棺墓出土遺物観察表・・・91
第25表　ピット計測表・・・・・・・・・・・92
第26表　ピット出土遺物観察表・・・・・・・92
第27表　遺構外出土遺物観察表・・・・・・・95
第28表　試掘調査出土遺物観察表・・・・・・97

図版目次

図版1　第１・２区全景（真上から）
　　　　第１・２区全景（北から）
図版2　第３区全景（真上から）
　　　　第３区全景（東から）

図 版3　第１区全景（西から）
第３区北側全景（南東から）
第３区南側全景（北東から）

遺　構

図 版4　第１号住居跡
第２号住居跡
第３号住居跡
第４号住居跡
第５号住居跡
第５号住居跡カマド
第５号住居跡遺物出土状況（1）
第５号住居跡遺物出土状況（2）
図 版5　第８号住居跡遺物出土状況（1）
第８号住居跡遺物出土状況（2）
第８号住居跡遺物出土状況（3）
第８号住居跡遺物出土状況（4）
第９号住居跡
第10号住居跡
第11･12号住居跡
第12号住居跡
図 版6　第13･14号住居跡･５号土坑
第15号住居跡
第16号住居跡
第16号住居跡遺物出土状況（1）
第16号住居跡遺物出土状況（2）
第16号住居跡遺物出土状況（3）
第17号住居跡
第18号住居跡カマド
図 版7　第19･20号住居跡
第19号住居跡遺物出土状況
第１～３号溝跡
第４号溝跡
第５号溝跡
第６号溝跡
第７号溝跡
図 版8　第８号溝跡
第８号溝跡遺物出土状況（1）
第８号溝跡遺物出土状況（2）
第８号溝跡遺物出土状況（3）
第８号溝跡遺物出土状況（4）
第８号溝跡遺物出土状況（5）
第９号溝跡
第10号溝跡
図 版 9　第11号溝跡
第２号土坑
第４号土坑
第６号土坑
第７号土坑
第１号土器棺墓（北から）
第１号土器棺墓（東から）
第２号土器棺墓

遺　物

弥生土器

図 版１０　第５号住居跡　第14図23
第８号住居跡　第18図54
第15号住居跡　第31図１・２・３・４・５・６
図 版１１　第15号住居跡　第31図８・９・９底面･12
第16号住居跡　第34図１・２・３・４
図 版１２　第19号住居跡　第38図１・２・３・４・５・７・７底面･８
図 版１３　第19号住居跡　第38図９･10･11･12
第39図13･14･15･15底面
図 版１４　第19号住居跡　第39図17･18･18底面･20
28･29･30･31･32･33
図 版１５　第１号竪穴状遺構　第45図１
第２号土器棺墓　第55図１-１
第２号土器棺墓　第55図２-１・２
第３号土器棺墓　第55図３-１
遺構外出土遺物　第56図１
試掘調査出土遺物　第58図９

図版21　第１号住居跡　第８図１～４
第２号住居跡　第９図１～７
第３号住居跡　第11図５～７
第４号住居跡　第12図４～７
第５号住居跡　第14図26～36
第８号住居跡　第18図55～66
第19図67～70
図版22　第９号住居跡　第21図７～53
図版23　第10号住居跡　第23図10～19
第11号住居跡　第25図６～19
第12号住居跡　第26図１～３
第13号住居跡　第28図５～７
第14号住居跡　第29図15～17
第15号住居跡　第31図13～18
図版24　第15号住居跡　第31図19～33
第32図34～45
図版25　第16号住居跡　第34図７～39
図版26　第19号住居跡　第40図34～69
図版27　第19号住居跡　第40図70～75
第41図76～107
図版28　第20号住居跡　第43図１～８
第１号竪穴状遺構　第45図３～28
第８号溝跡　第49図32～51
第９号溝跡　第50図９-１
第６号土坑　第53図６-１～３
図版29　遺構外出土遺物　第56図５～24
試掘調査出土遺物　第58図３～７・11

土師器（古墳時代前期）

図版16　第８号住居跡　第19図71

土師器・須恵器 坏類（古墳時代後期～奈良時代）

図版16　第５号住居跡　第14図 2・3・6・7・8・9
第８号住居跡　第17図１・３・17
図版17　第８号住居跡　第17図18・22・28・30
第18図32・34
第10号住居跡　第23図６
第14号住居跡　第29図３・13
第19号住居跡　第42図111
図版18　第８号溝跡　第48図８-１・２・３
第49図８-29・30・30底面
遺構外出土遺物　第57図43・49

土師器・須恵器　壺・甕類（古墳時代後期～奈良時代）

図版18　第４号住居跡　第12図２
図版19　第５号住居跡　第14図14
第８号住居跡　第18図35・36・37
第11号住居跡　第25図５
第14号住居跡　第29図６・７
第８号溝跡　第48図８-12・13
図版20　第８号溝跡　第48図８-17・18・19・20・21・22
図版29　第８号住居跡　第17図７～12
第10号住居跡　第23図２～４
図版30　第13号住居跡　第28図１
第14号住居跡　第29図１・２
第８号溝跡　第49図８-52
第50図８-53～55
第10号溝跡　第50図10-１
遺構外出土遺物　第56図28～38
第57図39～42

土製品

（土偶型容器）

図版31　第19号住居跡　第41図108

（土錘）

図版33　第５号住居跡　第14図21
第７号住居跡　第16図２
第８号住居跡　第18図51～53

石器・石製品

（垂飾）

図版31　第16号住居跡　第35図44

（打製石斧）

図版31　第16号住居跡　第35図40～42
図版32　第19号住居跡　第41図109
第20号住居跡　第43図９

（磨製石斧）

図版32　第19号住居跡　第41図110

（磨石）

図版32　第16号住居跡　第35図43

（円盤状打製石器）

図版32　第１号竪穴状遺構　第43図９

（砥石）

図版33　第３号住居跡　第11図３

第５号住居跡　第14図22

（軽石）

図版33　第20号住居跡　第43図15・16

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

昭和 61 年6月6日付け 61 熊都発第 148 号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会は、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成7年 11 月 13 日から平成8年1月 19 日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、平成8年2月9日付け熊教社発第 865 号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡及び諏訪木遺跡）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。

文化財保護法第 57 条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の報告及び通知は、代表者熊谷市長より平成 10 年2月3日及び平成 12 年9月 11 日付けで提出された。発掘調査は、平成9年度、平成 12 年度に熊谷市教育委員会により実施された。

発掘調査に関わる熊谷市教育委員会からの報告、通知及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

平成9年度

　平成 10 年2月 24 日付け熊教社発第 946 号（報告）

　平成 10 年3月 11 日付け教文第3－731 号

平成 12 年度

　平成 12 年9月 12 日付け熊教社発第 509 号（通知）

　平成 12 年 10 月 18 日付け教文第3－475 号

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

平成9年度

発掘調査は、平成 10 年2月3日から平成 10 年3月 31 日まで行われた。調査地点は2箇所あり、調査面積の合計は 604.4 ㎡である。

調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、2月中旬から3月上旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。3月中旬からは遺構平面図を作成し、下旬には調査区の航空写真撮影を行い、現場における

すべての作業を終了した。

平成12年度

発掘調査は、平成12年9月18日から平成13年3月30日まで行われた。平成12年度に実施された発掘調査面積の合計は1,976㎡であるが、このうち、今回報告する面積は481.3㎡である。

調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、9月下旬から翌年2月上旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。2月中旬からは遺構平面図を作成し、3月下旬には調査区の航空写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

（2） 整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成20年4月から平成21年3月まで実施した。第1四半期は遺物の洗浄、注記、接合、復元作業等を行い、併行して遺構の図面整理を行った。第2四半期に入ると、遺物の実測・トレース、遺構のトレースを開始し、第3四半期には遺構・遺物の版組を作成した。第4四半期に入ると、遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け、編集作業、原稿執筆を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、数回の校正を行い、3月下旬に報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

（1） 発掘調査

平成9年度

教育長	岡嶋 一夫
教育次長	田島 三雄
社会教育課長	大島 常雄
社会教育課副参事	鈴木 敏昭
社会教育課長補佐	翠田 晴夫
社会教育課文化財保護係長	金子 正之
主任	権田 宣行
主任	渡邉 操
主任	吉野 健

平成12年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	野辺 良雄
社会教育課長	浜島 義雄
社会教育課長補佐	北 俊明
社会教育課主幹兼文化財保護係長	金子 正之

社会教育課主査	浅見　敦夫
主任	寺社下　博
主任	吉野　　健
主事	松田　　哲
発掘調査員	小林　貴郎
発掘調査員	越前谷　理
発掘調査員	小野寺弘光

（2）整理・報告書作成

平成 20 年度

教育長	野原　　晃
教育次長	大山　整治
社会教育課長	関口　和佳
社会教育課担当副参事	吉田　高一
社会教育課副課長	新井　　端
社会教育課副課長	出縄　康行
社会教育課主幹兼文化財保護係長	金子　正之
主査	寺社下　博
主査	吉野　　健
主任	鯨井　敬浩
主任	松田　　哲
主任	蔵持　俊輔
主事	山下　祐樹

Ⅱ 遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置する県北最大の市である。平成 17 年 10 月１日には妻沼町及び大里町と、平成 19 年２月 13 日には江南町と合併し、人口 20 万を超える市として新たに発足したところである。

熊谷市は北側で群馬県との境を利根川が、南側では旧大里町及び旧江南町との境を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第１図）。

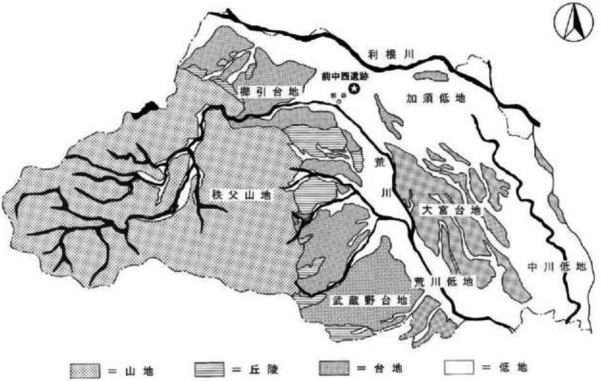
櫛引台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは JR 高崎線籠原駅から北へ約２ km の距離にある西別府付近にまで延びている。標高は約 36～54 m を測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。

櫛引台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市（旧川本町）菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する前中西遺跡は、その新荒川扇状地の縁辺部、標高 24 m前後の自然堤防上に立地している。遺跡は熊谷市東部の上之地区に所在し、JR 高崎線熊谷駅からは北東へ約 1.2km 、荒川からは北へ約 2.0 ～ 2.5km 、利根川からは南へ約 7.0 ～ 9.0km の距離にある。現地表面から遺構確認面までの深さは、0.7 ～0.9 m程であった。

次に前中西遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第２図）。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は、熊谷市東部では確認例が極めて少ない。この段階の遺跡は主に熊



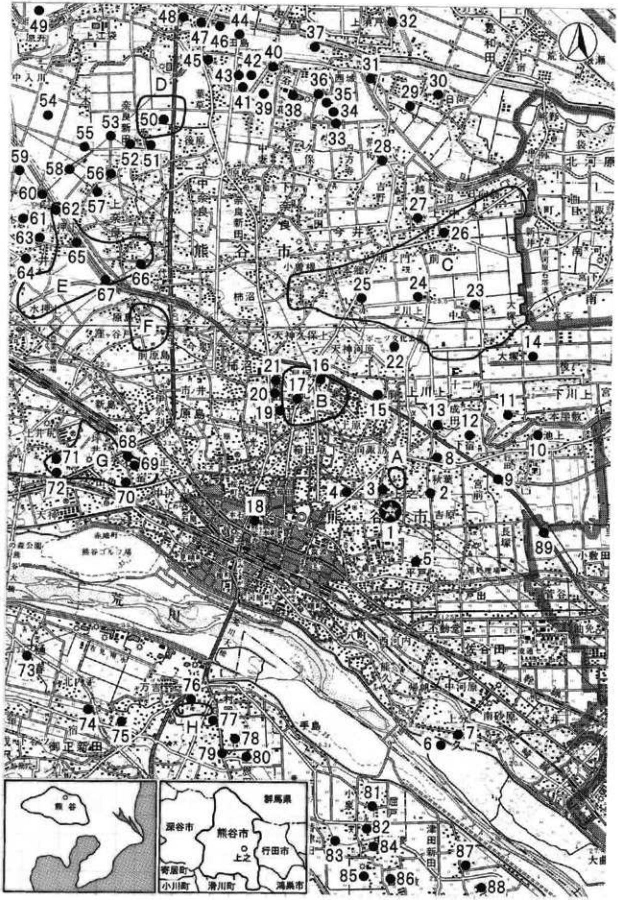
第１図　埼玉県の地形

谷市西部から深谷市域にかけて多くみられ、地形的には櫛引台地及び台地直下の妻沼低地自然堤防上に集中する。旧石器時代については、櫛引台地東端に立地する熊谷市籠原裏遺跡（地図未掲載）から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。縄文時代は、早期段階は櫛引台地北端に位置する深谷市東方城跡（地図未掲載）において尖頭器が検出されているのみである。前期になると台地のみならず低地上にも出現しはじめ、中期も特に後半段階の加曽利E式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として櫛引台地及び台地直下の低地上に集中している。後期になると徐々に低地へ進出しはじめ、熊谷市水久保遺跡（32）、西城切通遺跡（37）、場違ヶ谷戸遺跡（45）など櫛引台地から離れた低地上にも遺跡が認められるようになる。前中西遺跡周辺では隣接する諏訪木遺跡（２）でのみ確認例がある。晩期は遺跡数が減少する。諏訪木遺跡では後期に続いて集落が営まれているが、唯一の事例と言える。熊谷市遺跡調査会により行われた調査（熊谷市遺跡調査会 2001）や埼玉県埋蔵文化財調査事業団により行われた調査（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002·2007）では、後期末から晩期の遺物が検出されている。特に後者の調査では遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。この他では櫛引台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）で晩期最終末の浮線文土器が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階である前期末から中期前半は隣接する藤之宮遺跡（３）で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡は櫛引台地直下の低地上に集中するが、集落ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡（地図未掲載）では、前期末から中期前半頃の再葬墓が13基確認されており、再葬墓一括資料は1999年３月に埼玉県指定になっている。この他にも熊谷市（旧妻沼町）飯塚遺跡、飯塚南遺跡（ともに地図未掲載）や先の深谷市上敷免遺跡などでも再葬墓が検出されており、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。また、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期中頃になるとこれまでの状況と一変して確認例が増す。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（９）、その墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（89）などがあり、本格的に展開される。中期後半は今回報告する前中西遺跡（１）や諏訪木遺跡、北島遺跡（22）などで集落が営まれており、前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡では方形周溝墓も検出されている。特に前中西遺跡では、遺跡範囲南東部で方形周溝墓が多数検出されており、集落・墓ともに後期初頭まで続くことが明らかとなっている（熊谷市教育委員会 2002·2003）。諏訪木遺跡では県埋蔵文化財調査事業団により行われた調査（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2008）で初めて住居跡と方形周溝墓が確認された。両者はほぼ同一箇所で確認されたことから時間差を持つことが想定される。確認された住居跡は１軒であり、出土土器も甕１点のみであるため断言はできないが、出土土器の比較では方形周溝墓が住居跡よりも新しい要素を持つ。北島遺跡では大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されている。そして、特筆すべきことは水田に引き込む水路や堰が造営されていたことが挙げられる。これは当時、本格的な水田経営が行われていたことを物語っており、北島遺跡はその規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目されている。後期以降については、藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡としては前中西遺跡、北島遺跡以外に近辺では例がない。

古墳時代になると低地上への進出がより活発化し、前期の遺跡は近年確認例が増加している。前代に



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			51	東通遺跡	古墳後
1	前中西遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安	52	西通遺跡	古墳後
2	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳後、奈良・平安、中・近世	53	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
3	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	54	別府条里遺跡	奈良・平安
4	箱田氏館跡	平安末	55	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
5	平戸遺跡	弥生中・後、古墳後、平安、中・近世	56	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
6	久下氏館跡	中世	57	奈良氏館跡	平安末～中世
7	市田氏館跡	中世	58	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
8	成田氏館跡	中世	59	寺東遺跡	縄文前～後
9	池上遺跡	弥生中、古墳、平安	60	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
10	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	61	玉井陣屋跡	平安末～中世
11	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	62	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
12	宮の裏遺跡	古墳後	63	水押下遺跡	古墳後
13	成田遺跡	古墳後	64	稲荷木上遺跡	古墳後
14	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	65	下河原中遺跡	奈良・平安
15	河上氏館跡	中世	66	本代遺跡	古墳後、近世
16	八幡山遺跡	古墳	67	下河原上遺跡	近世
17	出口下遺跡	古墳後	68	天神前遺跡	古墳中・後、中世
18	熊谷氏館跡	中世	69	兵部裏屋敷跡	中世
19	肥塚館跡	中世	70	御蔵場跡	近世
20	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	71	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
21	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	72	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
22	北島遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中世	73	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
23	中島遺跡	古墳後、奈良・平安	74	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
24	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	75	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
25	赤城遺跡	古墳、奈良・平安	76	村岡館跡	平安末
26	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世	77	北西原遺跡	奈良・平安
27	中条氏館跡	中世	78	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
28	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	79	西浦遺跡	奈良・平安
29	先載場遺跡	古墳後、奈良	80	腰廻遺跡	奈良・平安
30	八幡間遺跡	古墳後、奈良	81	北方遺跡	奈良・平安
31	東城館跡	平安	82	宮前遺跡	奈良・平安
32	水久保遺跡	縄文後	83	西浦町遺跡	奈良・平安
33	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	84	宮前町遺跡	奈良・平安
34	西城館跡	平安	85	宮町遺跡	奈良・平安
35	長安寺北遺跡	古墳後	86	仲町遺跡	奈良・平安
36	乙鵜森遺跡	古墳後	87	旭町遺跡	奈良・平安
37	西城切通遺跡	縄文後	88	北町遺跡	奈良・平安
38	鵜森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	行田市		
39	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	89	小敷田遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安
40	中大ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	古墳群		
41	南大ヶ谷戸遺跡	奈良・平安	熊谷市		
42	中大ヶ谷戸西遺跡	古墳後、奈良・平安	A	上之古墳群	古墳後～末
43	鷺ヶ谷戸北遺跡	古墳後、奈良・平安	B	肥塚古墳群	古墳後～末
44	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
45	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
46	宮前遺跡	奈良・平安	E	玉井古墳群	古墳後
47	実盛館	平安	F	原島古墳群	古墳後
48	下三丁免遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
49	道ヶ谷戸条里遺跡	奈良	H	村岡古墳群	古墳後
50	横塚遺跡	古墳前、平安			

引き続いて前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡では集落跡が確認され、北島遺跡では弥生時代に続いて大規模集落が営まれており、墓域も形成されている。諏訪木遺跡では、県埋蔵文化財調査事業団により行われた調査で河川跡から大量の木製品が出土しており、注目すべきは板倉造り建物の「樋部倉矧」と呼ばれる特殊な加工が施された壁板材が検出されたことが挙げられる（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2008）。中条遺跡（26）では木製農具、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地方の外来系土器が検出されており、この他にも古墳時代前期はたくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に

分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて前中西遺跡や藤之宮遺跡、中条遺跡などで集落跡が営まれている。また、5世紀末頃の鎧塚古墳や女塚1号墳（C：中条古墳群）、市の指定史跡である横塚山古墳（D：奈良古墳群）などといった古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長 43.8 mの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡2箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚1号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長 46 mを測る。二重周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳はB種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。

後期になると遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は規模が大小あるが、多数営まれるようになる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続して営まれるものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造されはじめる。低地上では前中西遺跡北側に分布する上之古墳群（A）の他に、肥塚古墳群（B）、中条古墳群（C）、奈良古墳群（D）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらは概ね6世紀から7世紀末ないし8世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）では埋葬施設に角閃石安山岩を使用しているが、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良・平安時代は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。第 19 地点の調査では二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また、遺物では「篁」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの鉛釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。北島遺跡以外では、池上遺跡で整然と配置された9世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大型掘立建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたこと、旧河川で土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡の集中する地域といえる。

集落以外では北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡（14）、行田市南河原条里遺跡（地図未掲載）などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡を明確に残す。

平安時代末から中世にかけては武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる段階であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡（8）、久下氏館跡（6）、市田氏館跡（7）、河上氏館跡（15）、熊谷氏館跡（18）、肥塚館跡（19）、中条氏館跡（27）などがある。このうち、前中西遺跡に近い成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が 15 世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされている。また、県事業団によって行われた諏訪木遺跡の調査では、館跡から南に約300 mの所に中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002）。

中世段階については館跡を中心にその一端が明らかになりつつあるが、依然として資料不足の状態であり、今後の蓄積を待つ以外にないというのが現状である。また、近世段階についても同様で隣接する諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ　遺跡の概要

1　過去の調査について

上之土地区画整理事業地内には、前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡の3遺跡が所在する。区画整理に伴う発掘調査は、平成8年度から毎年発掘調査が実施されており、前中西遺跡では第1次調査の平成8年度を皮切りに平成9～12年度（第2・4～6次)、平成18～20年度（第7～9次）に調査が行われている。また、区画整理以外にも平成10年度には民間開発に伴う調査（第3次）も実施されており、前中西遺跡における発掘調査はこれまでに計9回を数える。このうち、区画整理に伴う平成8・9年度調査（第1・2次）及び平成10～12年度調査（第4～6次）の大半と平成10年度の民間開発に伴う第3次調査については、既に平成10･13･14年度に報告書を刊行していることから、ここでは報告済みの箇所について概要を簡単に述べておきたい。なお、平成18年度以降の調査については、来年度以降に報告書を刊行していく予定である。

平成8・9年度調査（第1・2次調査）について

平成8・9年度調査（第1・2次調査）は、区画整理に伴い発掘調査が行われた。調査主体は熊谷市教育委員会である。報告した調査面積は合計で4,441.5㎡である。調査地点は遺跡範囲のほぼ中央からやや西寄りに位置し、今回報告する地点とは河川を隔てた南側にある。

検出された遺構は、住居跡24軒（弥生時代中期後半～後期初頭9軒、古墳時代前期4軒、古墳時代後期11軒)、掘立柱建物跡8棟（古墳時代後期1棟、奈良時代7棟)、掘立柱列2列（不明)、溝跡32条（弥生時代1条、古墳時代中期3条、古墳時代後期10条、平安時代2条、不明16条)、土坑37基（弥生時代6基、古墳時代中期8基、古墳時代後期9基、古墳時代前期～後期1基、平安時代1基、近世1基、時期不明11基)、井戸跡1基（中世)、方形周溝墓3基（弥生時代中期後半)、土器棺墓3基（弥生時代中期後半)、ピット55基（古墳時代後期5基、不明50基）である。

遺構の時期は弥生時代から近世までと幅広いが、主体となるのは弥生時代と古墳時代前･後期である。

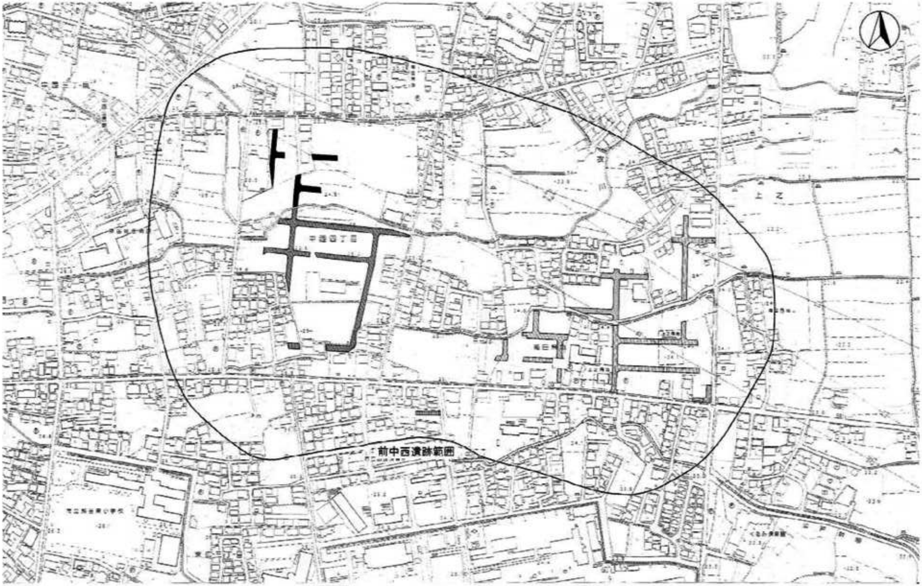
弥生時代は中期後半から後期初頭にかけての集落跡と墓域が確認されたが、出土土器の比較から集落跡が墓域よりも若干新しい様相を呈する。また、遺構外出土遺物であるが、土偶型容器の一部（肩から腕部にかけて）が検出されている。

古墳時代前・後期も集落跡が確認されており、前期は柱状を呈する高坏などの存在から末頃に相当すると思われる。後期は出土土器の様相から6世紀後半から7世紀後半までとやや幅がみられた。その他の時期で特筆すべきこととしては、同じ場所に4回も建て替えられた8世紀代の大型掘立柱建物跡が検出されたことや遺構外であるが、縄文時代晩期末の浮線文土器が検出されたことなどが挙げられる。

第1・2次調査については、『前中西遺跡Ⅱ』として平成13年度に報告書が刊行されている（熊谷市教育委員会2002)。

平成10年度調査（第3次調査）について

平成10年度調査（第3次調査）は、民間の共同住宅建設に伴う取り付け道路工事で発掘調査が行われた。調査主体は熊谷市前中西遺跡調査会である。調査面積は110㎡。調査地点は遺跡範囲中央の南端に位置する。



= 平成10年度報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)　= 平成13年度報告地点(熊谷市教委)　= 平成14年度報告地点(熊谷市教委)　= 本報告地点

第3図　調査地点位置図

検出された遺構は、竪穴状遺構6基（古墳時代後期）、溝跡1条（古墳時代）、土坑6基（古墳時代後期）、ピット 27 基である。溝跡からは古墳時代後期の土器の他に前期の土器も検出されているが、後期が溝跡に伴うものと思われる。よって、検出された遺構はすべて古墳時代後期と思われる。

前中西遺跡における古墳時代後期の集落跡は、遺跡範囲南端においても確認されたことから広範囲にわたることが確認された。また、調査面積が小さいこともあるが、弥生時代は確認されていないことから遺跡範囲南側には弥生時代の集落及び墓域は広がっていないことが確認された。

第3次調査については、『前中西遺跡』として平成 10 年度に報告書が刊行されている（熊谷市前中西遺跡調査会 1999）。

平成 10〜12 年度調査（第4〜6次調査）について

平成 10〜12 年度調査（第4〜6次調査）は、区画整理に伴い発掘調査が行われた。調査主体は熊谷市教育委員会である。報告した調査面積は計 5,241.17 ㎡である。調査地点は遺跡範囲東側に位置する。

検出された遺構は、住居跡 28 軒（弥生時代中期後半6軒、古墳時代後期7軒、奈良時代6軒、平安時代8軒、不明1軒）、竪穴状遺構6基（弥生時代中期後半1基、平安時代1基、不明4基）、掘立柱建物跡 18 棟（古墳時代後期6棟、奈良時代2棟、平安時代7棟、不明3棟）、掘立柱列1列（不明）、溝跡 80 条（弥生時代 16 条、古墳時代 27 条、奈良時代3条、平安時代 17 条、中世3条、不明 14 条）、土坑 47 基（弥生時代4基、古墳時代5基、奈良時代4基、平安時代8基、不明 26 基）、井戸跡 25 基（古墳時代2基、奈良時代1基、平安時代8基、中世4基、不明 10 基）、方形周溝墓 13 基（弥生時代中期後半〜後期初頭）、土器棺墓3基（弥生時代中期末〜後期初頭）、木棺墓1基（弥生時代）、ピット群である。

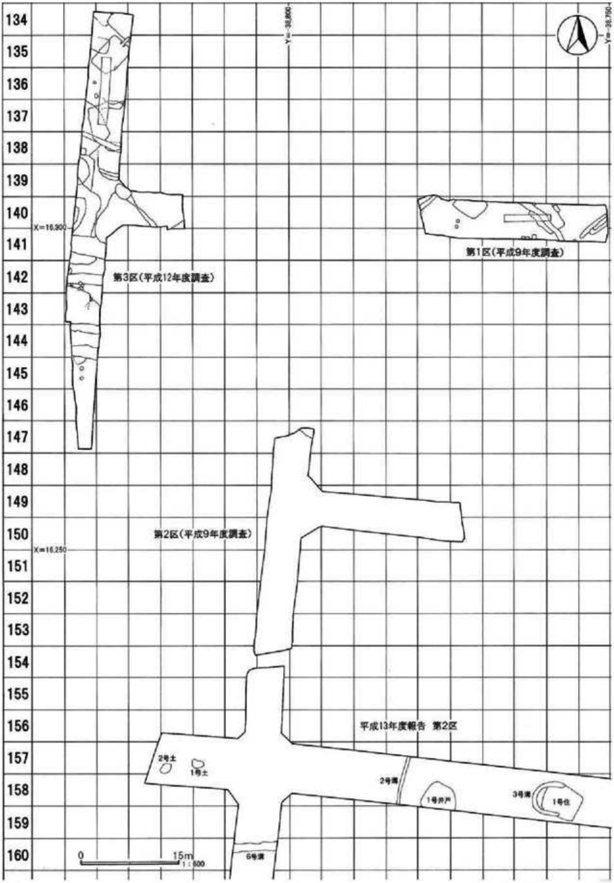
遺構の時期は弥生時代から中世までであるが、主体となるのは弥生時代、古墳時代後期、奈良・平安時代である。弥生時代は1・2次調査と同じく中期後半から後期初頭にかけての集落跡と墓域が確認されたが、両者の時期が逆転している。住居跡は出土遺物が少ないため、はっきりしたことは言えないが、集落跡は概ね中期後半段階に相当し、方形周溝墓及び土器棺墓は中期末から後期初頭に位置づけられる遺物が多いことから集落跡が墓域よりも若干古い状況を呈する。方形周溝墓は 13 基とかなりまとまって確認されたことから4〜6次調査地点には広範囲にわたって墓域が形成されていたことが明らかになった。また、方形周溝墓からは土器の他に石戈の一部も検出されている。なお、木棺墓が1基のみ検出されたが、出土遺物が管玉のみであるため具体的な時期については不明と言わざるを得ない。

古墳時代後期と奈良・平安時代も集落跡が確認されている。古墳時代後期は7世紀後半前後、奈良・平安時代は8世紀後半から9世紀中頃あたりまでの幅で収まる。古墳時代後期は1〜3次調査でも確認されていることから前中西遺跡における古墳時代後期の集落跡は大規模であったことが想定される。また、奈良・平安時代の集落跡は初めて確認されたが、広範囲に分布しないことから古墳時代後期とは異なる地形的な変化があったことが考えられる。

第4〜6次調査については、『前中西遺跡Ⅲ』として平成 14 年度に報告書が刊行されている（熊谷市教育委員会 2003）。

2　調査の方法

今回報告する地点は、平成9・12 年度に行われた第2次及び第6次調査のうち、既に報告した箇所以外


134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
X=16,300
X=16,250
第3区(平成12年度調査)
第1区(平成9年度調査)
第2区(平成9年度調査)
平成13年度報告 第2区
2号土
1号土
2号溝
1号井戸
3号溝
1号住
6号溝
0
15m
1：600

第４図　調査区全測図

についてである。平成９年度のみ調査地点が２箇所（第1・2区）あり、平成 12 年度は１箇所（第３区）のみである。調査面積の合計は 1,085.7 ㎡である。

調査は、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行っていった。手掘り作業終了後は、遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業を順次行った。実測作業を行うにあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように設定された一辺５ｍのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。今回報告する調査地点のグリッドは、東西が 111 から 127 まで、南北は 134 から 154 までが該当する。なお、区画整理地内全体のグリッド図については、過去の前中西遺跡の報告（熊谷市教育委員会 2002・2003）に記載されていることから、本報告では省略した。

3　検出された遺構と遺物

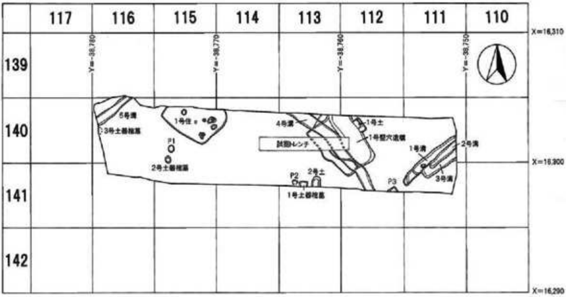
今回報告する地点は、前中西遺跡の遺跡範囲北西部にあたる（第３図）。調査区は３箇所に分かれており、第1・2区が平成９年度、第３区が平成 12 年度調査である。今回の調査で検出された遺構は、全調査区を通して住居跡 20 軒、竪穴状遺構１基、溝跡 11 条、土坑７基、土器棺墓３基、ピット 13 基である（第４～７図）。これらの遺構は、第１区ではほぼ全面、第２区は北端、第３区はほぼ全面であるが、主に中央から北側にかけて分布する。第２区は北端で住居跡が確認された以外に遺構の検出はみられない。

住居跡は第１・２区が各１軒、第３区が 18 軒の計 20 軒が検出された。第１区は北西部、第２区は北端に位置し、第３区は北側から中央付近にかけて多数の住居跡が重複して位置している。時期は第１・２区が弥生時代中期後半、第３区は弥生時代中期後半が６軒、古墳時代後期が 10 軒、奈良時代が２軒である。全形を検出できたものはほとんどないが、弥生時代中期後半は平面プランが隅丸長方形や正方形など様々であり、古墳時代後期及び奈良時代は正方形ないし縦長の長方形を呈する。弥生時代中期後半の 16 号、古墳時代後期の 14 号は大型の部類に入る。遺物は弥生時代中期後半の住居跡からは弥生土器が多数検出され、16 号からは打製石斧や翡翠製の垂飾、19 号からは打製及び磨製の石斧や土偶型容器なども検出された。弥生土器は全形のわかるものは少ないが、15・16・19 号からは比較的良好な資料を得ることができた。古墳時代後期及び奈良時代の住居跡からは、須恵器、土師器、土錘、砥石などが検出され、奈良時代の８号からは、廃棄されたと思われる須恵器、土師器が大量に検出された。

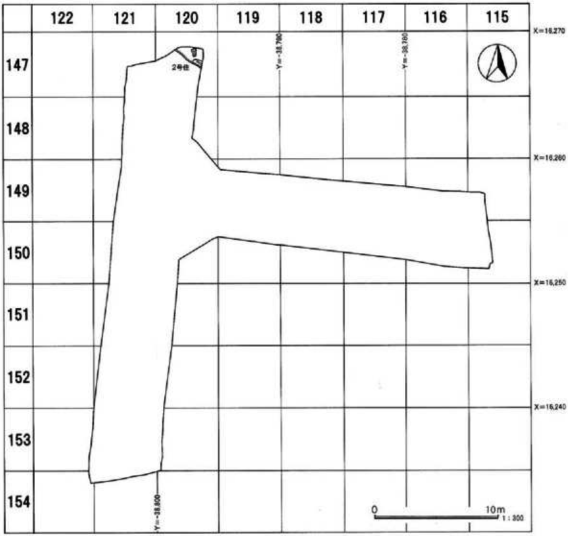
竪穴状遺構は第１区から１基検出された。第１区中央からやや東寄りに位置し、１号住居跡とほぼ同軸方向を向く。時期は弥生時代中期後半である。平面プランは住居跡に似るが、底面に段差がみられたことから竪穴状遺構とした。出土遺物は弥生土器、石器がある。残存状態の良いものはみられない。

溝跡は第１区が５条、第３区が６条の計 11 条が検出された。第１区の溝跡は、北東方向から南西方向ないし北西方向から南東方向に走るが、第３区の溝跡はほぼ東西方向に走る。時期ははっきりしないものもあるが、概ね古墳時代後期以降のものが多い。出土遺物は少ないが、流れ込みの弥生土器や古墳時代後期以降の須恵器、土師器などがあり、８号溝跡からは６世紀後半段階の土師器がまとまって検出された。

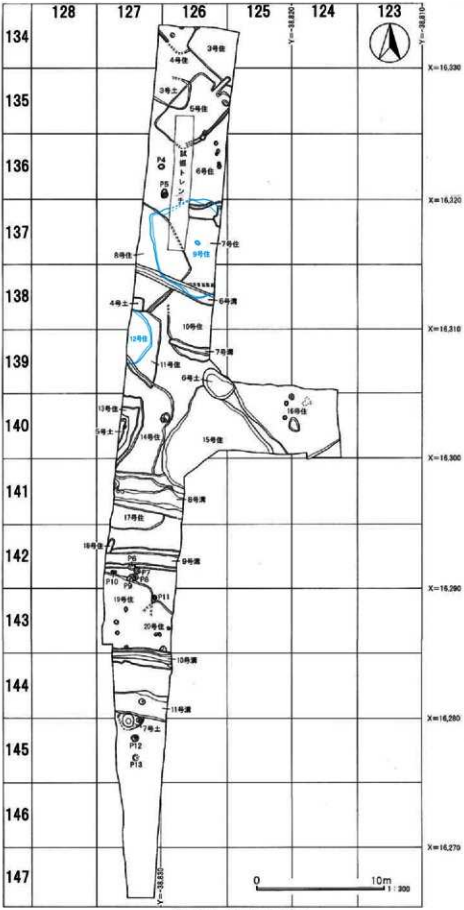
土坑は第１区が２基、第３区が５基の計７基が検出された。平面プランは長方形ないし楕円形を呈するものが多い。時期は弥生時代中期後半が１基あり、その他ははっきりしないが、概ね古墳時代後期のものである。出土遺物は少ないが、弥生土器、須恵器、土師器などがある。残存状態は良くない。



第5図　第１区全測図



第6図　第２区全測図


128
127
126
125
124
123
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
Y=-38,820
Y=-38,810
Y=-38,830
X=16,330
X=16,320
X=16,310
X=16,300
X=16,290
X=16,280
X=16,270
3号住
4号住
3号土
5号住
試掘トレンチ
P4
P5
6号住
7号住
8号住
9号住
6号溝
4号土
10号住
12号住
7号溝
11号住
6号土
13号住
5号土
14号住
15号住
16号住
8号溝
17号住
18号住
9号溝
P6
P7
P8
P9
P10
P11
19号住
20号住
10号溝
11号溝
7号土
P12
P13
0
10m
1 : 300

第7図　第3区全測図

土器棺墓は３基すべて第１区からの検出である。１号住居跡ないし１号竪穴状遺構の近辺に位置する。１・３号は肩部以上を打ち欠いた棺身の壺のみが検出され、２号は棺身の壺の他に棺蓋に使用されたと思われる甕の胴下部も検出された。３号は確認面の都合から平面的に確認することができなかったが、１号は正方形、２号は楕円形を呈する土坑内に棺身の壺がほぼ正位に埋設されていた。棺内から骨などは検出されていない。時期はすべて弥生時代中期後半である。

ピットは第１区が３基、第３区が 10 基の計 13 基である。第１区では散在し、第３区では大きく３つの集中箇所に分けられるが、住居跡に伴う可能性があるピットもみられた。規則性が見出せず、また出土遺物が皆無に等しいため、時期の特定は困難である。

遺構外出土遺物は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器、古墳時代末以降の須恵器、土師器、近世の陶器などが検出されている。古墳時代前期と近世については今回の調査では遺構が確認されていない。弥生土器は全調査区から検出されているが、古墳時代前期以降の遺物は第３区にほぼ限定される。

試掘調査出土遺物は、平成７年度に実施されたトレンチによる調査で検出された。トレンチは第１区と第３区に各１本ずつ入れられており、出土遺物は弥生土器と古墳時代後期以降の土師器がある。これらの遺物は各トレンチ付近に位置する遺構に伴う可能性が高い。

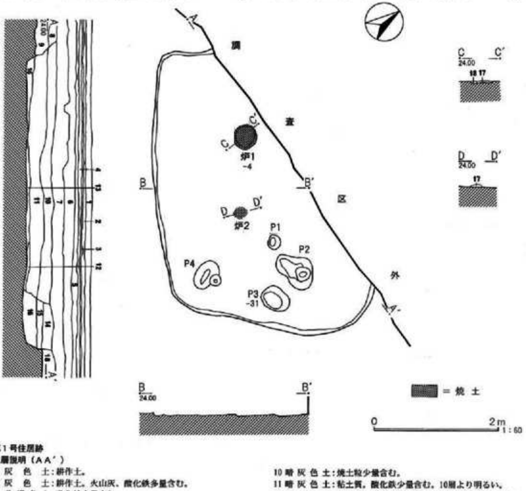
Ⅳ 遺構と遺物

1 住居跡

第1号住居跡（第8図）

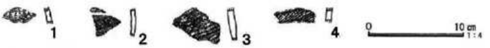
平成9年度調査第1区の114・115－140グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、北東部大半が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、長軸がおよそ4.3m、短軸は3.25mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向はN－55°－Wを指す。確認面からの深さは最大0.28mであったが、調査区境の土層断面観察では0.5m前後の深さであったことが確認された。床面は中央付近でやや凹凸がみられたが、その他はほぼ平坦であった。覆土は七層（10～16層）からなる。上層（10・14層）以下はすべて粘土質で



第1号住居跡
土層説明（AA'）

1 灰　色　土：耕作土。
2 灰　色　土：耕作土。火山灰、酸化鉄多量含む。
3 黄 褐 色 土：酸化鉄多量含む。
4 灰　色　土：酸化鉄、マンガン粒少量含む。
5 灰　色　土：酸化鉄、マンガン粒少量含む。4層より暗い。
6 灰　色　土：酸化鉄多量、暗灰色粒、マンガン粒少量含む。
7 暗 灰 色 土：酸化鉄少量、焼土粒微量含む。
8 暗 灰 色 土：酸化鉄少量含む。
9 暗 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量含む。
10 暗 灰 色 土：焼土粒少量含む。
11 暗 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量含む。10層より明るい。
12 灰　色　土：粘土質。暗灰色粒・ブロック、酸化鉄少量含む。
13 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量含む。
14 暗 灰 色 土：酸化鉄少量含む。10層より明るい。
15 暗 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量含む。10・15層より明るい。
16 灰　色　土：粘土質。酸化鉄、灰オリーブ色粒・ブロック少量含む。
17 赤 褐 色 土：焼土層。
18 暗青灰色土：粘土質。オリーブ灰色粒、酸化鉄少量含む。



第8図　第1号住居跡・出土遺物

第2表　第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器　壺	−	−	−	ABIKN	灰黄褐	B	胴上部片	
2	弥生土器　壺	−	−	−	ABDHIKN	灰黄	B	胴部片	
3	弥生土器　甕	−	−	−	ABHIK	浅黄橙	B	頸〜胴片	
4	弥生土器　甕	−	−	−	ABDI	浅黄	B	胴部片	

ある。ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は2つ（炉1・炉2）確認された。炉1は床面中央からやや北西、炉2は床面中央からやや南東に位置する。平面プランはいずれも円形を呈するが、径は炉1が0.5m、炉2が0.2m前後を測る。炉1は床面からの深さ0.03mの浅い掘り込みが認められたが、炉2は床面上に焼土がまとまって確認されたにとどまる。

ピットは4つ確認された。いずれも南東壁沿いに位置することから入口施設に関連するものと思われる。

貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

出土遺物は少なく、図示可能な遺物は、弥生土器壺（1・2）、甕（3・4）4点のみである。すべて破片であり、覆土から検出された。

1・2は壺。1は胴上部片。刺突列が横位に巡り、上下は無文で横位のヘラナデ調整が施されている。2は胴部中段の破片。1条の沈線が横位に巡り、沈線上には分かりづらいがＬＲ単節縄文が施文されている。沈線以下は無文で横位のヘラナデ調整である。3・4は甕。3は頸部から胴上部にかけての破片、4は胴部中段の破片である。ともにＬＲ単節縄文が施文されている。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第2号住居跡（第9図）

平成9年度調査第2区の120−147グリッドに位置する。第2区で検出された唯一の遺構である。他の遺構との重複関係はみられない。検出できたのは南西壁付近一部のみであり、大半が調査区外にある。

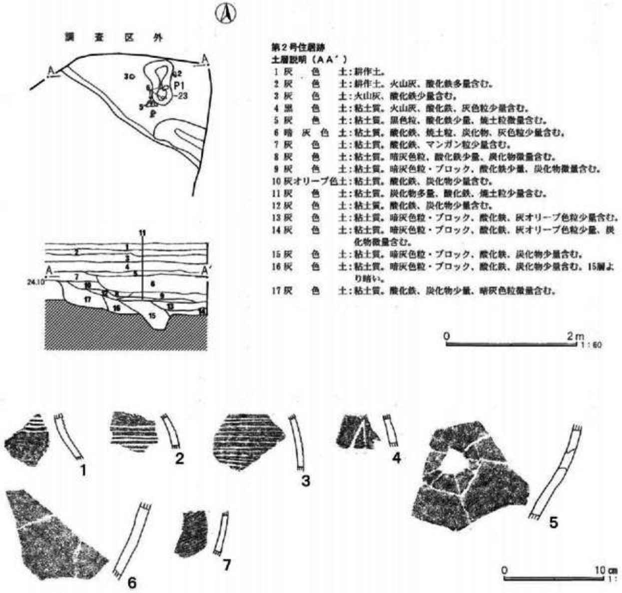
規模及び平面プランは不明である。確認面からの深さは0.2mと浅かったが、調査区境の土層断面観察では0.5m前後の深さであったことが確認された。床面は確認できた範囲では壁際が若干高かったが、その他はほぼ平坦であった。本住居跡の覆土は6・8〜17層が該当する。すべて粘土質であり、混入物のみられる層が多く認められたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁沿い東側では壁溝が確認された。幅は0.44mとやや幅広で、床面からの深さは0.05mを測る。その検出状況から全周はしない。壁溝の切れた北西側からはピットが1つ確認された。長軸0.68m、短軸0.45m、床面からの深さは0.23mを測る。平面プランは瓢箪状を呈する。壁沿いに位置することから入口施設に関連するものと思われる。

検出できた範囲が少なかったため、炉跡や貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺（1〜6）、甕（7）の7点のみである。すべて破片であり、2・3・5・6がＰ1上ないしその付近から、その他は覆土から検出された。

1〜6は壺。1は頸部から肩部にかけての破片。頸部に横位の平行沈線が巡り、以下は無文で横位のヘラナデ調整が施されている。2〜4は胴上部片。2は無文部下に横位の平行沈線が巡る。無文部は横位のヘラナデ調整である。3は全面に横位の平行沈線が巡る。4は沈線で鋸歯文が描かれており、鋸歯文内外は無文で横・斜位のヘラナデが施されている。5・6は胴下部片。同一個体である。ともに無文で横・斜位



第９図　第２号住居跡・出土遺物

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表

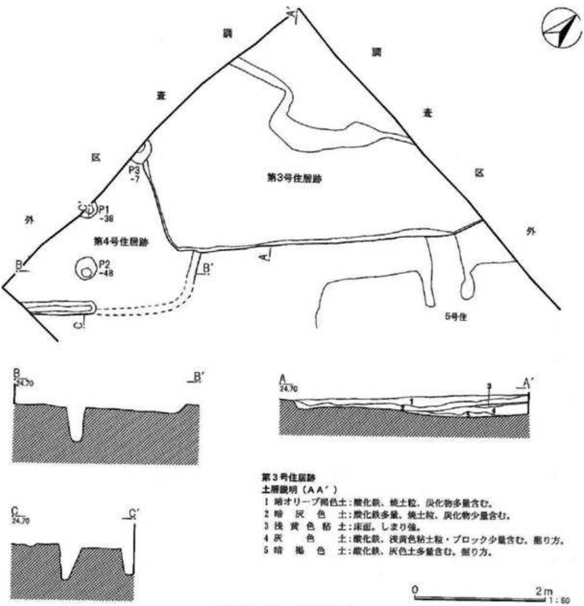
番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHKN	浅黄橙	B	頸～肩片	
2	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHKN	にぶい黄橙	B	胴上部片	
3	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIKN	灰白	B	胴上部片	
4	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIN	にぶい黄橙	B	胴上部片	
5	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKMN	灰黄褐	B	胴下部片	焼成後穿孔有。№6と同一個体。
6	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKMN	灰黄	B	胴下部片	№5と同一個体。
7	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	黒褐	B	胴下部片	

のヘラナデが施されており、５には径３㎝前後の焼成後穿孔が認められた。孔は内外面から開けられていた。７は甕の胴下部片。ＬＲ単節縄文が施文されている。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第３号住居跡（第10図）

平成12年度調査第３区の125･126－134･135グリッドに位置する。南西部で４号住居跡、南東部では



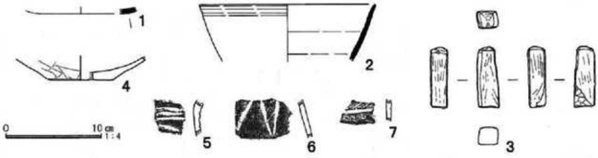
第10図　第3・4号住居跡

住居跡のカマド煙道部を切っている。検出できたのは南西隅を含む約1/3程度であり、カマドを含む大半が調査区外にある。

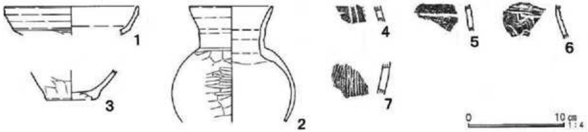
正確な規模は不明であるが、検出できた南東壁は現時点で4.82mを測る。平面プランについても不明であるが、おそらく正方形か縦長の長方形を呈し、主軸方向はN－49°－Wを指すと思われる。床面は中央付近がやや窪んでいたが、土層断面の観察からブロック土や灰色土を含む4・5層上に一部貼り床面（3層）が確認されたことから、ほぼ平坦であったと思われる。よって、確認面から床面までの深さは0.2m前後を測る。覆土は二層（1・2層）からなる。混入物が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

カマドをはじめ、壁溝や貯蔵穴、ピットは確認されなかった。

出土遺物（第11図）で本住居跡に伴う図示可能なものは、須恵器坏（1）、椀（2）、砥石（3）のみである。須恵器はともに破片であり、砥石のみ完形である。すべて覆土から検出された。また、本住居跡



第11図　第３号住居跡出土遺物



第12図　第４号住居跡出土遺物

第４表　第３号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	須恵器 坏	−	(0.65)	(10.2)	ADFHN	灰	B	底部20%	南比企産。
2	須恵器 椀	(18.7)	(6.0)	−	ALN	灰	B	口〜体20%	末野産。
3	砥 石	最大長6.45cm、最大幅2.2cm、最大厚1.8cm。重量43.9g。完形。砂岩製。五面使用。							
4	弥生土器 壺	−	(2.5)	(7.1)	ABCHIJN	にぶい黄橙	B	底部25%	
5	弥生土器 壺	−	−	−	ABHN	にぶい橙	B	頸部片	
6	弥生土器 壺	−	−	−	ACDMN	浅黄橙	B	胴上部片	
7	弥生土器 壺	−	−	−	ABDEI	にぶい黄橙	B	胴部片	

第５表　第４号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	土師器 坏	(14.2)	(3.0)	−	ABEK	橙	B	20%	
2	土師器小型壺	8.8	(12.3)	−	ABCHK	にぶい黄橙	B	60%	内面輪積痕有。
3	土師器 甕	−	(3.15)	(5.5)	ABDH	灰褐	B	底部70%	
4	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHN	にぶい黄橙	B	胴上部片	
5	弥生土器 壺	−	−	−	ABEHIN	にぶい黄褐	B	胴上部片	
6	弥生土器 甕	−	−	−	ABCHIK	にぶい黄橙	B	頸〜胴片	
7	弥生土器 甕	−	−	−	ABEGN	にぶい橙	B	胴下部片	

に伴う遺物で図示不可能なものに土師器北武蔵型坏の小片も検出されている。この他に流れ込みの遺物として弥生時代中期後半の壺（４〜７）も検出された。

１は坏の底部。底径は推定10.2cmを測り、底面調整は回転ヘラ削りである。南比企産。２は椀の口縁部から体部にかけての部位で、外にほぼ直線的に立ち上がる。末野産。３は五面使用の砥石。使用面に擦痕が残る。砂岩製。

４〜７は弥生時代中期後半の壺。４は底部。内外面ともヘラナデ調整である。甕の可能性もある。５は頸部片。平行沈線が横位に巡る。６は胴上部片。沈線で鋸歯文が描かれており、鋸歯文内外は無文で横・斜位のヘラナデが施されている。７は胴部中段の破片。１条の沈線が横位に巡り、沈線上にはＬＲ単節縄文が施文されている。沈線以下は無文で横位のヘラナデ調整である。

本住居跡の時期は、７世紀末から８世紀前半にかけての段階と思われる。

第４号住居跡（第10図）

平成12年度調査第３区の126・127－134グリッドに位置する。北東部を３号住居跡に切られており、大半が調査区外にある。南東隅付近のみの検出である。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は現時点で2.4m、東西は2.9mを測る。平面プランについても不明であるが、おそらく正方形か縦長の長方形を呈し、主軸方向はＮ－42°－Ｗを指すと思われる。確認面からの深さは最も深い所で0.14mを測るが、全体的に掘り込みが浅かったことから南東隅から南壁沿いにかけては一部壁を確認することができなかった。床面は東側に向かってやや傾く。覆土は図示できなかったが、焼土粒や炭化物を含む褐色系の土が認められたにとどまる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

南壁沿いからは壁溝が確認された。幅0.2m前後、床面からの深さは0.04mを測る。その検出状況から全周はしない。

ピットは３つ確認された。いずれも径0.3m前後を測るが、深さはＰ１・２が0.4m前後と比較的しっかりとした掘り込みであった。Ｐ１のみその位置から主柱穴と思われる。

検出できた範囲が少なかったため、カマドや貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第12図）で本住居跡に伴う図示可能なものは、土師器坏（１）、小型壺（２）、甕（３）のみである。すべて床面からやや浮いた状態で検出された。１・３は破片での検出である。２は底部を欠くが、残存状態は比較的良好であった。また、本住居跡に伴う遺物で図示不可能なものに土師器の坏蓋模倣坏や北武蔵型坏の小片も検出されている。この他に流れ込みの遺物として弥生時代中期後半の土器（４～６）や古墳時代前期の土師器甕（７）も検出された。

１はやや浅身の有段口縁坏。段は２段である。２は小型壺。口縁部は直線的に小さく開き、頸部はほぼ直立し、段を持つ。胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。調整は口縁部及び頸部の内外面が横ナデ、胴部外面はヘラナデ後に中段のみヘラミガキが施されている。胴部内面はヘラナデ及びナデ調整であり、上部には輪積痕がみられた。３は長胴甕の底部。外面はヘラ削り、内面はナデ調整である。

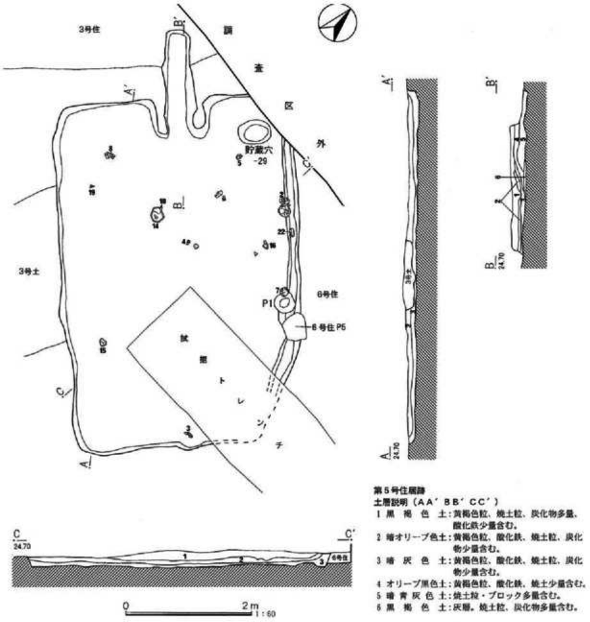
４～６は弥生時代中期後半の土器。４・５は壺の胴上部片。４は沈線で重四角文と思われる文様が描かれている。５は１条の沈線が横位に巡り、沈線上は無文で横位のヘラナデが施され、沈線以下はＲＬ単節縄文が施文されている。６・７は甕。６は頸部から胴上部にかけての部位。頸部には櫛歯状工具による簾状文が巡り、以下同一工具で波状文が描かれている。７は古墳時代前期の土師器甕。胴下部片である。縦・斜位のハケメが施されている。

本住居跡の時期は、７世紀後半と思われる。

第５号住居跡（第13図）

平成12年度調査第３区の125～127－135・136グリッドに位置する。北側にあるカマドの煙道部を３号住居跡に切られており、東側では６号住居跡を切っている。西壁中央付近では床面に影響はなかったが、壁の立ち上がりを３号土坑に切られている。北東隅は調査区外にあり、南東隅から床面中央付近にかけては試掘調査時に入れたトレンチにより欠く。

規模は長軸5.62m、短軸3.82mを測り、平面プランは縦長の長方形を呈する。主軸方向はＮ－43°－Ｗ



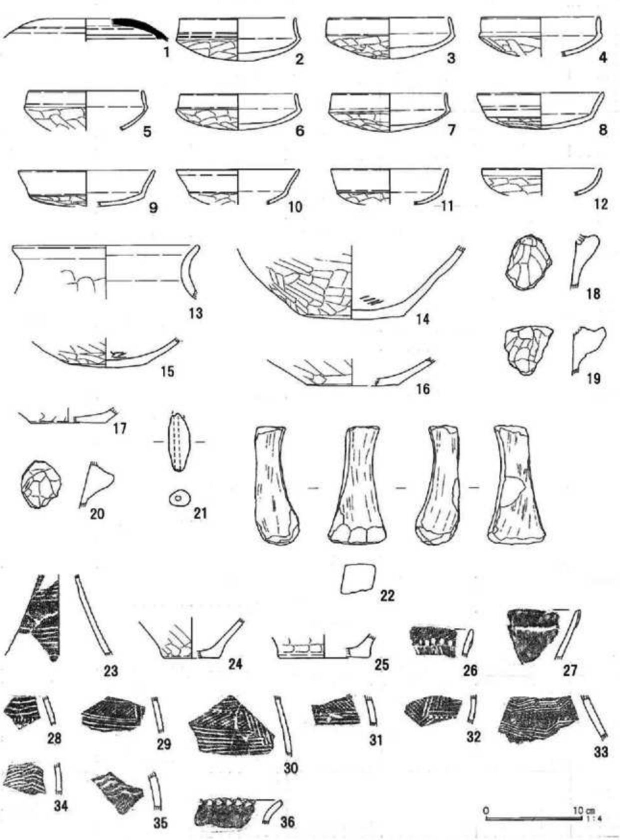
第13図　第５号住居跡

を指す。確認面からの深さは最大0.18mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は三層（１～３層）からなる。いずれの層にも混入物が認められたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

カマドは北壁中央に位置する。壁外への張り出しは1.07mを測り、袖部は両袖とも確認された。焚口部から煙道部までは平坦であり、先端で鋭角に立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、住居跡覆土１～３層下から焼土を含む４・５層と灰層である６層が確認されたにとどまる。

貯蔵穴は北東隅から検出された。長軸0.51m、短軸0.38mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.29mを測る。

壁溝は東壁沿いにのみ確認された。北東隅は調査区外にあるが、北壁沿いには認められず、また南東隅



第14図　第５号住居跡出土遺物

付近は試掘トレンチにより欠くが、南壁沿いには認められないことから全周はしない。幅は0.14～0.35m、床面からの深さは0.06mを測る。

第6表　第５号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器 蓋	-	(2.4)	-	ABFL	灰	B	天井20%	末野産。
2	土師器 坏	12.4	4.55	-	ABCGHK	明赤褐	B	95%	
3	土師器 坏	(13.0)	4.3	-	ABEHKN	にぶい橙	B	80%	
4	土師器 坏	(12.5)	(4.15)	-	ABDEIK	灰黄褐	B	30%	
5	土師器 坏	(12.3)	(4.2)	-	ABCHK	浅黄橙	B	20%	
6	土師器 坏	12.3	3.75	-	ABHIK	にぶい黄橙	B	90%	
7	土師器 坏	12.0	4.1	-	ABDHK	灰白	B	80%	
8	土師器 坏	(13.4)	3.8	-	ABCDHJK	橙	B	40%	
9	土師器 坏	(14.4)	(3.8)	-	ABDHK	灰白	B	70%	
10	土師器 坏	(13.0)	(3.7)	-	ABCGHJK	明赤褐	B	30%	
11	土師器 坏	(12.4)	(3.75)	-	ABEHN	橙	B	20%	
12	土師器 杯	(12.6)	(2.85)	-	ABCGIKN	橙	B	30%	
13	土師器 甕	(19.6)	(5.7)	-	ADEGHJN	赤褐	B	口～胴20%	
14	土師器 甕	-	(7.85)	11.0	ABCDHIKN	橙	B	胴～底100%	
15	土師器 甕	-	(3.6)	(8.0)	ABDGHJKM	にぶい黄橙	B	底部80%	
16	土師器 甕	-	(2.9)	(10.0)	ABDHJN	明褐	B	底部25%	
17	土師器 甕	-	(1.6)	(8.0)	ABCDHIN	浅黄橙	B	底部25%	
18	土師器 甑	-	-	-	ABHKN	橙	B	把手のみ	
19	土師器 甑	-	-	-	ABCDMN	橙	B	把手のみ	
20	土師器 甑	-	-	-	ABCHKN	橙	B	把手のみ	
21	土　錘	最大長(6.05)cm、最大径2.2cm、孔径0.6cm。重量(21.8)g。上端欠。							
22	砥　石	最大長12.5cm、最大幅6.1cm、最大厚4.5cm。重量311.2g。完形。砂岩製。四面使用。							
23	弥生土器 壺	-	-	-	ABDK	にぶい黄橙	B	頸部30%	
24	弥生土器 壺	-	(4.2)	(6.0)	ABCDIKMN	浅黄橙	B	底部30%	
25	弥生土器 甕	-	(2.5)	(9.6)	ABDHIN	にぶい黄橙	B	底部25%	
26	弥生土器 壺	-	-	-	ADEN	にぶい黄橙	B	口縁部片	
27	弥生土器 壺	-	-	-	ADHIK	黒褐	B	口～頸片	
28	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHIKM	外:黄橙 内:灰	B	肩部片	
29	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	暗灰黄	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
30	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIKN	にぶい黄橙	B	胴上部片	
31	弥生土器 壺	-	-	-	ADGIKN	黄灰	B	胴上部片	
32	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIK	黄灰	B	胴部片	
33	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIJ	にぶい黄橙	B	胴上部片	
34	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIJK	にぶい黄橙	B	胴上部片	
35	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKMN	浅黄	B	胴上部片	
36	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHKN	にぶい黄橙	B	口縁部片	

本住居跡に伴うピットは、東壁沿い中央付近から１つ確認された。その位置から柱穴とは考えにくい。径は0.3m前後、床面からの深さは0.15mを測る。主柱穴と思われるピットは確認されなかった。

出土遺物（第14図）は、須恵器蓋（1）、土師器坏（2～12)、甕（13～17)、甑（18～20)、土錘（21)、砥石（22）がある。２～５・７・８・14～16・18・19は床面直上、６は貯蔵穴、22は壁溝内、その他は覆土から検出された。また、この他に弥生時代中期後半の土器（23～36）も検出された。

１は内面にかえりの付く須恵器蓋。末野産。本住居跡には伴わないものであり、３号住居跡からの流れ込みと思われる。土師器は12以外が本住居跡に伴う。２～12は坏。２～７は坏身模倣坏、８は有段口縁坏、９～11は坏蓋模倣坏、12は北武蔵型坏である。２～７の坏身模倣坏は、残存状態が比較的良好である。口径は12.5cm前後を測るが、やや深身のもの（2・4・5）とやや浅身のもの（3・6・7）がある。４のみ口縁部が内傾せず、ほぼ直立に近い。８の有段口縁坏は段が沈線化しており、体部と底部の境にある稜が弱い。９～11の坏蓋模倣坏は、法量や器形にややバラツキがある。９は浅身であるが、10・11はやや深身である。また、９・10は口縁部がやや外反しながら立ち上がるのに対し、11はほぼ直線的に立ち

上がる。12の北武蔵型坏は1と同じく3号住居跡からの流れ込みと思われる。13〜17は甕。13は口縁部から胴上部にかけて、14は胴下部から底部にかけての部位、15〜17は底部である。いずれも器壁が厚手である。18〜20は甑。把手部分のみの検出である。21は土錘。上端を欠くが、その形態から中段が膨らむタイプである。22は四面使用の砥石。使用面に擦痕が残る。砂岩製。

23〜36は弥生時代中期後半の土器。23・24・26〜35は壺。23は頸部。上下に平行沈線が横位に巡り、間は無文で斜位のヘラナデが施されている。24は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。甕の可能性もある。26は口縁部片。やや肥厚した口縁部は無文で横位のヘラナデが施されており、直下に刺突列が巡る。頸部には縦位の平行沈線が等間隔に垂下する。27は口縁部から頸部にかけての部位。複合口縁部も含めて全面無文であり、口縁部は横位、頸部は斜位のヘラナデが施されている。28は肩部片。横位に巡る平行沈線下に刺突列が刻まれている。29〜32は重四角文が描かれる一群。28〜31は胴上部片、32は胴部中段の破片である。29・30は重四角文内にＬＲ単節縄文、31はＲＬ単節縄文が充填されており、30のみ縄文上に刺突列が加わる。31は重四角文としたが、異なる可能性もある。30・32は２本一単位で重四角文が描かれており、32は下部の沈線に刺突列が加わり、重四角文外にはＲＬ単節縄文が施文されている。33〜35は波状文が描かれる一群。すべて胴上部片である。33はＲＬ単節縄文、34はＬＲ単節縄文を地文として２本一単位の波状文が複数描かれている。33は上下に間隔を空けて２条ずつ、34は連続で描かれている。35は波状文下にＬＲ単節縄文が施文されている。25・36は甕。25は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。壺の可能性もある。36は口縁部片。端部に刻みを持つ。無文で内外面ともに横位のヘラナデが施されている。

本住居跡の時期は、6世紀後半と思われる。

第６号住居跡（第15図）

平成12年度調査第３区の125・126−135〜137グリッドに位置する。北側を５号住居跡に切られており、西側は試掘調査時に入れたトレンチにより欠く。そして、東側は調査区外にあるため、検出できたのは南壁の一部と床面のみである。また、南壁下付近には弥生時代中期後半段階の９号住居跡が位置しているが、本住居跡は９号住居跡埋没後に構築されている。

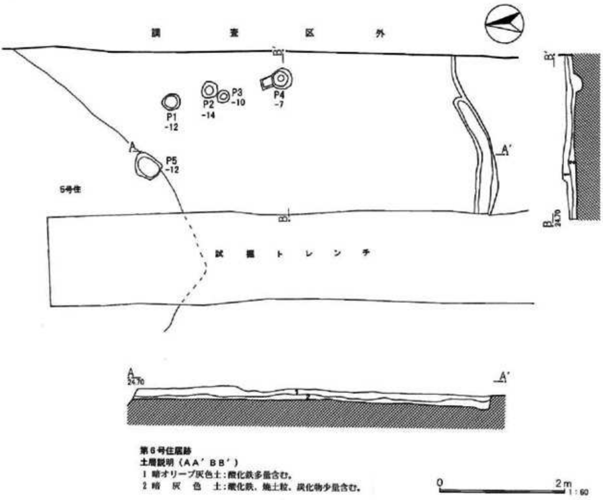
正確な規模は不明であるが、検出できた南北は現時点で6.97mを測る。平面プランについても不明であるが、おそらく正方形か縦長の長方形を呈し、主軸方向はＮ−９°−Ｗを指すと思われる。確認面からの深さは0.15m前後を測る。床面はほぼ平坦であった。覆土は二層（1・2層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁溝は南壁沿いから検出されたが、調査区境付近で途切れているため、全周はしない。幅は0.23〜0.35m、床面からの深さは0.03mを測る。

ピットは５つ確認された。Ｐ４のみ北側にテラスが付くが、概ね径0.25m前後のものが主体となる。床面からの深さはいずれも0.1m前後と浅く、その位置から主柱穴ではないと思われる。

カマドや貯蔵穴は確認されなかった。

本住居跡からは土師器小片が若干検出されたが図示できる遺物はなく、また時期を特定し得るものもなかった。よって、本住居跡の時期は５号住居跡との新旧関係から６世紀後半以前の古墳時代後期としか言えない。



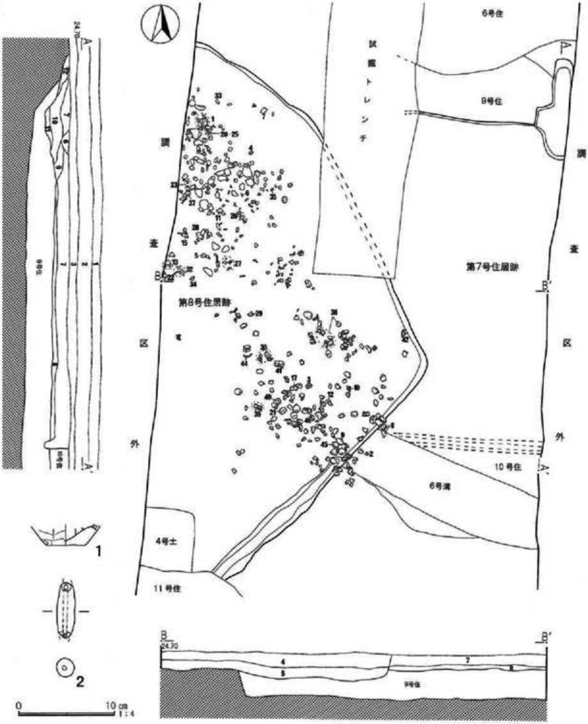
第15図　第6号住居跡

第7号住居跡（第16図）

平成12年度調査第3区の126−137・138グリッドに位置する。カマドを含めた西側が調査区外にあり、東側は8号住居跡に切られ、試掘調査時のトレンチにより大半を欠く。南側は平面プランの確認が困難であったことから壁を検出することはできなかったが、調査区境での土層断面観察から本住居跡の南側に位置する10号住居跡を切っていることが確認された。また、南側を走る6号溝跡とは切り合いを確認できなかったため、新旧関係は不明である。本住居跡も6号住居跡と同じく下に弥生時代中期後半段階の9号住居跡が位置しているが、本住居跡が9号住居跡埋没後に覆土上部を切って構築されている。

南壁を確認できなかったため正確な規模は不明であるが、南北は5.25mを測る。平面プランについても不明であるが、おそらく正方形か縦長の長方形を呈すると思われる。主軸方向はN−7°−Eを指し、ほぼ東西南北に軸が合っている。確認面からの深さは0.2m前後を測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと7層のみであり、8層はしまりが強く、本住居跡の床面と思われる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

カマドは北壁に設けられているが、北壁のどの位置にあるかは不明である。壁外への張り出しは1.08mを測る。袖部は確認されなかった。焚口部から煙道部は土坑状の掘り込みとなっており、先端で緩やか



第7・8号住居跡
土層説明（AA′ BB′）
1 灰オリーブ色土：耕作土。
2 暗 灰 黄 色 土：耕作土。火山灰多量含む。
3 暗 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒少量含む。
4 黄 灰 色 土：遺物多量、酸化鉄、焼土粒、炭化物少量含む。
5 黄 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒、炭化物少量含む。
6 オリーブ黒色土：酸化鉄、焼土粒少量含む。
7 黄 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒微量含む。
8 黄 色 土：床面。しまり強。
9 黄 灰 色 土：黄色土。酸化鉄少量含む。7層より暗い。
10 褐 灰 色 土：焼土粒多量、酸化鉄少量含む。
11 黄 灰 色 土：酸化鉄少量、焼土粒微量含む。カマド掘り方。
12 暗 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒、炭化物少量含む。

0 2 m 1:60

第16図　第7・8号住居跡・第7号住居跡出土遺物

第７表　第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	土師器 甕	-	(2.2)	(4.1)	ABHKN	にぶい赤褐	B	底部50%	
2	土 錘	最大長(5.8)cm、最大径1.9cm、孔径0.45cm。重量(21.5)g。上下端欠。							

に立ち上がる。床面からの深さは0.2mを測る。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、住居跡覆土７層下に焼土粒や炭化物を含む層（9・10・12層）が確認され、その下にカマド掘り方と思われる11層が認められた。

貯蔵穴や壁溝、ピットは確認されなかった。

出土遺物は少なく、図示可能な遺物は土師器甕（1）、土錘（2）のみである。ともに覆土から検出された。また、本住居跡に伴う遺物で図示不可能なものに土師器の有段口縁坏や北武蔵型坏の小片も検出されている。

１は長胴甕の底部。調整は外面がヘラ削り、内面がヘラナデである。２は土錘。中段の膨らみが小さい。上下端を欠く。

本住居跡の時期は、７世紀後半と思われる。

第８号住居跡（第16図）

平成12年度調査第３区の126・127－137・138グリッドに位置する。東側で７号住居跡と６号溝跡を切っており、北東壁の一部は試掘調査時のトレンチにより欠く。南側は発掘調査時点では11号住居跡と４号土坑に切られていると思われたが、整理調査による出土遺物等の比較の結果、本住居跡が11号住居跡と４号土坑を切っていたと思われる。西側は調査区外にある。南東側に位置する10号住居跡とは、直接的な切り合い関係を把握することができなかったが、後述する本住居跡の遺物の出土状況や周辺遺構との新旧関係などから本住居跡の方が新しいと思われる。本住居跡も６・７号住居跡同様、下に弥生時代中期後半段階の９号住居跡が位置しているが、本住居跡が９号住居跡埋没後に構築されている。

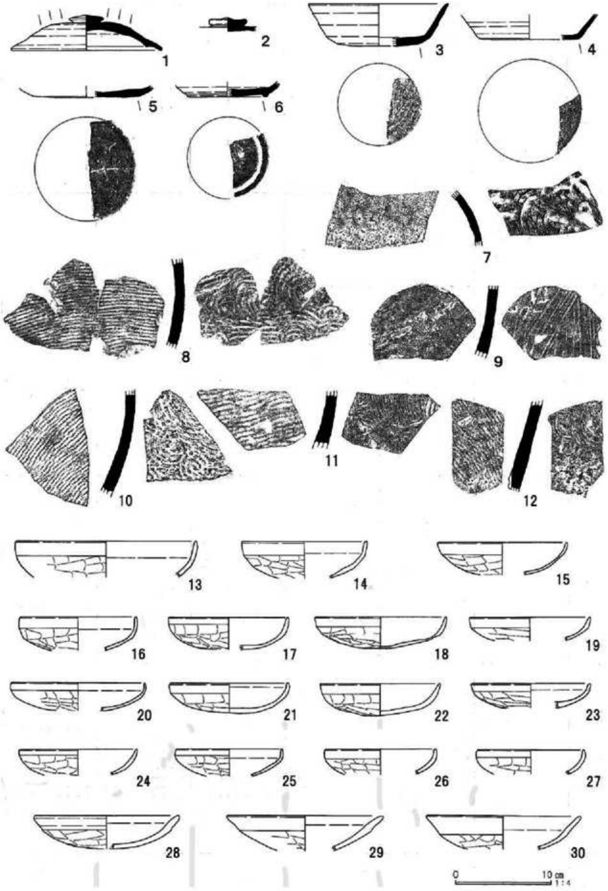
検出できたのは、北東壁と南東壁を含む全体の約1/2程である。よって、正確な規模は不明であるが、現時点で北東壁は6.3m、南東壁は4.67mを測る。平面プランはおそらく正方形を呈し、主軸方向はN－42°－Wを指すと思われる。確認面からの深さは最大0.45mを測る。床面は７号住居跡との重複箇所でやや凹凸がみられたが、その他はほぼ平坦であった。覆土は二層（4・5層）からなる。ともに自然堆積と思われるが、上層の４層からは廃棄されたと思われる遺物が広範囲にわたって大量に出土した。

カマドは検出されなかったが、北東壁にみられなかったことから北西壁沿いに設けられていたと思われる。

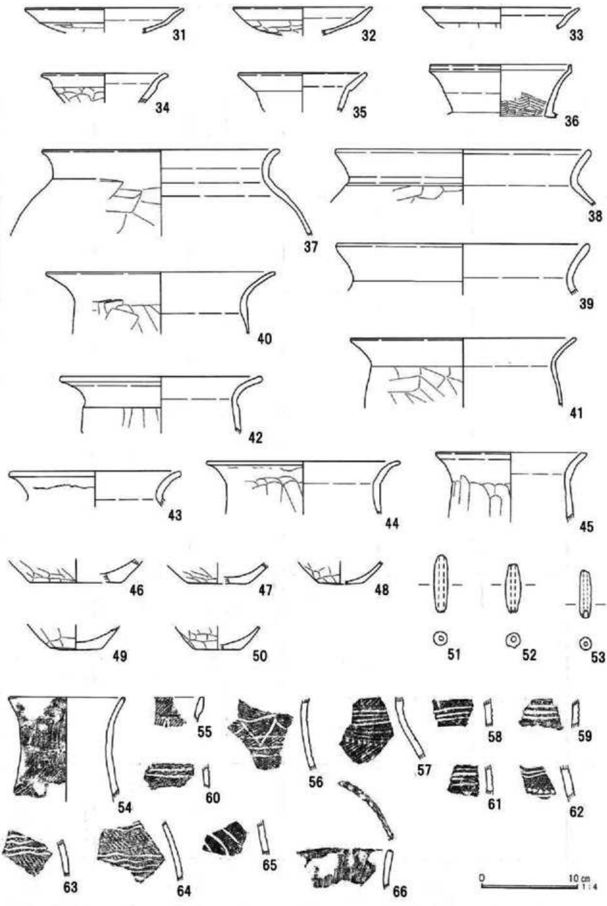
壁溝は南東壁沿いでのみ確認されたが、東隅手前で途切れている。幅0.15～0.35m、床面からの深さは0.09mを測る。

貯蔵穴やピットは確認されなかった。

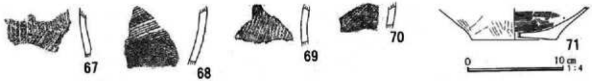
出土遺物（第17～19図）は、須恵器蓋（1・2）、坏（3～6）、甕（7～12）、土師器坏（13～27）、皿（28～33）、椀（34）、壺（35・36）、甕（37～50）、土錘（51～53）がある。廃棄されたものであることから欠損したものがほとんどである。大半が４層から検出された。この他に流れ込みの遺物として弥生時代中期後半の土器（54～70）や古墳時代前期の土師器壺（71）も検出された。前者は隣接する９号住居跡からの流れ込みと思われる。



第17図　第8号住居跡出土遺物（1）



第18図　第８号住居跡出土遺物（2）



第19図　第８号住居跡出土遺物（3）

第８表　第８号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	須恵器 蓋	16.0	3.75	-	ABDLN	灰白	B	80%	末野産。
2	須恵器 蓋	-	(1.4)	-	ABDHL	明青灰	B	つまみのみ	末野産。
3	須恵器 坏	(14.8)	4.5	(8.6)	ABGHLN	灰白	B	20%	末野産。
4	須恵器 坏	-	(2.6)	(10.6)	ABHL	灰	B	体～底20%	末野産。
5	須恵器 坏	-	(1.2)	(11.0)	ABHLN	灰白	B	底部45%	末野産。
6	須恵器 坏	-	(1.6)	(8.6)	ABFHN	灰白	B	底部30%	南比企産。
7	須恵器 甕	-	-	-	ABDLN	灰	B	肩部片	末野産。外面自然釉付着。
8	須恵器 甕	-	-	-	ABHLN	褐灰	B	胴部片	末野産。
9	須恵器 甕	-	-	-	ABN	灰白	B	胴下部片	産地不明。
10	須恵器 甕	-	-	-	ABDLN	灰	B	胴下部片	末野産。
11	須恵器 甕	-	-	-	ABHL	褐灰	A	胴下部片	末野産。
12	須恵器 甕	-	-	-	ABN	灰	B	胴下部片	産地不明。内面自然釉付着。
13	土師器 坏	(19.1)	(3.85)	-	ABEHIKN	橙	B	10%	
14	土師器 坏	(13.4)	(3.9)	-	ABCDHIK	にぶい橙	B	25%	
15	土師器 坏	(13.8)	(3.45)	-	ABDIKM	橙	B	25%	
16	土師器 坏	(12.4)	3.55	-	ABDHKN	橙	B	30%	
17	土師器 坏	(12.8)	(3.4)	-	ABCHJKN	橙	B	35%	
18	土師器 坏	(14.0)	3.5	-	ABCGHKN	にぶい橙	B	80%	
19	土師器 坏	(12.9)	(2.45)	-	ABDGHIK	橙	B	20%	
20	土師器 坏	(14.2)	(2.95)	-	BCGHJN	浅黄橙	B	25%	
21	土師器 坏	(12.6)	3.2	-	ABHKN	橙	B	40%	
22	土師器 坏	12.6	3.45	-	ABHIK	橙	B	50%	
23	土師器 坏	(11.8)	(2.55)	-	ABCHIKN	にぶい黄橙	B	30%	
24	土師器 坏	(12.6)	2.75	-	ABCHIKN	橙	B	25%	内外面摩耗顕著。
25	土師器 坏	(11.4)	(2.9)	-	ABHN	橙	B	20%	
26	土師器 坏	(11.9)	(2.65)	-	ABHK	橙	B	25%	
27	土師器 坏	(11.4)	(2.6)	-	ABCIJKN	橙	B	20%	
28	土師器 皿	(15.4)	3.5	-	ABEHKN	橙	B	40%	
29	土師器 皿	(16.6)	(3.7)	-	ABCH	橙	B	20%	
30	土師器 皿	(16.4)	3.55	-	ABHIKN	にぶい橙	B	30%	
31	土師器 皿	(17.8)	(2.6)	-	ABCEHIJKN	橙	B	20%	
32	土師器 皿	14.8	(3.1)	-	ABHKN	橙	B	40%	
33	土師器 皿	(16.6)	(2.25)	-	ABCHIKN	橙	B	30%	
34	土師器 椀	(13.4)	(3.1)	-	ACGHN	明赤褐	B	30%	
35	土師器 壺	(13.6)	(4.1)	-	ABDHIKMN	橙	B	口～頸20%	
36	土師器 壺	14.8	(5.6)	-	ABCHKN	橙	B	口～頸90%	
37	土師器 甕	(24.0)	(9.1)	-	ABDHIKN	橙	B	口～胴20%	
38	土師器 甕	(27.2)	(5.8)	-	ABDHIJKN	橙	B	口～胴20%	
39	土師器 甕	(27.0)	(5.35)	-	AEHIKN	橙	B	口縁部20%	
40	土師器 甕	(24.4)	(6.5)	-	ABHIMN	橙	B	口～胴20%	
41	土師器 甕	(24.0)	(7.3)	-	ABCGHKN	橙	B	口～胴20%	
42	土師器 甕	(21.6)	(6.0)	-	ABCDIKM	にぶい橙	B	口～胴20%	
43	土師器 甕	(18.2)	(3.75)	-	ABCHKN	明褐	A	口縁部25%	
44	土師器 甕	(20.6)	(5.6)	-	ABCHIKN	明赤褐	B	口～胴25%	
45	土師器 甕	(16.0)	(7.4)	-	ACDHKN	灰褐	A	口～胴25%	
46	土師器 甕	-	(2.5)	(9.5)	ABEGHKN	にぶい黄橙	B	底部25%	
47	土師器 甕	-	(2.2)	(6.4)	ABCDHJN	にぶい黄橙	B	底部25%	
48	土師器 甕	-	(2.4)	(5.8)	ABDHKN	にぶい黄橙	B	底部30%	
49	土師器 甕	-	(2.6)	5.4	ABCDGHN	にぶい橙	B	底部100%	
50	土師器 甕	-	(2.5)	(5.0)	ABHK	橙	B	底部25%	
51	土 錘	最大長6.0cm、最大径1.45cm、孔径0.5cm。重量12.5g。完形。							
52	土 錘	最大長5.2cm、最大1.6径cm、孔径0.5cm。重量(12.8)g。ほぼ完形。							

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
53	土 錘	最大長5.0cm、最大径1.25cm、孔径0.45cm。重量7.4g。完形。							
54	弥生土器 甕	(12.3)	(11.0)	-	ABEHIKN	褐	B	口～胴25%	№66・67と同一個体。
55	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHI	にぶい黄橙	B	口～頸片	
56	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIJK	灰黄	B	頸部片	
57	弥生土器 壺	-	-	-	ABCGHJK	浅黄橙	B	頸～肩片	
58	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIN	にぶい黄褐	B	胴部片	
59	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい赤褐	B	胴部片	
60	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄橙	B	胴部片	
61	弥生土器 壺	-	-	-	ABHK	にぶい黄橙	B	胴部片	
62	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙	A	胴上部片	
63	弥生土器 壺	-	-	-	ABCEHIJKN	にぶい橙	B	胴上部片	
64	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐	B	胴上部片	
65	弥生土器 壺	-	-	-	ABGHIN	黒褐	B	胴上部片	
66	弥生土器 甕	-	-	-	ACDEHIKN	灰黄褐	B	口縁部片	№54・67と同一個体。
67	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄褐	B	胴下部片	№54・66と同一個体。
68	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外:黄橙 内:灰黄褐	B	胴下部片	
69	弥生土器 甕	-	-	-	ABDGHIKN	にぶい黄橙	B	頸部片	
70	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKN	黒褐	B	胴部片	
71	土師器 壺	-	(3.4)	8.8	ABDHN	にぶい黄橙	B	底部70%	古墳時代前期。外面摩耗顕著。

須恵器は末野産が多い。１は口縁部内面にかえりが付く蓋。残存状態は比較的良好であった。２は蓋のつまみ部分。坏は全形が分かるものは３のみであるが、口径15cm、器高4.5cm、底径10cm前後を測るものが主体となる。口縁部から体部はほぼ直線的に開き、底面は全面回転ヘラ削りである。６のみ高台が付く。唯一の南比企産である。甕はすべて破片である。７・８・10～12は外面にタタキ、内面には円形や半円形のあて具痕が残る。９のみ外面が回転ナデ、内面はヘラナデ調整である。

土師器は坏、皿、椀、壺、甕と多くの器種が認められた。坏はすべて北武蔵型坏である。口径13cm前後のものが主体となるが、19cmを超える大型のもの（13）、14cm代のもの（18･20）、12cm以下の小型のもの（23･25～27）など法量にバラエティがみられた。皿は口径に違いがあるが、坏蓋模倣坏を扁平化したものが主体となる。28のみ他と異なり、北武蔵型暗文坏を扁平化した器形に似る。34は調整技法が坏や皿と同じであるが、口縁部が大きく外反し、器高が高いことから椀とした。35･36は壺の口縁部から頸部にかけての部位。35は口縁部が直線的に開くが、36は受け口状を呈する。調整はともに内外面横ナデ調整であるが、36は頸部内面下部にハケメが残る。甕は全形を知り得るものはないが、丸胴を呈するもの（37～39･46）と長胴のもの（40～45･47～50）に分けられる。前者は口径が20cm以上でほぼ同じ数値を測るが、後者は24cm代のもの（40･41）、20cm前後のもの（42～44）、16cmの小型のもの（45）などバラエティがみられた。51～53は土錘。いずれも中段の膨らみが小さい。

54～70は弥生時代中期後半の土器。55～65は壺。55は口縁部から頸部にかけての部位。複合口縁部から頸部までＬＲ単節縄文が施文され、頸部には沈線で鋸歯文が描かれている。56は頸部片。上下が無文で間に上から１条の波状文、鋸歯文、平行沈線が描かれている。無文部は横位のヘラナデ調整であり、鋸歯文内にはＬＲ単節縄文が充填されている。57は頸部から肩部にかけての部位。段を有する頸部と肩部下部にＬＲ単節縄文が施文され、間に上から平行沈線と刺突列が横位に巡る。58～61は平行沈線が描かれる一群。すべて胴部中段の破片である。58は平行沈線上に縦位の沈線が見える。59は沈線がやや太目である。60は分かりづらいが、地文としてＬＲ単節縄文が施文されている。61は平行沈線下にＬＲ単節縄文が施文されている。62～64は波状文が描かれる一群。すべて胴上部片である。62は上部に２本一単位の波状文が描かれ、以下は無文部を挟んで刺突列、横位の沈線が巡る。無文部は斜位のヘラナデ調

整である。63・64は地文にＲＬ単節縄文を施文しており、63は上部に２本一単位の波状文、64は上下に波状文が複数描かれている。65は沈線で渦巻文が描かれており、沈線間にはＬＲ単節縄文が充填されている。54･66～70は甕。54･66～68は櫛歯状工具により文様が描かれる一群。54･66･67は同一個体であり、９号住居跡第21図43･44･46と同一個体であるが、接合関係はみられない。口縁端部には押捺がみられた。櫛歯はハケメに近く、口縁部から胴上部までは縦位、胴下部以下は斜位に施されており、横位の羽状文が描かれている。68は胴下部片。櫛歯が斜位に施文されており、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。69･70はＬＲ単節縄文が施文される一群。69は頸部片、70は胴部中段の破片である。71は古墳時代前期の土師器壺の底部。外面はヘラナデ後所々ヘラミガキを施している。内面はハケメ調整である。

本住居跡の時期は、８世紀初頭から前半にかけての段階と思われる。

第９号住居跡（第20図）

平成12年度調査第３区の126･127－137･138グリッドに位置する。本住居跡の上には古墳時代後期以降の６～８･10号住居跡と６号溝跡が位置しているが、これらの遺構は本住居跡埋没後に構築されている。北壁から床面中央付近までは試掘調査時のトレンチにより欠き、東側は調査区外にある。

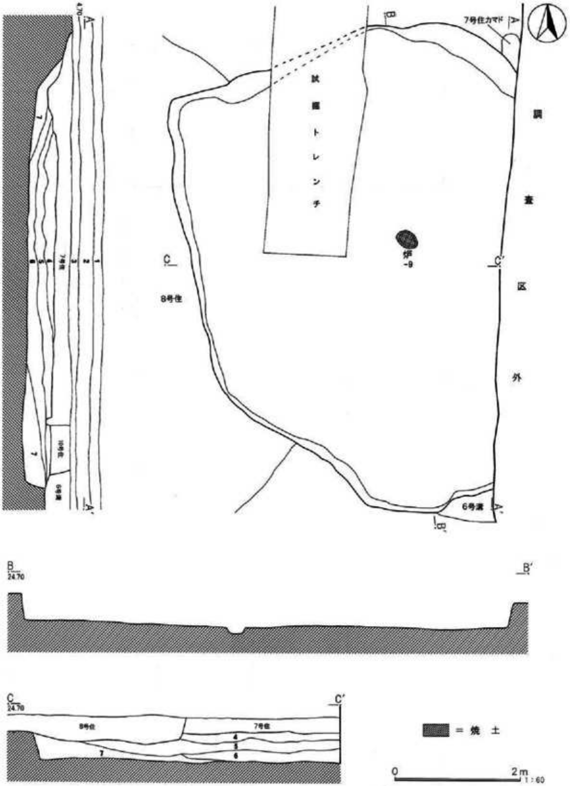
規模は長軸となる南北が7.62mを測るが、短軸となる東西は不明である。平面プランはいびつであるが、隅丸長方形に近い形状になると思われる。主軸方向はＮ－12°－Ｗを指す。確認面からの深さは最大0.46mを測る。床面はほぼ平坦であった。覆土は四層（４～７層）からなる。下層（６・７層）に混入物がみられた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央からやや北側に位置する。長軸0.36m、短軸0.25mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.09mを測る。覆土は図示できなかったが、焼土層のみであった。

貯蔵穴や壁溝、ピットは確認されなかった。

出土遺物（第21図）は、弥生土器壺（１～５･７～42）、甕（43～52）、高坏（６）、椀（53）がある。全形を知り得るものはなく、ほとんどが破片である。すべて覆土から検出された。なお、試掘調査出土遺物（第58図）のうち、第３区のトレンチから出土した９～11は本住居跡に伴う可能性が高い。９～11の詳細については、後述する試掘調査出土遺物の項を参照のこと。

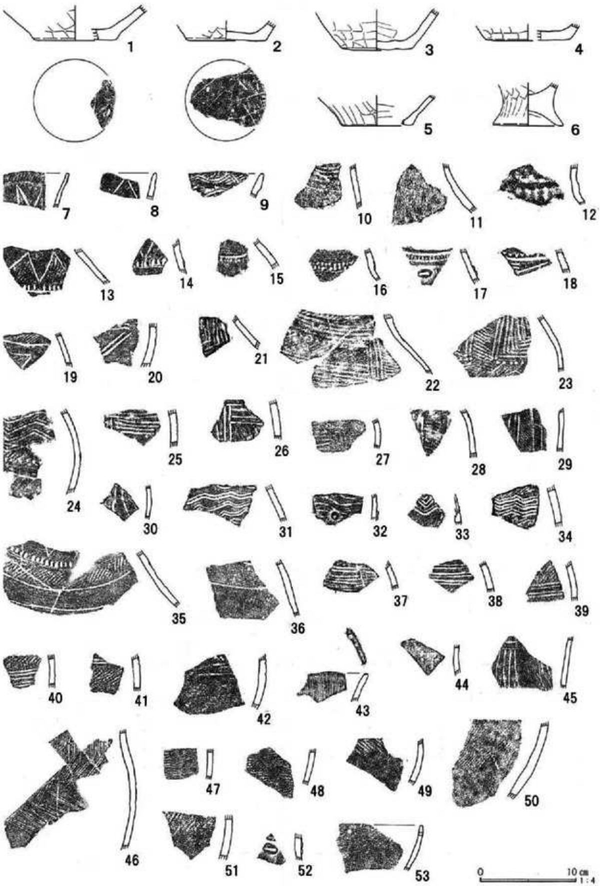
１～５･７～42は壺。１～５は底部。壺としたが、甕の可能性もある。１･２は底面に木葉痕が残る。内外面ともにヘラナデ調整である。７・９は口縁部から頸部にかけての部位。７はやや受け口状を呈する口縁部にＬＲ単節縄文が施文され、頸部には沈線で鋸歯文が描かれている。鋸歯文内に縄文は施文されていない。９は複合口縁部に地文にＬＲ単節縄文が施文され、頸部とともに２本一単位の波状文が描かれている。８は口縁部片。沈線で鋸歯文が描かれており、分かりづらいが内部にはＬＲ単節縄文が充填されている。10は頸部片。横位の平行沈線下は無文で横･斜位のヘラナデ調整が施されている。11･12は肩部片。11は全面無文で斜位のヘラナデ調整が施されている。12はやや低い突帯が１条巡り、その上下は無文で横･斜位のヘラナデが施されている。13～17は刺突列が巡る胴上部片。13･14は沈線による鋸歯文下に刺突列が巡る。鋸歯文内にはＬＲ単節縄文が充填されている。15･16は刺突列の上下が無文である。15は刺突列上に１条の沈線が横位に巡り、16は刺突列が２列施文されている。無文部は15が横位、16が横・斜位のヘラナデである。17は横位に巡る平行沈線間に刺突列が刻まれており、その下には単孔のボタン状貼付文が付けられている。18～20は重三角文が描かれる一群。18･19は胴上部片、20は胴部中段の破



第9号住居跡
土層説明（AA′ CC′）

1 灰オリーブ色土：耕作土。
2 暗灰黄色土：耕作土。火山灰多量含む。
3 暗灰色土：酸化鉄、焼土粒少量含む。
4 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
5 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。4層より暗い。
6 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粘土少量含む。
7 灰白色粘土：酸化鉄少量、炭化物微量含む。

第20図　第9号住居跡



第21図　第9号住居跡出土遺物

第９表　第９号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器 壺	−	(3.7)	(8.7)	ABEHIJKN	灰黄褐	B	底部25%	底面木葉痕有。
2	弥生土器 壺	−	(2.1)	(8.4)	ABGHIJKN	浅黄	B	底部80%	底面木葉痕有。
3	弥生土器 壺	−	(4.35)	(7.7)	ABDHIN	淡黄	B	底部40%	
4	弥生土器 壺	−	(1.7)	(8.9)	ABHIKN	にぶい黄橙	B	底部30%	
5	弥生土器 壺	−	(3.2)	(7.6)	ABEGHIJN	にぶい黄橙	B	底部35%	
6	弥生土器高坏	−	(4.6)	(7.4)	ABDGIJKMN	にぶい橙	B	脚部25%	
7	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIJKN	灰黄	B	口〜頸片	
8	弥生土器 壺	−	−	−	AGHIJKN	褐灰	B	口縁部片	
9	弥生土器 壺	−	−	−	ABCHIJK	にぶい黄橙	B	口〜頸片	
10	弥生土器 壺	−	−	−	ABEIKN	黄灰	B	頸部片	
11	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIK	黄灰	B	肩部片	
12	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIKN	外:浅黄 内:灰黄	B	肩部片	
13	弥生土器 壺	−	−	−	ABEHIJKN	灰黄褐	B	胴上部片	
14	弥生土器 壺	−	−	−	AHIKN	暗灰黄	B	胴上部片	
15	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIKN	浅黄橙	B	胴上部片	
16	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIKN	暗灰黄	B	胴上部片	
17	弥生土器 壺	−	−	−	ABGIJN	黄灰	B	胴上部片	
18	弥生土器 壺	−	−	−	ABCIKN	灰黄褐	A	胴上部片	
19	弥生土器 壺	−	−	−	ABCIKN	にぶい黄褐	B	胴上部片	
20	弥生土器 壺	−	−	−	ABHKN	黒褐	B	胴部片	
21	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIKN	褐灰	B	肩部片	
22	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIJK	にぶい黄橙	B	肩〜胴片	
23	弥生土器 壺	−	−	−	ABCGIKN	にぶい黄橙	A	胴上部片	
24	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIKN	にぶい黄橙	B	胴部片	外面摩耗顕著。
25	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIKN	灰黄	B	胴部片	
26	弥生土器 壺	−	−	−	ABCHIJN	灰黄褐	B	胴部片	
27	弥生土器 壺	−	−	−	ABDGIKN	外:黄橙 内:褐灰	B	胴部片	外面摩耗顕著。
28	弥生土器 壺	−	−	−	ABDGIJKN	にぶい黄橙	B	胴部片	
29	弥生土器 壺	−	−	−	ABEHIKN	にぶい黄橙	B	胴部片	
30	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIK	にぶい黄橙	B	胴部片	外面摩耗顕著。
31	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIJKN	褐灰	B	胴上部片	
32	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIJKN	灰黄褐	B	胴部片	
33	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIKN	暗灰	B	胴部片	
34	弥生土器 壺	−	−	−	ABGHIKN	灰黄褐	B	胴部片	
35	弥生土器 壺	−	−	−	ABEIJKN	褐灰	B	肩〜胴片	
36	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIKN	灰黄褐	B	胴上部片	
37	弥生土器 壺	−	−	−	ABEHIKN	にぶい黄橙	A	胴上部片	
38	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIK	暗灰黄	B	胴上部片	
39	弥生土器 壺	−	−	−	ABCHIN	灰白	B	胴上部片	
40	弥生土器 壺	−	−	−	ABDGHIK	灰黄	B	胴部片	
41	弥生土器 壺	−	−	−	ABCHIN	灰黄褐	B	胴部片	
42	弥生土器 壺	−	−	−	ABGHIKN	灰黄褐	B	胴下部片	
43	弥生土器 甕	−	−	−	ABDHIKN	灰黄褐	B	口縁部片	№44・46と同一個体。
44	弥生土器 甕	−	−	−	ABGHIKN	にぶい黄橙	B	頸部片	№43・46と同一個体。
45	弥生土器 甕	−	−	−	ABDEHIKN	灰黄	B	頸部片	
46	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIJ	黒褐	B	頸〜胴片	№43・46と同一個体。
47	弥生土器 甕	−	−	−	ABDGHIK	褐灰	B	胴部片	
48	弥生土器 甕	−	−	−	ABGHIK	黒褐	B	胴部片	
49	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIKN	灰黄	A	胴下部片	
50	弥生土器 甕	−	−	−	ABDGHIN	浅黄	B	胴下部片	
51	弥生土器 甕	−	−	−	AHIKN	褐灰	B	胴下部片	
52	弥生土器 甕	−	−	−	ABIJ	暗灰黄	B	胴上部片	
53	弥生土器 椀	−	−	−	ABDGIJK	浅黄	B	口縁部片	焼成前穿孔有。

片である。18は重三角文上に刺突列が巡る。19は重三角文上にＬＲ単節縄文が施文されている。20は地文にカナムグラ系の擬縄文が施文されている。21〜30は重四角文が描かれる一群。２本一単位で描かれるものが多い。21は肩部片、22は肩部から胴上部にかけての部位、23は胴上部片、24は胴上部から中段

直下までの部位、25～30は胴部片である。22は段を有する肩部と重四角文内にＬＲ単節縄文が施文され、重四角文内の縄文上には刺突列も刻まれている。23は重四角文下に刺突列が施され、周囲にはＲＬ単節縄文が施文されている。24は摩耗が著しいため分かりづらいが、ＬＲ単節縄文地に上から２本一単位の波状文が複数と刺突列が一列施文され、その下に重四角文が描かれている。25～27は重四角文のみで縄文などはみられない。28～30は重四角文外に縄文が施文されている。28･29はＲＬ単節縄文、30は摩耗が著しいため定かではないが、カナムグラ系の擬縄文と思われる。31～34は波状文が描かれる一群。31は胴上部片、32～34は胴部片である。32以外は２本一単位で複数描かれている。32･34はＬＲ単節縄文を地文とし、32には単孔のボタン状貼付文も付けられている。33は波状文下にＬＲ単節縄文が施文されている。35～42は平行沈線が横位に巡る一群。35は肩部から胴上部にかけての部位、36～39は胴上部片、40･41は胴部中段、42は胴下部片である。35は上に沈線による鋸歯文と刺突列が施文され、その下に横位の平行沈線が巡り、間にＬＲ単節縄文が充填されている。以下は無文部を挟んで再度横位の沈線が１条巡る。無文部は横･斜位のヘラナデである。36は35と同じく横位の平行沈線間にＬＲ単節縄文が充填されており、以下は無文で斜位のヘラナデ調整である。37～41はすべて２本一単位で複数描かれており、重四角文になる可能性もある。38･41は沈線下、39･40は沈線上にＬＲ単節縄文が施文されている。42は分かりづらいが、ＲＬ単節縄文下にやや間隔をあけて平行沈線が描かれている。以下は無文で横・斜位のヘラナデ調整である。

43～52は甕。43･44･46は櫛歯状工具により文様が描かれている。すべて同一個体であり、８号住居跡出土の第18図54･66、第19図67とも同一個体であるが、接合関係はみられない。43は口縁部片で端部には押捺がみられた。44は頸部片、46は頸部から胴下部にかけての部位である。櫛歯は口縁部から胴上部までは縦位であるが、胴下部以下は斜位に施されており、横位の羽状文が描かれている。45は単独の沈線により文様が描かれた頸部片。横位の沈線下に平行沈線が垂下する。47～51は縄文が施文される一群。47･49がＲＬ単節縄文、48･50･51がＬＲ単節縄文である。52は上部に突帯が巡り、その下には横長の単孔を有するボタン状貼付文が付けられている。

６は高坏の脚部。内外面ともにヘラナデ調整である。赤彩はみられない。

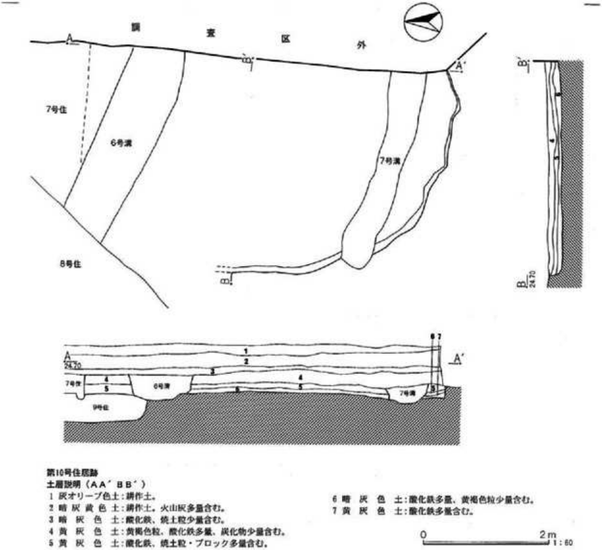
53は椀としたが、高坏の可能性もある。口縁部には焼成前穿孔が１つみられた。無文で内外面ともに横･斜位のヘラナデ調整である。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第10号住居跡（第22図）

平成12年度調査第３区126－138･139グリッドに位置する。北側を７号住居跡と６号溝跡に、南壁付近では７号溝跡に切られており、東側は調査区外にある。本住居跡は、確認面の都合から西壁が８号住居跡手前で途切れてしまったため、８号住居跡との直接的な切り合いを把握することができなかったが、８号住居跡の遺物出土状況や周辺遺構との新旧関係などから本住居跡が古いと思われる。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は現時点で5.9m、東西は3.4mを測る。平面プランも不明であるが、おそらく隅丸の正方形か縦長の長方形を呈すると思われる。主軸方向はＮ－２°－Ｅを指し、ほぼ東西南北に軸が合っている。確認面からの深さは0.2m前後であったが、調査区境の土層断面観察では最大0.45mの深さであったことが確認された。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土



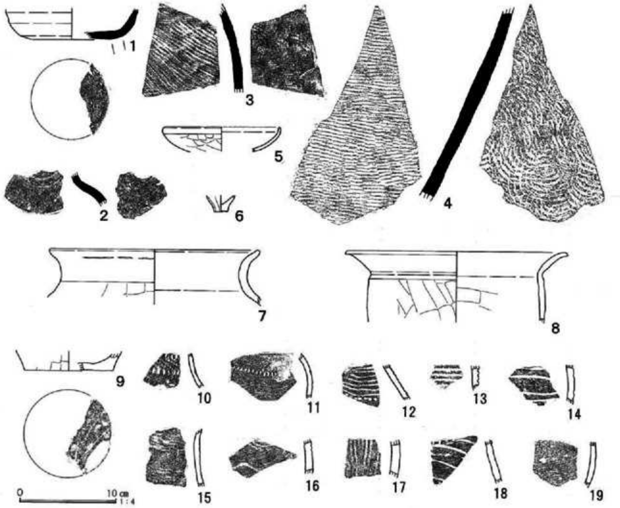
第22図　第10号住居跡

は四層（4～7層）からなる。ほぼ水平に近い堆積状況であり、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

カマドをはじめ、貯蔵穴や壁溝、ピットは確認されなかった。

出土遺物（第23図）は、須恵器坏（1）、壺（2）、甕（3・4）、土師器坏（5）、ミニチュア土器（6）、甕（7・8）がある。すべて覆土からの検出であり、残存状態はあまり良くない。また、本住居跡に伴う遺物で図示不可能なものに土師器の坏蓋模倣坏や有段口縁坏の小片も検出されている。この他に流れ込みの遺物として弥生時代中期後半の土器（9～19）も検出されている。

須恵器はすべて末野産。流れ込みの可能性もある。1は坏の体部から底部にかけての部位。器壁が厚手である。底面は全面回転ヘラ削りである。2は壺の肩部片。内外面ともに回転ナデ調整である。3・4は甕。3は胴上部片、4は胴下部片。ともに外面はタタキ、内面には半円形のあて具痕が残る。5は土師器の北武蔵型坏。やや浅身である。6はミニチュア土器。口縁部を欠く。外面はヘラ削り、内面はナデ調整である。7・8は甕。7は丸胴、8は長胴の甕である。ともに口縁部から胴上部までの検出である。



第23図　第10号住居跡出土遺物

第10表　第10号住居跡出土遺物観察表

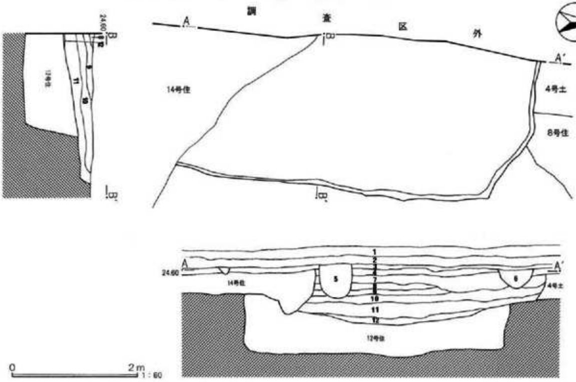
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 坏	－	(3.25)	(8.5)	ABLN	灰白	A	体～底25%	末野産。
2	須恵器 壺	－	－	－	ALN	灰	B	肩部片	末野産。
3	須恵器 甕	－	－	－	ABHL	灰	B	胴上部片	末野産。
4	須恵器 甕	－	－	－	ABLN	灰	B	胴下部片	末野産。
5	土師器 坏	(12.2)	(2.6)	－	ABHIKN	橙	B	15%	
6	ミニチュア土器	－	(1.75)	1.4	ABHIN	褐	A	70%	
7	土師器 甕	(22.3)	(5.8)	－	ABDHIJN	橙	B	口～胴20%	
8	土師器 甕	(23.6)	(7.45)	－	ABDHK	橙	B	口～胴20%	
9	弥生土器 壺	－	(2.1)	(9.4)	ABDHIKN	にぶい橙	B	底部30%	底面木葉痕有。
10	弥生土器 壺	－	－	－	ABGHIKN	にぶい黄橙	B	肩部片	
11	弥生土器 壺	－	－	－	ABIN	灰黄	B	胴上部片	
12	弥生土器 壺	－	－	－	ABDIKN	にぶい黄橙	B	肩部片	
13	弥生土器 壺	－	－	－	AKN	にぶい赤橙	B	胴部片	
14	弥生土器 壺	－	－	－	ABDHIKN	外:黄褐 内:褐灰	B	胴部片	
15	弥生土器 壺	－	－	－	ABCHIKN	にぶい橙	B	頸部片	
16	弥生土器 壺	－	－	－	ABCDHKMN	にぶい橙	B	胴部片	
17	弥生土器 壺	－	－	－	AHIKN	黒褐	B	胴部片	
18	弥生土器 壺	－	－	－	ABHIN	黒褐	B	胴上部片	
19	弥生土器 甕	－	－	－	ABHIKN	灰黄褐	B	胴部片	

9～19は弥生時代中期後半の土器。9～18は壺。9は底部。底面に木葉痕が残る。甕の可能性もある。10～12は刺突列が刻まれる一群。10・12は肩部片、11は胴上部片である。10は刺突列が2列刻まれており、間にＲＬ単節縄文が充填されている。以下は無文で横・斜位のヘラナデ調整である。12は横位の平行沈線下に刺突列が1列巡る。11は刺突列の上下が無文で横位のヘラナデ調整が施されている。無文部下は分かりづらいが、横位の平行沈線が巡る。13・14は横位の平行沈線が描かれる一群。ともに胴部中段の破片である。15・16は波状文が描かれる一群。15は頸部片。分かりづらいが、上下に2本一単位の波状文が複数描かれており、間は無文で横・斜位のヘラナデが施されている。16は胴部中段の破片。上下に描かれた波状文間にＬＲ単節縄文が施文されている。17は重四角文が描かれた胴部中段の破片。18は沈線により渦巻文が描かれた胴上部片。沈線間にＬＲ単節縄文が充填されている。19は甕の胴部中段の破片。分かりづらいが、ＬＲ単節縄文が施文されている。

本住居跡の時期は、7号住居跡よりも古い段階の7世紀後半と思われる。

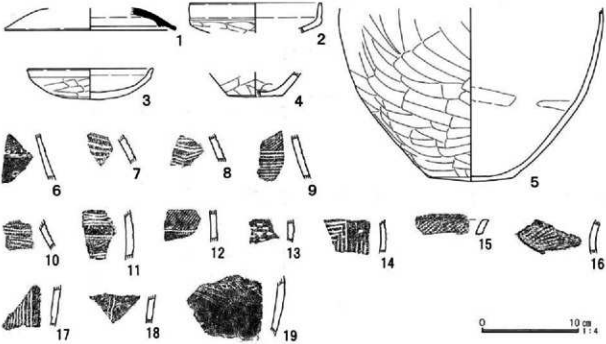
第11号住居跡（第24図）

平成12年度調査第3区の127－138・139グリッドに位置する。発掘調査時点では、北側で8号住居跡と4号土坑を切っているように思われたが、整理調査による出土遺物の比較等の結果、本住居跡が8号住居跡に切られており、4号土坑との新旧関係については不明と言わざるを得ない。南側は14号住居跡に



第11号住居跡
土層説明（AA′ BB′）
1 灰オリーブ色土：耕作土。
2 暗灰黄色土：耕作土。火山灰多量含む。
3 暗 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒少量含む。
4 灰 黄 色 土：酸化鉄少量、焼土粒、炭化物微量含む。
5 黄 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒少量含む。しまり弱。
6 暗 灰 色 土：焼土粒少量含む。しまり弱。
7 黄 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒、炭化物少量含む。
8 黄 灰 色 土：黄色粒・ブロック多量、酸化鉄少量含む。
9 黄 灰 色 土：酸化鉄多量含む。8層より暗い。
10 暗 灰 色 土：酸化鉄多量含む。
11 暗 灰 色 土：酸化鉄少量含む。10層より暗い。
12 灰 色 土：酸化鉄多量、炭化物微量含む。

第24図　第11号住居跡



第25図　第11号住居跡出土遺物

第11表　第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	須恵器 蓋	(18.2)	(2.3)	-	ABL	灰	B	口縁部15%	末野産。
2	土師器 坏	(13.8)	(3.2)	-	ABCDHKN	にぶい黄橙	B	30%	
3	土師器 坏	(13.3)	(3.3)	-	ABCK	淡橙	B	25%	
4	土師器 甕	-	(2.6)	(5.7)	ABCHIN	明赤褐	B	底部25%	
5	土師器 甕	-	(18.3)	(9.0)	ABDEHKN	にぶい黄橙	B	胴～底40%	
6	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐	A	肩部片	
7	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	浅黄	B	肩部片	
8	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄褐	B	肩部片	
9	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄橙	B	肩部片	
10	弥生土器 壺	-	-	-	ADHIJN	黒褐	B	肩部片	
11	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIN	にぶい黄橙	B	胴部片	
12	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙	B	胴部片	
13	弥生土器 壺	-	-	-	AHIN	灰褐	B	胴部片	
14	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIKN	黒褐	B	胴部片	
15	弥生土器 甕	-	-	-	ADHN	灰黄褐	B	口縁部片	
16	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	にぶい褐	B	頸部片	
17	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHKN	灰黄褐	B	胴下部片	
18	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐	B	胴下部片	
19	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙	B	胴下部片	

切られており、西側は調査区外にある。調査区境の土層断面では、覆土上層に一部ピット状の掘り込みが認められたが、本住居跡に影響はみられなかった。また、本住居跡の下には弥生時代中期後半段階の12号住居跡が位置しており、本住居跡は12号住居跡埋没後に構築されている。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は現時点で4.98m、東西は2.56mを測る。平面プランについても不明であるが、おそらく正方形か縦長の長方形を呈すると思われる。主軸方向はN－8°－Eを指し、ほぼ東西南北に軸が合っている。床面は本住居跡下に12号住居跡があるためか東壁から調査区境に向かって擂鉢状に落ちていた。よって、確認面からの深さは、壁際で0.2m前後、最も深い調査区境で0.48mを測る。覆土は8～12層が該当する。レンズ状に堆積していたが、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

カマドをはじめ、貯蔵穴や壁溝、ピットは確認されなかった。

出土遺物（第25図）は、須恵器蓋（1）、土師器坏（2・3）、甕（4・5）があるが、本住居跡に伴うのは2・4・5と思われる。5以外は残存状態が良くない。1・3は8号住居跡からの流れ込みである。また、この他に弥生時代中期後半の土器（6～19）も流れ込み遺物として検出された。

1は須恵器蓋の口縁部。内面にかえりが付く。末野産。2・3は土師器坏。2は坏身模倣坏、3は北武蔵型暗文坏の器形を呈するが、暗文は見られない。4・5は甕。4は長胴甕の底部、5は丸胴甕の胴部中段から底部にかけての部位である。

6～19は弥生時代中期後半の土器。6～14は壺。6～10は肩部片。6は上からＬＲ単節縄文、刺突列、横位の沈線が施文され、以下は無文で丁寧なヘラナデが施されている。7・8は波状文が描かれており、7は波状文下に刺突列が巡り、8は2本一単位で波状文が複数描かれている。9は横位の平行沈線上にＬＲ単節縄文が施文されている。10は重四角文が描かれている。11～14は胴部中段の破片。11は2本一単位で平行沈線が複数描かれている。12はＬＲ単節縄文下に横位の沈線が1条巡り、以下は無文で斜位のヘラナデ調整である。13は刺突がランダムに刻まれている。14は重四角文が描かれている。15～19は甕。15・16はＬＲ単節縄文が施文されている。15は口縁部片、16は頸部片である。15は端部まで縄文が施文されている。17～19は櫛歯状工具により文様が描かれる一群。すべて胴下部片である。17・18は縦位、19は斜位に施されている。18は摩耗が著しいため分かりづらいが、全面に施されている。19は櫛歯以下が無文で斜位のヘラナデが施されている。

本住居跡の時期は、14号住居跡よりも古い段階の6世紀後半と思われる。

第12号住居跡（第26図）

平成12年度調査第3区の127－138・139グリッドに位置する。本住居跡の上には古墳時代後期以降の8・11・14号住居跡と4号土坑が位置しており、これらの遺構は本住居跡埋没後に構築されている。検出できたのは、弧状に巡る東壁とその付近のみであり、西側大半が調査区外にある。

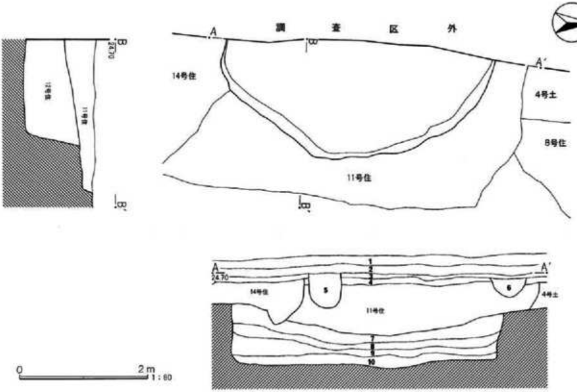
正確な規模は不明であるが、調査区境での南北は4.2mを測る。平面プランも不明であるが、円形ないし楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.9mと非常に深い。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は7～10層が該当する。いずれの層にも炭化物を含み、7～9層は粘土質、最下層の10層はシルトであった。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と思われる。

炉跡をはじめ、壁溝やピットは確認されなかった。

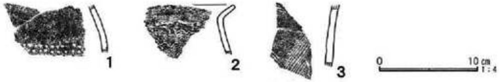
出土遺物は少なく、図示可能なものは弥生土器壺（1）、甕（2・3）の3点のみである。すべて破片であり、覆土からの検出である。

1は壺の胴上部片。上部大半が無文で横位のヘラナデが施されており、以下は刺突列が2列巡る。2・3は甕。2は口縁部から胴上部にかけての部位、3は胴下部片である。2は口縁端部にＬＲ単節縄文、頸部は無文で横位のヘラナデ調整が施され、胴上部には櫛歯状工具による波状文が描かれている。3は胴下部片。櫛歯状工具により縦位の羽状文が描かれている。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。



第12号住居跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰オリーブ色土：耕作土。
2 暗灰黄色土：耕作土。火山灰多量含む。
3 暗灰色土：酸化鉄、焼土粒少量含む。
4 灰黄色土：酸化鉄少量、焼土粒、炭化物微量含む。
5 黄灰色土：酸化鉄、焼土粒少量含む。しまり弱。
6 暗灰色土：焼土粒少量含む。しまり弱。
7 灰白色土：粘土質。酸化鉄少量、炭化物微量含む。
8 オリーブ灰色土：粘土質。酸化鉄少量、炭化物微量含む。
9 明オリーブ灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物少量含む。
10 浅黄色シルト：酸化鉄、炭化物少量含む。



第26図　第12号住居跡・出土遺物

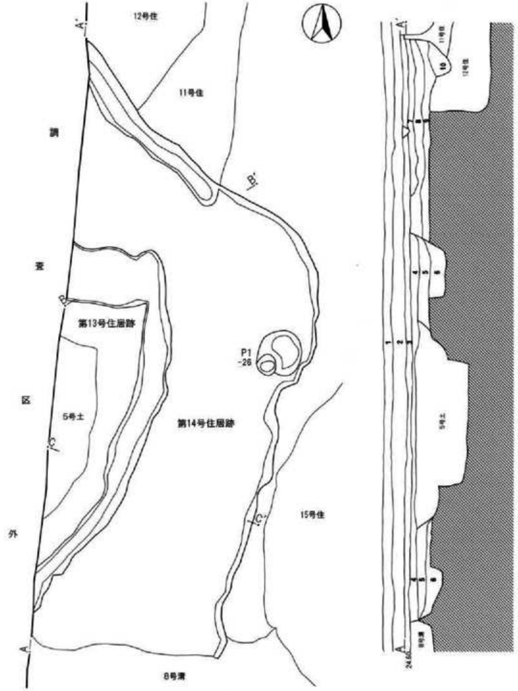
第12表　第12号住居跡出土遺物観察表

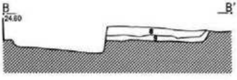
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	－	－	－	ABDEHIJKM	にぶい黄橙	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
2	弥生土器 甕	－	－	－	ABCHIKN	灰黄	B	口～胴片	
3	弥生土器 甕	－	－	－	ABDHIKN	黄灰	B	胴下部片	

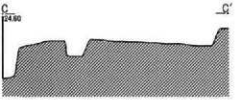
第13号住居跡（第27図）

平成12年度調査第３区の127－140・141グリッドに位置する。14号住居跡を切っており、本住居跡内を５号土坑に切られている。検出できたのは、北東隅付近から東壁沿いのみであり、西側大半が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は現時点で5.9ｍを測る。平面プランも不明であるが、お







第13･14号住居跡
土層説明（AA′ BB′）
1 灰オリーブ色土：耕作土。
2 暗 灰 黄 色 土：耕作土。火山灰多量含む。
3 暗 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒少量含む。
4 暗 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒、炭化物少量含む。
5 黄 灰 色 土：酸化鉄少量含む。
6 黄 灰 色 土：黄色粒・ブロック、酸化鉄多量含む。
7 灰 色 土：焼土粒、炭化物少量含む。
8 黄 灰 色 土：酸化鉄少量含む。
9 黄 灰 色 土：酸化鉄少量、炭化物微量含む。8層より暗い。
10 黄 灰 色 土：黄色粒・ブロック多量、酸化鉄少量含む。

0 2m 1:60

第27図 第13・14号住居跡

そらく正方形か縦長の長方形を呈し、主軸方向はN－18°－Eを指すと思われる。確認面からの深さは0.17～0.25mであったが、調査区境の土層断面観察では0.3m前後の深さであったことが確認された。床面は検出できた範囲は狭かったが、ほぼ平坦であった。覆土は４～６層が該当する。６層に黄色粒やブロックを多量含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

壁溝は検出できた範囲では全周していた。幅は北側が0.9m前後と幅広であったが、東壁沿いは0.25～0.49mであった。床面からの深さは0.25m程を測る。

カマドをはじめ、貯蔵穴やピットは確認されなかった。

出土遺物（第28図）は、須恵器甕（１）、土師器坏（２･３）がある。いずれも残存状態は良くない。すべて覆土からの検出である。この他に流れ込みの遺物として弥生時代中期後半の土器（４～７）も検出された。

１は須恵器甕の胴下部片。産地は不明である。外面はタタキ、内面はあて具痕が残る。本住居跡には伴わない可能性が高い。２・３は深身の土師器坏。２は比企型坏、３は坏身模倣坏である。２は口縁端部のみ外反し、口縁部外面及び内面に赤彩が施されている。

４～７は弥生時代中期後半の土器。４･５は壺。４は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。甕の可能性もある。５は胴上部片。横位の平行沈線下にＲＬ単節縄文が施文されている。重四角文の可能性もある。６・７はＬＲ単節縄文が施文された甕。６は胴部中段の破片、７は胴下部片である。

本住居跡の時期は、14号住居跡よりも新しい段階の６世紀後半と思われる。

第14号住居跡（第27図）

平成12年度調査第３区の126･127－139～141グリッドに位置する。北側で11号住居跡を切っており、南側を８号溝跡、本住居跡内を13号住居跡と５号土坑に切られている。また、北側では11号住居跡下に弥生時代中期後半段階の12号住居跡が位置しているが、本住居跡は12号住居跡埋没後に構築されている。

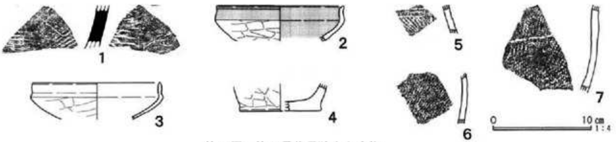
正確な規模は不明であるが、検出できた南北は現時点で８mを超えることから大型の部類に入る。平面プランも不明であるが、おそらく正方形か縦長の長方形を呈し、主軸方向はN－17°－Eを指すと思われる。確認面からの深さは0.2m前後であったが、調査区境の土層断面観察では0.35m前後の深さであったことが確認された。床面は南側でやや凹凸がみられたが、その他はほぼ平坦であった。覆土は７～10層が該当する。10層に黄色粒･ブロックを多量含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

壁溝は北壁沿いにのみ確認されたが、北東隅手前で途切れている。幅0.3～0.48m、床面からの深さは0.32m前後を測る。

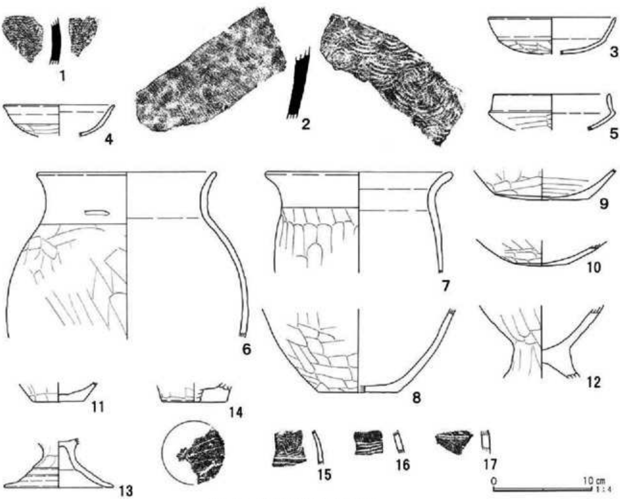
ピットは北東隅手前の東壁沿いから１つ確認された。径0.75m前後で北側にテラスを持つ。床面からの深さは南側の最も深い所で0.26mを測る。その位置から主柱穴ではないと思われるが、性格については不明と言わざるを得ない。

カマドや貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第29図）は、須恵器甕（１･２）、土師器坏（３～５）、甕（６～11）、台付甕（12）、高坏（13）がある。６はピット１、その他は覆土からの検出である。いずれも残存状態はあまり良くない。この他に流れ込みの遺物として弥生時代中期後半の土器（14～17）も検出された。



第28図　第13号住居跡出土遺物



第29図　第14号住居跡出土遺物

須恵器甕はともに末野産。1は胴部中段の破片、2は胴下部片である。外面はタタキ、内面は半円形のあて具痕が残る。1・2ともに本住居跡には伴わない可能性が高い。3～5は土師器坏。3は坏蓋模倣坏、4は有段口縁坏、5は坏身模倣坏である。甕は丸胴（6・8～10）と長胴のもの（7・11）がある。12は接合部。その器形から台付甕とした。外面の調整はヘラ削りである。13は高坏の脚部。外面上部はヘラ削り、以下は内外面ともに横ナデである。

14～17は弥生時代中期後半の壺。14は底部。底面に木葉痕が残る。甕の可能性もある。15・16は胴上部片。15は分かりづらいが、上下に横位の平行沈線が巡り、間にＬＲ単節縄文が施文されている。16は無文部下に横位の平行沈線が描かれている。無文部は横位のヘラナデ調整である。17は胴部中段の破片。

第13表　第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器 甕	−	−	−	ABHN	灰	B	胴下部片	産地不明。
2	土師器 坏	(13.2)	(3.6)	−	ABHKN	にぶい橙	B	20%	比企型坏。口縁部外面･内面赤彩。
3	土師器 坏	(13.2)	(3.8)	−	ABDEHKN	にぶい黄橙	B	15%	
4	弥生土器 壺	−	(2.85)	(8.5)	ABCHIKN	にぶい黄橙	B	底部30%	
5	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIKN	黄灰	B	胴上部片	
6	弥生土器 甕	−	−	−	ABIJKN	黒褐	B	胴部片	
7	弥生土器 甕	−	−	−	ABDIKMN	にぶい黄褐	B	胴下部片	

第14表　第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器 甕	−	−	−	AELN	灰	B	胴部片	末野産。
2	須恵器 甕	−	−	−	ABHLN	灰	B	胴下部片	末野産。
3	土師器 坏	(13.2)	(3.8)	−	ABDKN	橙	B	30%	
4	土師器 坏	(11.5)	(3.25)	−	ABCDHIKN	にぶい黄橙	B	30%	
5	土師器 坏	(12.2)	(3.75)	−	ABHK	黒褐	A	15%	
6	土師器 甕	(18.6)	(17.3)	−	ABDHIJKN	にぶい橙	B	口～胴35%	
7	土師器 甕	19.4	(10.4)	−	ABCDIN	灰褐	B	口～胴80%	
8	土師器 甕	−	(8.6)	(8.2)	ABCEGHIN	灰白	B	胴～底40%	
9	土師器 甕	−	(3.2)	9.8	ABCHJKN	にぶい黄橙	B	底部90%	
10	土師器 甕	−	(3.2)	5.8	ABDEGKM	橙	B	底部50%	
11	土師器 甕	−	(2.0)	5.2	ABDHIN	にぶい黄橙	B	底部60%	
12	土師器台付甕	−	(7.5)	−	ABDHJN	灰褐	B	接合部50%	
13	土師器 高坏	−	(5.1)	(10.4)	ABCEHIKMN	橙	B	脚部80%	
14	弥生土器 壺	−	(2.0)	(6.8)	ABEHIN	にぶい黄橙	B	底部30%	底面木葉痕有。
15	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIN	黄灰	B	胴上部片	
16	弥生土器 壺	−	−	−	ABDGH	にぶい黄橙	B	胴上部片	
17	弥生土器 壺	−	−	−	ABCDIKN	灰黄	B	胴部片	

刺突列刺突列下に２本一単位の沈線が巡り、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。

本住居跡の時期は、13号住居跡よりも古い段階の６世紀後半と思われる。

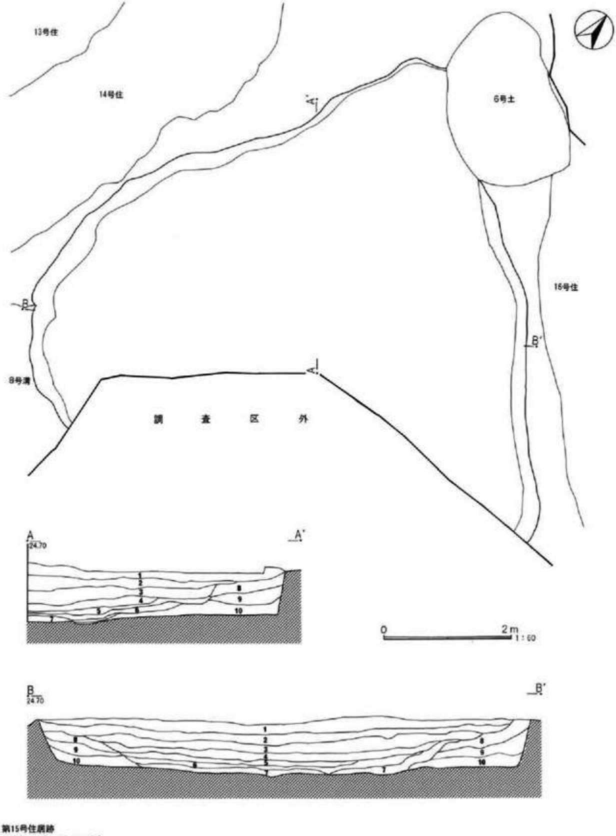
第15号住居跡（第30図）

平成12年度調査第３区の125･126－139～141グリッドに位置する。南西部で８号溝跡に切られており、北東隅では６号土坑と重複しているが、新旧関係は把握できなかった。南側約半分は調査区外にある。また、直接的な切り合い関係にないが、本住居跡のすぐ東側には16号住居跡、西側には14号住居跡が位置している。16号住居跡は本住居跡と同時期のものであるが、切り合い関係にないため新旧は不明である。14号住居跡は古墳時代後期以降のものであり、本住居跡埋没後に構築されたものであることから14号住居跡の方が新しい。

正確な規模は不明であるが、かろうじて検出できた南東隅から一辺7.7m程のややいびつな正方形を呈する。主軸方向はN－34°－Wを指すと思われる。確認面からの深さは最大0.87mと深い。床面は中央付近でやや凹凸がみられたが、その他はほぼ平坦であった。覆土は10層（１～10層）からなる。いずれの層にも混入物がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われ、壁際に堆積していた８･９層は粘土質、10層はシルトであった。

炉跡をはじめ、貯蔵穴や壁溝、ピットなどは確認されなかった。

出土遺物（第31～32図）は、弥生土器壺（１～３･７･８･13～29）、甕（４･５･９～11･30～45）、高坏（６･12）がある。全形が分かるものは少ないが、比較的良好な資料がまとまって検出された。すべて覆土ないし床面からやや浮いた状態で出土した。また、この他に流れ込みの遺物として古墳時代前期の土師器甕（46）も１点のみ検出された。

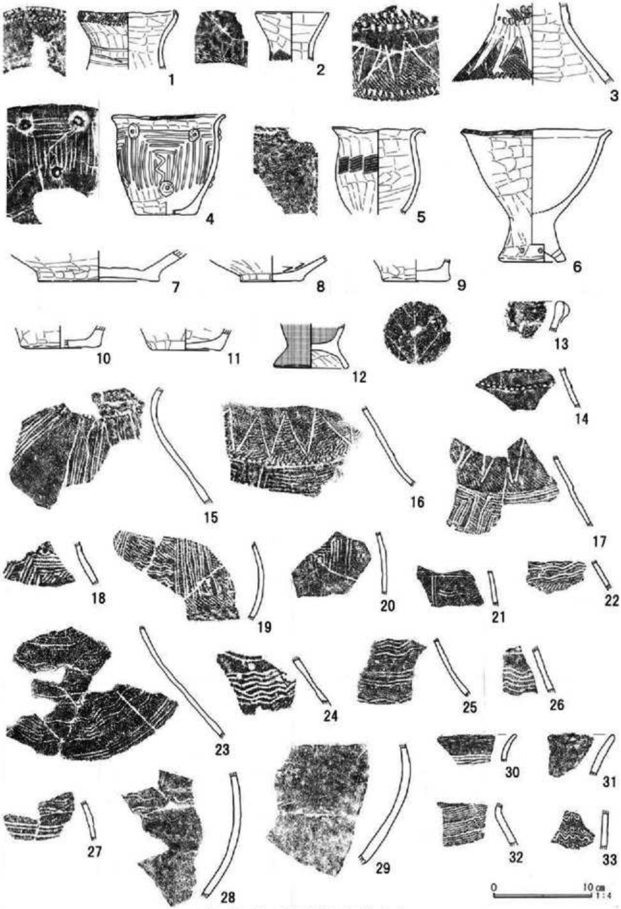


第15号住居跡

土層説明（AA' BB'）

1 黄　灰　色　土：酸化鉄多量、白色粒少量含む。
2 暗　青　灰　色　土：酸化鉄少量、炭化物微量含む。
3 暗　青　灰　色　土：酸化鉄、白色粒少量含む。2層より暗い。
4 暗　灰　色　土：酸化鉄、焼土粒、炭化物、白色粒少量含む。
5 灰　色　土：白色粒多量、炭化物少量含む。
6 暗　灰　色　土：炭化物、灰白色粒少量含む。
7 灰　色　土：シルト質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒・ブロック少量含む。
8 黄　灰　色　土：粘土質。酸化鉄、白色粒少量含む。
9 黄　灰　色　土：粘土質。酸化鉄、白色粒少量含む。8層より暗い。
10 オリーブ灰色シルト：酸化鉄少量、炭化物微量含む。

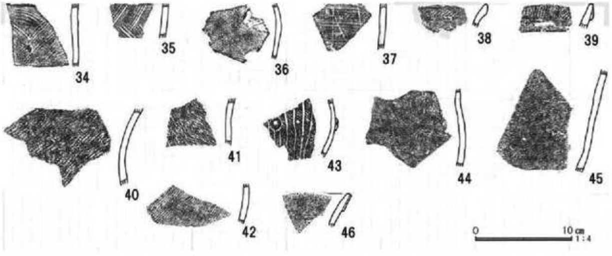
第30図　第15号住居跡



第31図　第15号住居跡出土遺物（1）

1～3・7・8・13～29は壺。1・2は口縁部から頸部にかけての部位。1は受け口状を呈する口縁部上下に刺突列を刻み、間にＬＲ単節縄文が施文されている。頸部は縦・斜位のヘラナデ調整が施されており、中段に平行沈線が巡る。2は素口縁で外に開き、頸部はほぼ直立する。口縁部は無文で内外面ともにヘラナデ調整であり、頸部にはＲＬ単節縄文が施文されている。3は頸部から肩部にかけての部位。残存状態は比較的良好である。段を有する頸部に刺突列を2列刻み、間にＲＬ単節縄文が施文されている。肩部には沈線により鋸歯文が描かれており、内部にＲＬ単節縄文が充填されている。鋸歯文下には刺突列が巡る。7・8は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。13は口縁部片。外面にＴ字状の突起が貼り付けられている。文様はみられず、横位のヘラナデ調整が施されている。14は肩部片。やや間隔を開けて刺突列が2列巡り、刺突列間及び下部は無文で横位のヘラナデ調整である。15は頸部から胴上部にかけての破片。分かりづらいが、頸部は上から縦位の沈線、横位の平行沈線、刺突列の順に施文されており、肩部は縦位の平行沈線が複数単位で等間隔に描かれている。16～21は重四角文が描かれる一群。2本一単位で描かれるものが多い。16～18は胴上部片、19～21は胴部中段の破片である。16・17は重四角文内に平行沈線が充填されている。重四角文上には鋸歯文が描かれており、内部に16はＬＲ単節縄文、17はＲＬ単節縄文が充填されている。16は鋸歯文下に刺突列が刻まれている。18は重四角文上に刺突列が巡り、内部にはＬＲ単節縄文が充填されている。19はコの字重ね文の可能性もあるが、内部上にＲＬ単節縄文、下に2本一単位の波状文を複数充填しており、これらの下に再度ＲＬ単節縄文が施文され、以下は無文となる。無文部は横位のヘラナデ調整である。20・21は同一個体である。沈線が細い。重四角文内には上下にＬＲ単節縄文、中央に2本一単位の波状文が施文されている。22～28は波状文が描かれる一群。2本一単位で複数描かれるものが多い。22・24～26は肩部片、23は肩部から胴上部にかけての破片、27は胴上部片、28は胴下部片である。22は複数の波状文下にＬＲ単節縄文が施文されている。23は分かりづらいが、横位の平行沈線が上中下に複数巡り、間に同一工具による波状文が描かれている。24・25も2本一単位の波状文が複数描かれており、25は上下に描かれた波状文間に同一工具による横位の平行沈線が巡る。26は横位の平行沈線下が無文で横位のヘラナデが施され、以下に複数の波状文が描かれている。27は波状文下にやや間隔を開けて横位の平行沈線が巡る。28は縦位の沈線下に波状文が巡る。以下は無文で横位のヘラナデ調整が施されている。29は胴下部片。無文で全面ヘラナデ調整であるが、上部は横位、下部は斜位に施されている。

4・5・9～11・30～46は甕。4は唯一全形の分かる小型の甕。最大径を有する口縁部がくの字に開き、胴部の膨らみは小さい。口縁端部にのみＬＲ単節縄文が施文され、以下頸部まで無文で横位のヘラナデ調整が施される。胴部には沈線でコの字重ね文が描かれており、中央には波状文が1条垂下する。胴上部と下部には単孔のボタン状貼付文が付けられている。コの字重ね文以下は無文で縦・横位のヘラナデ調整である。5も小型の甕である。底部を欠く。最大径を有する口縁部はややいびつな作りで大きく外反する。胴部の膨らみは小さい。胴上部にのみ文様があり、ＬＲ単節縄文が施文されている。その他はヘラナデ調整である。9～11は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。9の底面には木葉痕が残る。甕としたが、壺の可能性もある。30・31は口縁部片。ともに素口縁であり、無文で内外面ともに横位のヘラナデ調整であるが、30は頸部との境に平行沈線が横位に巡る。32～37は櫛歯状工具により文様が描かれる一群。32は頸部から胴上部にかけての破片、33～37は胴部中段の破片である。32は6本一単位、33は4本一単位



第32図　第15号住居跡出土遺物（2）

第15表　第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器 壺	10.4	(6.1)	-	ABCDHIJKN	灰黄	B	口～頸85%	
2	弥生土器 壺	(7.6)	(5.05)	-	ABDHI	にぶい黄橙	B	口～頸25%	
3	弥生土器 壺	-	(8.4)	-	ABDHIKM	にぶい黄橙	B	頸～肩80%	
4	弥生土器 甕	11.8	10.4	(6.2)	ABDEHIN	灰黄	B	70%	
5	弥生土器 甕	9.6	(8.95)	-	ABCIKN	にぶい黄橙	B	45%	
6	弥生土器高坏	(15.6)	13.8	(7.0)	ABDHIKN	灰黄	B	70%	脚部焼成前穿孔二個一対二箇所有。赤彩？
7	弥生土器 壺	-	(3.15)	(11.6)	ABCHIKN	にぶい黄橙	B	底部40%	
8	弥生土器 壺	-	(2.7)	(6.6)	ABEIN	にぶい黄褐	B	底部80%	
9	弥生土器 壺	-	(2.25)	7.0	ABDIKMN	にぶい黄橙	B	底部100%	底面木葉痕有。
10	弥生土器 壺	-	(2.3)	(8.2)	ABHIKN	浅黄橙	B	底部40%	
11	弥生土器 壺	-	(2.2)	(7.2)	AHIKN	黒	B	底部45%	
12	弥生土器高坏	-	(4.6)	7.8	ABDHKN	灰白	B	胴～脚100%	外面・胴部内面赤彩。内外面摩耗顕著。
13	弥生土器 壺	-	-	-	ABCIN	浅黄橙	B	口縁部片	
14	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄	B	肩部片	外面やや摩耗。
15	弥生土器 壺	-	-	-	ABCEHIKN	浅黄	B	頸～胴片	
16	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIJKN	にぶい黄橙	B	胴上部片	外面やや摩耗。
17	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIN	浅黄橙	B	胴上部片	
18	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIK	にぶい黄橙	B	胴上部片	
19	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEGIK	にぶい黄橙	B	胴部片	
20	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄橙	B	胴部片	№21と同一個体。外面やや摩耗。
21	弥生土器 壺	-	-	-	ABHKN	灰黄	B	胴部片	№20と同一個体。
22	弥生土器 壺	-	-	-	AHIN	褐	B	肩部片	
23	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIJKMN	にぶい黄橙	B	肩～胴片	外面摩耗顕著。
24	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIJ	灰黄	B	肩部片	
25	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIMN	灰黄	B	肩部片	外面摩耗顕著。
26	弥生土器 壺	-	-	-	ABGIKN	灰	B	肩部片	
27	弥生土器 壺	-	-	-	ABGHIKN	にぶい黄橙	B	胴上部片	
28	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	浅黄橙	B	胴下部片	外面摩耗顕著。
29	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKMN	にぶい黄橙	B	胴下部片	
30	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄	B	口縁部片	
31	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄橙	B	口縁部片	
32	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIJN	にぶい黄橙	B	頸～胴片	
33	弥生土器 甕	-	-	-	AHIKN	褐灰	B	胴部片	
34	弥生土器 甕	-	-	-	ABEIK	黒褐	B	胴部片	
35	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIJK	暗灰黄	B	胴部片	
36	弥生土器 甕	-	-	-	BCDN	灰白	B	胴部片	
37	弥生土器 甕	-	-	-	AHIJK	黒褐	B	胴部片	
38	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIJKN	灰白	B	口～頸片	内外面摩耗顕著。
39	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKMN	にぶい黄橙	B	口～頸片	外面摩耗顕著。
40	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIJK	褐灰	B	頸～胴片	

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
41	弥生土器 甕	−	−	−	ABHKN	灰褐	B	頸部片	
42	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIN	オリーブ黒	B	胴部片	
43	弥生土器 甕	−	−	−	AHIJK	黒褐	B	胴部片	
44	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIKM	にぶい黄橙	B	頸〜胴片	
45	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIKN	灰黄褐	B	胴下部片	
46	土師器 壺	−	−	−	ABHJKN	黒褐	B	口縁部片	古墳時代前期。

で波状文が描かれている。34･36は縦位、35は横位の羽状文が描かれている。37は横位に施文されている。38〜42は縄文が施文される一群。38･39は口縁部から頸部にかけての破片、40は頸部から胴上部にかけての破片、41は頸部片、42は胴部中段の破片である。38･39は複合口縁部にＬＲ単節縄文が施文され、頸部は無文で横位のヘラナデが施されている。40･42はＬＲ単節縄文、41は無節Ｒが全面に施文されている。43はＲＬ単節縄文地にコの字重ね文が描かれており、中段には単孔のボタン状貼付文が付けられている。胴部中段の破片。44･45は無文の破片。44は頸部から胴上部にかけての破片、45は胴下部片である。ヘラナデ調整であるが、44は横位、45は上部が横位、下部は斜位に施されている。

6・12は高坏。6は全形の分かる数少ない高坏である。口縁部はくの字に開く。坏部は深く、やや丸みを持つ。脚部はやや長く、開きが小さい。口縁端部にＬＲ単節縄文が施文される以外に文様はみられず、全面ヘラナデ調整である。脚部には2個一対の焼成前穿孔が前後に設けられていた。所々に赤彩の痕跡が認められたが、ほとんど剥落しているためどの部分に施されていたか定かではない。12は胴下部から脚部までの部位。脚部は短く、ハの字に開く。摩耗が著しいため大半が剥落しているが、外面と胴部内面には赤彩が施されている。外面及び胴部内面の調整ははっきりしないが、ヘラミガキの可能性が高い。脚部内面はヘラナデ調整である。

46は古墳時代前期の土師器壺。複合口縁部片である。外面全面に縦位の細かいハケメが施されている。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

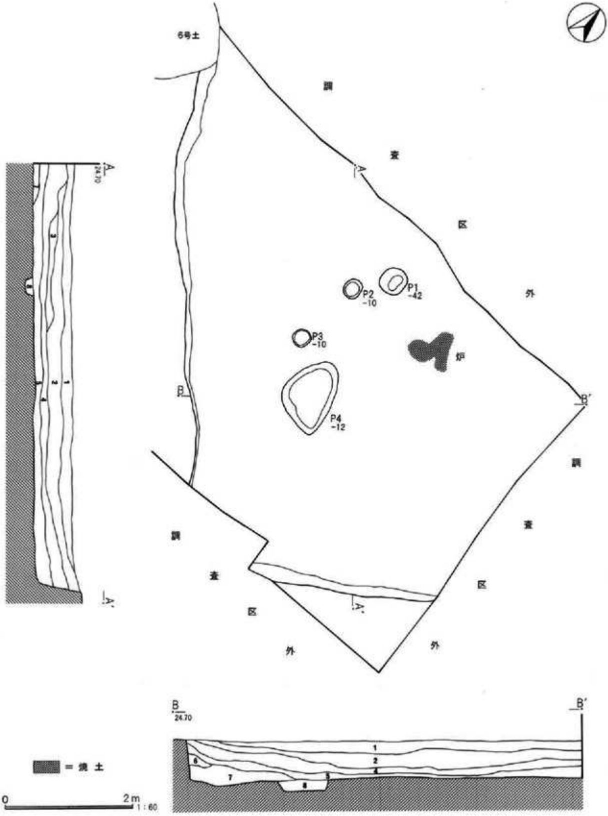
第16号住居跡（第33図）

平成12年度調査第3区の124･125−139〜141グリッドに位置する。北西部の調査区境で6号土坑と重複しているが、新旧関係は把握できなかった。また、15号住居跡でも述べたが、本住居跡のすぐ西側に同時期の15号住居跡が位置しているが、切り合い関係にないため新旧は不明である。北壁及び東壁は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた西壁は現時点で6.45m、東西は西壁から調査区境まで6.12mを測ることから大型の部類に入る。平面プランも不明であるが、おそらく隅丸の長方形を呈し、主軸方向はN−41°−Wを指すと思われる。確認面からの深さは最大0.69mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はピットを除くと七層（1〜7層）からなり、下層の5〜7層は粘土質であった。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央から南寄りに設けられていたと思われる。掘り込みはなく、焼土の広がりが確認されたにとどまる。焼土は0.6m前後の範囲にいびつな形で広がっていた。

ピットは4つ確認された。炉跡を囲むように西側に位置しており、Ｐ1は径0.4m、Ｐ2〜3は径0.25m前後の円形、Ｐ4のみ長軸1.16m、短軸0.79mのいびつな楕円形を呈する。床面からの深さは、Ｐ1のみ0.42mで深いが、その他は0.1〜0.12mで浅い。いずれもその位置や深さから主柱穴ではないと思わ



第16号住居跡
土層説明（AA′ BB′）
1 暗褐色土：酸化鉄多量、明青灰色粒少量含む。
2 灰黄褐色土：酸化鉄多量、明青灰白色粒少量含む。
3 黄灰色土：酸化鉄多量含む。
4 灰黄色土：黄褐色粒、酸化鉄多量含む。
5 灰オリーブ色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
6 暗灰黄褐色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
7 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物少量含む。
8 暗青灰色粘土：炭化物少量含む。

第33図　第16号住居跡

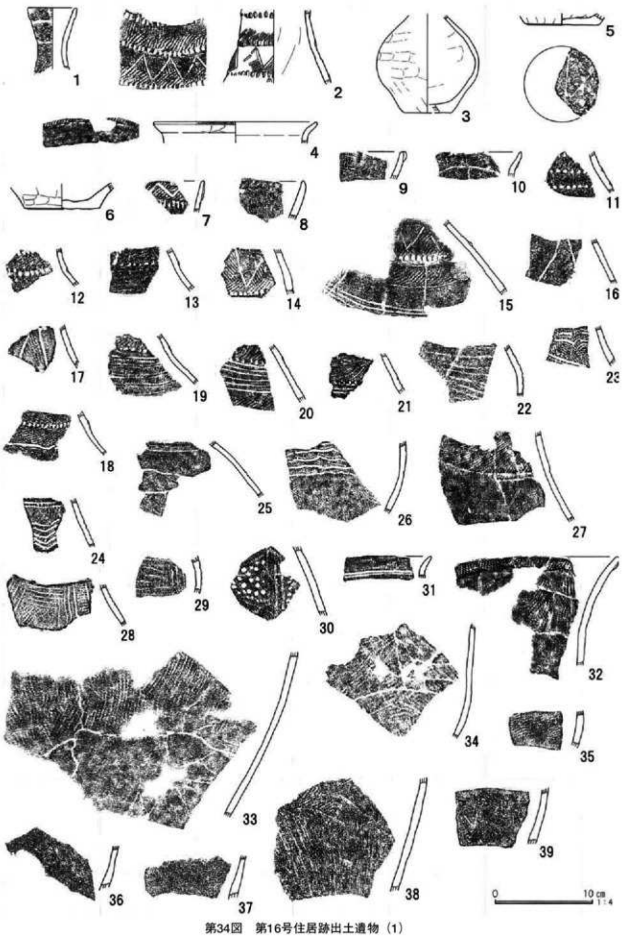
れるが、性格については不明である。

貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

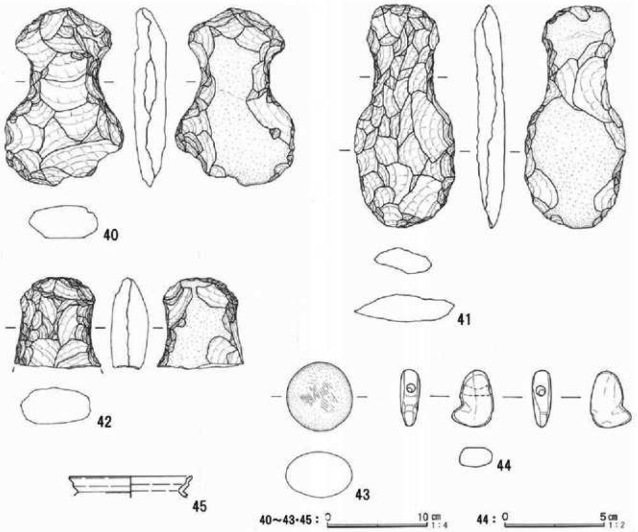
出土遺物（第34・35図）は、弥生土器壺（1～3・5～30）、甕（4・31～39）、打製石斧（40～42）、磨石（43）、垂飾（44）がある。全形が分かるものは少ないが、比較的良好な資料がまとまって検出された。すべて覆土ないし床面からやや浮いた状態で出土した。また、この他に流れ込みの遺物として古墳時代前期の土師器甕（45）も検出された。

1～3・5～30は壺。1は小型壺の口縁部から頸部にかけての部位。複合口縁部も含めて全面にＬＲ単節縄文が施文されている。2は頸部から肩部にかけての部位。残存状態は良好である。上中下に刺突列が刻まれており、上の刺突列間及び下の刺突列間に描かれた鋸歯文内にＬＲ単節縄文が施文されている。3は頸部以上を欠く小型壺。胴部中段に最大径を持つ。全面無文で内外面ともにヘラナデ調整である。5・6は底部。甕の可能性もある。5の底面には木葉痕が残る。7～10は口縁部片。7は複合口縁部に地文としてＬＲ単節縄文が施文され、その上から波状文が描かれている。口縁部直下には刺突列が刻まれている。8は端部にのみＬＲ単節縄文が施文され、以下は無文で斜位のヘラナデ調整である。9・10は無文でともに横位のヘラナデ調整が施されているが、9には突起が貼り付けられている。10は複合口縁である。11～13は刺突列が刻まれる肩部片。11は上部にＬＲ単節縄文が施文され、以下刺突列が2列等間隔に刻まれている。12は刺突列が2列刻まれており、間にＬＲ単節縄文が施文されている。以下は無文で横位のヘラナデ調整である。13は中段に刺突列が巡り、上下は無文で横位のヘラナデ調整が施されている。14～17は鋸歯文が描かれる一群。すべて胴上部片である。14・16・17は鋸歯文内にＲＬ単節縄文、15のみＬＲ単節縄文が充填されている。14・15は鋸歯文下に刺突列が刻まれており、15は刺突列下が区画内をＬＲ単節縄文が充填された平行沈線、無文部、平行沈線の順で文様帯が構成される。無文部は横位のヘラナデ調整である。18～22は横位の平行沈線が描かれる一群。18～21は肩部片、22は胴上部片である。18は上下が無文で横位のヘラナデが施されており、間に上から刺突列、ＬＲ単節縄文、横位の沈線の順で施文される。19はＬＲ単節縄文下に2本一単位の沈線が横位に複数描かれている。20は上下にＬＲ単節縄文が施文されており、間に上から刺突列と横位の平行沈線が施文されている。21はＬＲ単節縄文下に刺突列と横位の平行沈線が巡る。22は横位の平行沈線が巡っており、重四角文の可能性もある。23～26は波状文が描かれる一群。23・24は肩部片、25は肩部から胴上部までの破片、26は胴下部片である。23は波状文下にＲＬ単節縄文と横位の沈線が施文されている。24は横位の平行沈線下が無文で横・斜位のヘラナデが施されており、無文部下に複数の波状文が施されている。25は摩耗が著しいため分かりづらいが、横位の平行沈線下にＬＲ単節縄文、波状文、ＬＲ単節縄文の順で施文されている。26は胴部中段に複数の波状文が巡り、以下は無文で横・斜位のヘラナデが施されている。27は肩部から胴上部にかけての破片。ＬＲ単節縄文下に横位の沈線が1条巡り、以下は無文で横位のヘラナデ調整が施されている。28・29は重四角文が描かれる一群。28は胴上部片、29は胴部中段の破片。28は重四角文内外にＲＬ単節縄文が施文されている。29は摩耗が著しく分かりづらいが、重四角文内に横位の平行沈線が充填されている。30は沈線区画内に刺突が充填される胴上部片。縦・斜位に走る沈線区画内に刺突がランダムに刻まれている。

4・31～39は甕。4はくの字を呈する口縁部。端部にＬＲ単節縄文が施文されており、以下は内外面と



第34図　第16号住居跡出土遺物（1）



第35図　第16号住居跡出土遺物（2）

もにヘラナデ調整である。31は口縁部片。素口縁でくの字の屈曲が弱い。無文で内外面ともに横位のヘラナデ調整である。頸部との境に2本一単位の平行沈線が横位に巡る。32～35･38はLR単節縄文が施文される一群。32は口縁部から胴上部までの破片、33･34は胴下部片、35は胴部中段の破片である。32は複合口縁部も含めて全面に施文されている。33･38は下部が無文となり、33は横･斜位、38は縦位のヘラナデが施されている。36･37･39は無文でヘラナデ調整のみの胴下部片である。36は斜位、37は縦･斜位、39は横･斜位に施されている。

40～42は打製石斧。いずれも片面に自然面を残す。40は分銅型、41は分銅型と短冊型の中間的な形状を呈する。抉りは中段よりやや上に入れられている。40･41は完形。42は刃部を欠くが、分銅型を呈すると思われる。

43は磨石。片面のみ磨った痕跡が認められた。完形。

44は翡翠製の垂飾。扁平な楕円形状を呈するが、下部は片側のみ中段に入れられた抉りから突出している。上部側面には両側から穿孔が施されている。全面やや丁寧な研磨がなされている。完形。

45は古墳時代前期の土師器甕。口縁部から頸部にかけての部位である。口縁部がS字状を呈する。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

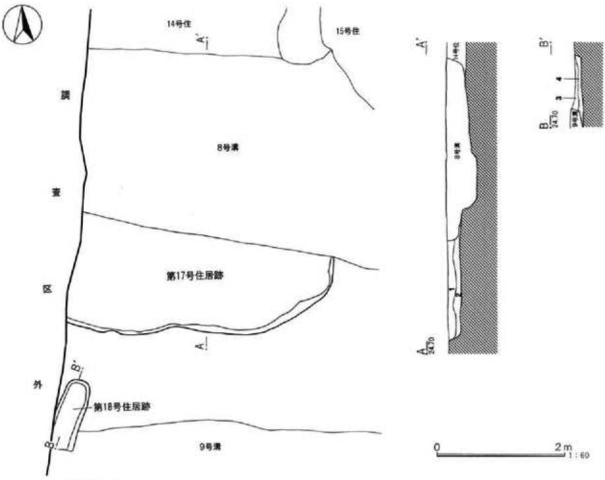
第16表　第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器 壺	(5.1)	(6.4)	-	ABEN	橙	C	口～頸30%	
2	弥生土器 壺	-	(7.6)	-	ABEHIJKN	にぶい黄橙	B	頸～肩100%	
3	弥生土器 壺	-	(10.05)	(5.1)	ABIKN	にぶい褐	B	肩～底25%	内外面剥離顕著。
4	弥生土器 甕	(17.1)	(2.2)	-	ABDIKN	黒	B	口縁部20%	
5	弥生土器 壺	-	(1.2)	(7.8)	ABEHIK	灰黄褐	B	底部45%	底面木葉痕有。
6	弥生土器 壺	-	(2.6)	(7.9)	ABDHIKN	淡黄	B	底部25%	
7	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIK	にぶい黄橙	B	口縁部片	
8	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHIKMN	灰黄	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。
9	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHKN	浅黄橙	B	口縁部片	
10	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHIN	灰白	B	口縁部片	
11	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい黄橙	B	肩部片	
12	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIN	黒褐	B	肩部片	
13	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDGHIN	灰黄	B	肩部片	
14	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄橙	A	胴上部片	
15	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	灰黄褐	B	胴上部片	
16	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	褐灰	B	胴上部片	
17	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIN	にぶい黄橙	B	胴上部片	
18	弥生土器 壺	-	-	-	ADHN	灰黄褐	B	肩部片	
19	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	灰黄褐	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
20	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	黄褐	B	肩部片	
21	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰白	B	肩部片	
22	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	浅黄橙	B	胴上部片	
23	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰	A	肩部片	
24	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	暗灰黄	B	肩部片	
25	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDIKN	にぶい黄橙	B	肩～胴片	内外面摩耗顕著。
26	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙	B	胴下部片	
27	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙	B	肩～胴片	内外面摩耗顕著。
28	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	浅黄	B	胴上部片	
29	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄橙	B	胴部片	内外面摩耗顕著。
30	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄	B	胴上部片	
31	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	浅黄橙	A	口縁部片	
32	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐	B	口～胴20%	
33	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIJN	灰黄	B	胴下部片	
34	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIN	灰白	B	胴下部片	
35	弥生土器 甕	-	-	-	ABCEHIJKN	灰黄褐	B	胴部片	
36	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄橙	B	胴下部片	
37	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐	B	胴下部片	
38	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	暗灰黄	B	胴下部片	
39	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKM	にぶい黄橙	B	胴下部片	
40	打製石斧	最大長18.1cm、最大幅11.9cm、最大厚3.25cm。重量783.4g。粘板岩製。完形。							
41	打製石斧	最大長22.65cm、最大幅10.2cm、最大厚2.8cm。重量739.4g。粘板岩製。完形。							
42	打製石斧	最大長(9.2)cm、最大幅(8.6)cm、最大厚3.75cm。重量(393.3)g。粘板岩製。刃部欠。							
43	磨 石	長径7.1cm、短径6.7cm、最大厚4.6cm。重量326.1g。花崗岩製。完形。							
44	垂 飾	最大長2.9cm、最大幅2.0cm、最大厚1.0cm、孔径0.4～0.5cm。重量8.2g。翡翠製。完形。							
45	土師器 甕	(12.5)	(2.2)	-	ABEHIJ	にぶい黄橙	B	口～頸20%	

第17号住居跡（第36図）

平成12年度調査第３区の126・127－141・142グリッドに位置する。北側大半を８号溝跡に切られており、直接的な切り合い関係はないが、８号溝跡の北側に位置する14号住居跡から本住居跡の北壁が確認されなかったことから、本住居跡が14号住居跡よりも古いと思われる。南西隅付近は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南壁は現時点で4.16mを測る。平面プランも不明であるが、おそらく正方形か縦長の長方形を呈し、主軸方向はＮ－２°－Ｗを指すと思われる。確認面からの深さは0.2m前後を測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は二層（１・２層）からなる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。



第17号住居跡
土層説明（ＡＡ´）
1 黄 灰 色 土：酸化鉄多量、白色粒少量含む。
2 オリーブ灰色土：酸化鉄多量、炭化物、白色粒少量含む。

第18号住居跡
土層説明（ＢＢ´）
3 暗灰色土：焼土粒少量、白色粒微量含む。
4 黄灰色土：酸化鉄少量含む。

第36図　第17・18号住居跡

検出できた範囲が狭かったため、カマドをはじめとして貯蔵穴や壁溝、ピットは確認されなかった。

出土遺物は土師器小片が若干検出されたが、図示できる遺物はなく、また時期を特定し得るものもなかった。よって、本住居跡の時期は８号溝跡との新旧関係から６世紀後半以前の古墳時代後期としか言えない。

第18号住居跡（第36図）

平成12年度調査第３区の127－142グリッドに位置する。カマド煙道部のみの検出である。南側を東西に走る９号溝跡に切られているが、９号溝跡以南にも本住居跡が広がっていたことは間違いない。調査段階ではトレンチを入れてみたが、乾燥が著しく、土層の見極めが非常に困難であったことから残念ながらカマド以外は確認することができなかった。なお、９号溝跡以南には弥生時代中期後半段階の19･20号住居跡が位置しているが、本住居跡は19･20号住居跡上に位置し、19･20号住居跡埋没後に構築されたことから本住居跡が19･20号住居跡よりも新しい。

本住居跡の規模や平面プランなど詳細については不明と言わざるを得ない。ただし、覆土については後述する19号住居跡の上層１～３層に炭化物などの混入物が認められたことから本住居跡の覆土に該当する可能性が高い。

カマド煙道部の規模は、長さ1.14m、幅0.4m前後、確認面からの深さは0.1～0.15mを測る。覆土は二層（3・4層）からなるが、上層（3層）で焼土粒が確認された以外に目立った痕跡はみられない。

カマドのみの確認であるため、貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。9号溝跡以南に隣接して位置するP6～10（第3区全測図参照）は本住居跡に伴う可能性が高いが、確証は得られない。伴うとしてもその位置から主柱穴ではないと思われる。P6～10の詳細については、後述するピットの項を参照のこと。

遺物は検出されなかったが、重複する19・20号住居跡からは6世紀後半と8世紀初頭～前半段階の遺物が検出されており、9号溝跡との新旧関係を考慮すると本住居跡は前者に該当すると思われる。よって、本住居跡の時期は6世紀後半としておきたい。

第19号住居跡（第37図）

平成12年度調査第3区の127－142・143グリッドに位置する。北壁の立ち上がり一部をピット2つに、南側を10号溝跡に切られており、西側は調査区外にある。東側では同時期の20号住居跡と重複しているが、土層の見極めが非常に困難であったことから明確に新旧関係を確認することができなかった。しかし、20号住居跡に比べて本住居跡からは大量の遺物が出土しており、本住居跡の方が圧倒的に遺物の出土数が多いことから本住居跡の方が20号住居跡よりも新しいと思われる。なお、本住居跡の北側上部に位置する18号住居跡は平面プランを確認することができなかったが、本住居跡埋没後に構築されたことから本住居跡よりも新しい。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は現時点で5.5m、東西は3.9mを測る。平面プランも不明であるが、おそらく隅丸の正方形か長方形を呈し、主軸方向はN－18°－Eを指すと思われる。確認面からの深さは最大0.55mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は4～6層が該当する。4・5層は粘土質であり、炭化物を含んでいた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

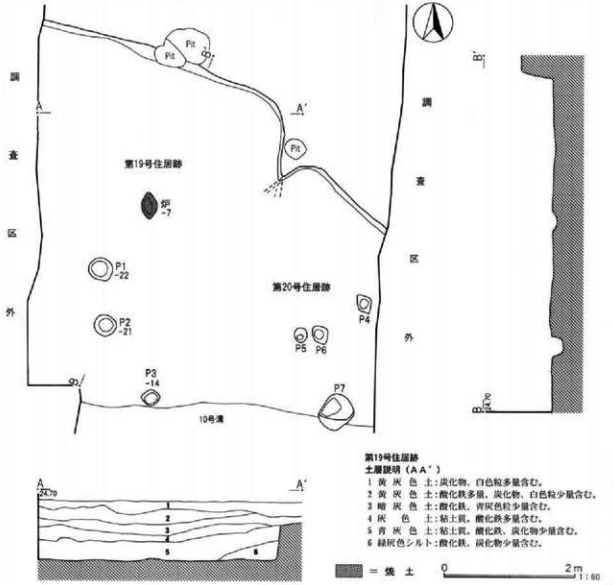
炉跡は床面中央からやや北側に設けられていたと思われる。長軸0.4m、短軸0.23mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.07mと浅い。覆土は図示できなかったが、焼土一層のみであった。

本住居跡に伴うピットは、3つ（P1～3）確認された。いずれも炉跡の南側にあり、その位置から主柱穴とは考えにくい。P1・2は径m前後の円形を呈し、床面からの深さは0.21～0.22mを測るが、P3のみ一辺m前後の方形を呈し、深さ0.1mと一回り小さい。

壁溝や貯蔵穴は確認されなかった。

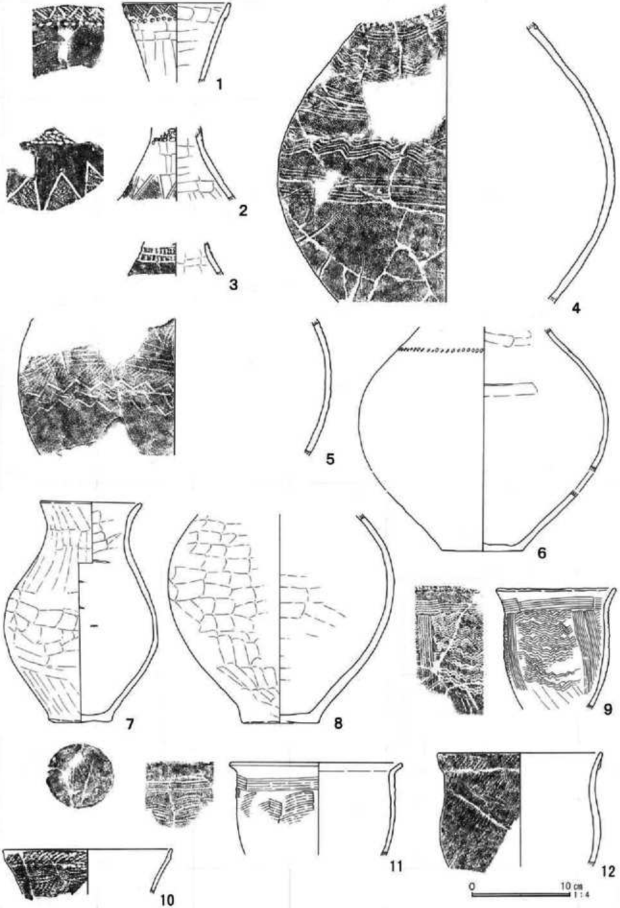
出土遺物（第38～42図）は非常に多く、弥生土器壺（1～8・14・16～27・34～71）、短頸壺（13）、甕（9～12・15・72～107）、高坏（28～32）、ミニチュア土器（33）、土偶型容器（108）、打製石斧（109）、磨製石斧（110）がある。全形を知り得るものはほとんどないが、比較的良好な資料がまとまって検出された。同一個体である49・50・66・68と磨製石斧110はピット1からの検出であり、その他はすべて覆土ないし床面からやや浮いた状態で出土した。この他にも流れ込みの遺物として古墳時代後期の土師器（111・112）や土製紡錘車（113）も検出された。

1～8・14・16～27・34～71は壺。1は口縁部から頸部にかけての部位。複合口縁部には地文として無節Rが施文され、その上に鋸歯文が描かれている。口縁部直下には刺突列が巡り、頸部は無文で横・縦位にヘラナデが施されている。2は頸部から肩部にかけての部位。残存状態は良好である。頸部にはランダ



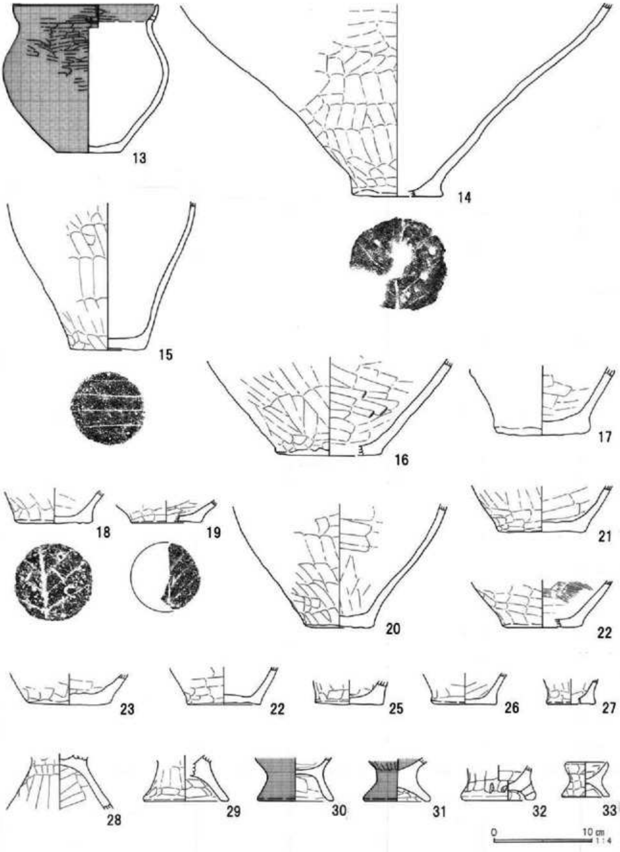
第37図　第19・20号住居跡

ムに刻まれた刺突が横位に巡り、以下無文で縦・斜位のヘラナデが施されている。肩部には鋸歯文が描かれており、内部にＲＬ単節縄文が充填されている。３は肩部。３条の平行沈線間に刺突列が２列刻まれている。以下は無文で横位のヘラナデ調整が施されている。４は肩部から胴下部にかけての部位。ほぼ球形を呈し、最大径を胴部中段に持つ。No.51･52と同一個体である。４本一単位の櫛歯状工具による横位の平行沈線が刺突列下に１条、胴上部及び中段に２条ずつ描かれ、間に同一工具による波状文とＲＬ単節縄文が交互に施文されている。ＲＬ単節縄文は胴部中段下にも施文されており、胴下部は無文で斜・縦位のヘラナデ調整である。５は胴上部から胴下部にかけての部位。上部は大半を欠くため定かではないが、複数の沈線が弧状に巡ることからフラスコ文が描かれていると思われる。フラスコ文下には一部重なるが、横位の平行沈線が巡り、以下ＬＲ単節縄文地に鋸歯文が描かれている。胴下部は無文で斜・縦位のヘラナデ調整である。６は頸部以上を欠き、胴部も中段下を欠くことから図面上で復元したものである。ほぼ球形を呈し、最大径を胴部中段に持つ。摩耗が著しいため、肩部に刻まれた刺突列以外は文様を把握するこ



第38図　第19号住居跡出土遺物（1）

とができなかった。７は全形を知り得る唯一の壺。素口縁で口縁部の開きが小さく、頸部はやや太めで短い。胴部は膨らみが小さく、最大径を中段に持つ。全面無文で内外面ともにヘラナデ調整である。底面には木葉痕が残る。８は肩部以上を欠く。ほぼ球形を呈し、最大径を中段よりやや上に持つ。無文でヘラナデ調整のみである。14･16～27は胴下部から底部にかけての部位ないし底部である。すべて無文でヘラナデ調整である。14は大型の部類に入る。14･18･19の底面には木葉痕が残る。14以外は甕の可能性もある。34は口縁部片。無文で横位のヘラナデ調整のみである。35･36は頸部片。35はやや太めの平行沈線下が無文で横･斜位のヘラナデが施されている。36は２列の刺突列下に平行沈線が横位に巡る。37～39は刺突列が刻まれる肩部片。37は２列の刺突列下にＬＲ単節縄文が施文され、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。38は刺突列上が無文で下にはＬＲ単節縄文、横位の沈線が１条施文されている。39は平行沈線下に無節Ｒと刺突列が施文されている。40～47は鋸歯文が描かれる一群。すべて胴上部片である。40～42･44～46は鋸歯文内、47は鋸歯文内外にＬＲ単節縄文が充填されており、43のみＲＬ単節縄文が充填されている。40･41は鋸歯文下に刺突列が刻まれており、41は刺突列下に平行沈線が巡る。42は鋸歯文下にＲＬ単節縄文が施文されている。47は鋸歯文下に段が設けられており、ＬＲ単節縄文地に縦位の平行沈線が垂下し、間に波状文が複数描かれている。48～57は波状文が描かれる一群。49は胴上部以下に重四角文も描かれている。48は胴上部片、49は頸部から胴部中段までの破片、50･51は肩部片、52･53は頸部から胴上部までの破片、54～56は胴上部片、57は胴下部に近い破片である。48は47と同じく段を持ち、段以下の文様構成は同じであるが、段の上に鋸歯文は描かれていない。49は頸部から肩部まで横位の平行沈線と波状文が交互に配置されており、分かりづらいが肩部の波状文は無節Ｌ地に描かれている。波状文下には横位の沈線と刺突列が巡り、以下には重四角文が描かれている。No.50･66･68と同一個体であり、ピット１からの検出である。51･52は４と同一個体である。53は刺突列下に２本一単位の波状文が複数描かれており、胴部中段よりやや上では波状文間にＲＬ単節縄文が施文されている。54は横位に巡る平行沈線下に波状文が７条描かれており、以下は無文で横位のヘラナデが施されている。55は摩耗が著しくやや分かりづらいが、２本一単位の波状文が複数描かれている。56は無節Ｌ下に複数の波状文が巡る。57はＬＲ単節縄文下に波状文が描かれており、以下は無文で横･斜位のヘラナデが施されている。58～65は横位の平行沈線が描かれる一群。58は肩部片、59～63は胴上部片、64は胴部中段の破片、65は胴下部片である。58は上部が無文で横･斜位のヘラナデが施されており、以下はＬＲ単節縄文地に３本一単位の平行沈線が横位に複数巡る。59は太めの平行沈線が横位に巡る。60はＲＬ単節縄文を地文として上部に横位の平行沈線が巡る。61～63は上部が無文で横位のヘラナデが施されており、以下は横位の平行沈線間にＲＬ単節縄文を施文している。61と63は同一個体である。64は摩耗が著しいため分かりづらいが、上から横位の沈線、ＬＲ単節縄文、横位の平行沈線が施文されており、以下は無文で横･斜位のヘラナデ調整である。65は２本一単位の沈線が横位に巡り、以下は無文で横･斜位のヘラナデが施されている。66～68は重四角文が描かれる一群。すべて重四角文上に刺突列が巡る。66は肩部から胴部中段にかけての破片、67は胴上部片、68は胴部中段の破片である。66･68は49･50と同一個体である。重四角文内に縄文や沈線などはみられない。69～71は重三角文が描かれる一群。69は胴上部片、70･71は胴部中段の破片である。69は重三角文内外にＬＲ単節縄文、70･71はＲＬ単節縄文が施文されている。



第39図　第19号住居跡出土遺物（2）

13は無文の短頸壺。外面及び口縁部内面の調整はヘラミガキであり、赤彩が施されている。胴部内面はヘラナデ調整である。口縁部には焼成前穿孔が１つみられた。

９～12･15･72～107は甕。９･11･72～77は櫛歯状工具で文様が描かれる甕。９･11はともに口縁部に最大径を持ち、胴部の膨らみはほとんどみられないが、９は口縁部の開きが小さく、11はくの字を呈する。口縁部は無文で横位のヘラナデが施され、頸部には櫛歯が横位に巡るが、胴部以下の文様は異なる。９は垂下する櫛歯間に同一工具による波状文が横位に重ねられており、11は縦位に羽状文が描かれている。72～74は縦位の羽状文が描かれる一群。すべて口縁部片であり、73･74は同一個体である。72以外は口縁端部に指頭圧痕が認められた。無文部は横･斜位のヘラナデ調整である。75～77はハケメに近い櫛歯状工具で文様が描かれる一群。75は口縁部から胴上部にかけての破片、76は頸部から胴上部にかけての破片、77は頸部片である。75は口縁端部に刻みを持ち、外面には刺突列が２列巡る。以下は縦位の櫛歯が施文されている。76･77は同一個体であり、76は縦･斜位、77は縦位に施文されている。10･12･78～101は縄文が施文される一群。10は口縁部から頸部にかけて、12は口縁部から胴上部にかけての部位、78～84は口縁部片ないし口縁部から頸部にかけての破片、85～87は胴上部片、88～101は胴部中段の破片である。口縁部は10･12･78～81･83が複合口縁であり、その他は素口縁である。81のみ端部に刻みがみられた。10･12･78･80･82･83･86･88･90･93～97･99はＬＲ単節縄文、79･100は附加条一種ＲＬ＋Ｒ、81･89は無節Ｌ、84･85･87･91･92･98はＲＬ単節縄文、101のみ無節Ｒが施文されている。82は口縁部から頸部にかけて無文で内外面ともに横位のヘラナデ調整であるが、胴部外面に縄文が施文されている。83･84は櫛歯状工具による文様が付け加えられており、83は頸部以下に垂下し、84は頸部を横位に巡る。90･94･99･100は縄文以下無文で横･斜位のヘラナデが施されている。15は胴部中段から底部にかけての部位。文様はみられず、内外面ともにヘラナデ調整である。底面には木葉痕が残る。102･103は無文の胴下部片。102は斜位、103は横位のヘラナデ調整である。104～107はコの字重ね文が描かれる一群。すべて口縁部から胴上部にかけての破片である。104～106は同一個体。受け口状を呈する口縁部に地文としてＲＬ単節縄文が施文され、その上に波状文が描かれている。頸部は無文で横位のヘラナデが施されており、胴部以下にはＲＬ単節縄文地にコの字重ね文が施文されている。口縁部と胴上部には単孔のボタン状貼付文が付けられている。107は口縁部の開きが小さい。口縁部には無節Ｒ、頸部には横位の平行沈線、胴部以下にはコの字重ね文が施文されており、口縁部及びコの字重ね文中央には単孔のボタン状貼付文が付けられている。

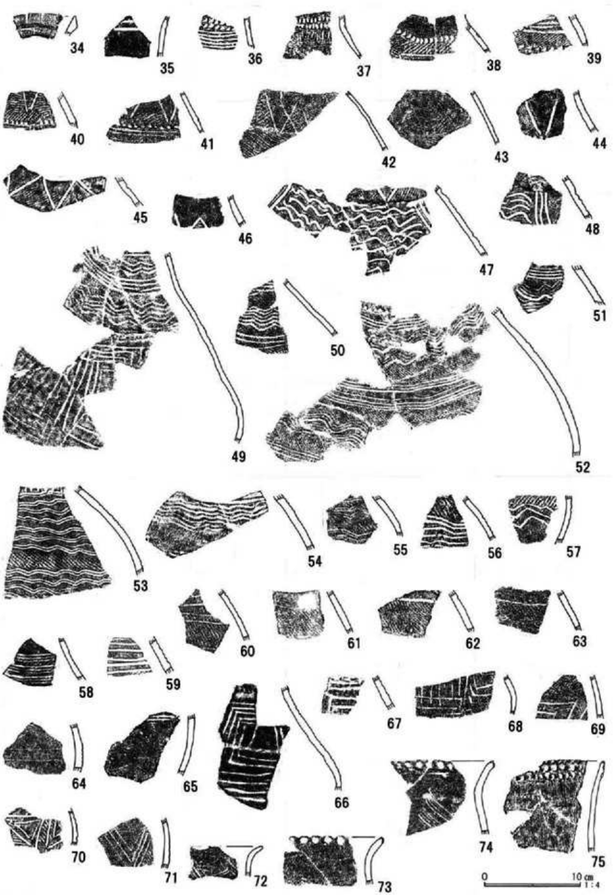
28～32は高坏の脚部。28･29･32は内外面ともにヘラナデ調整であり、30･31は摩耗が著しいためはっきりしないが、ヘラミガキ調整で赤彩が施されている。32は２個一対の焼成前穿孔が前後に設けられている。

33はミニチュア土器。残存状態は比較的良好である。口縁部は小さく外に開く。下にはハの字に開く脚部が付く。内外面ともにヘラナデ調整である。

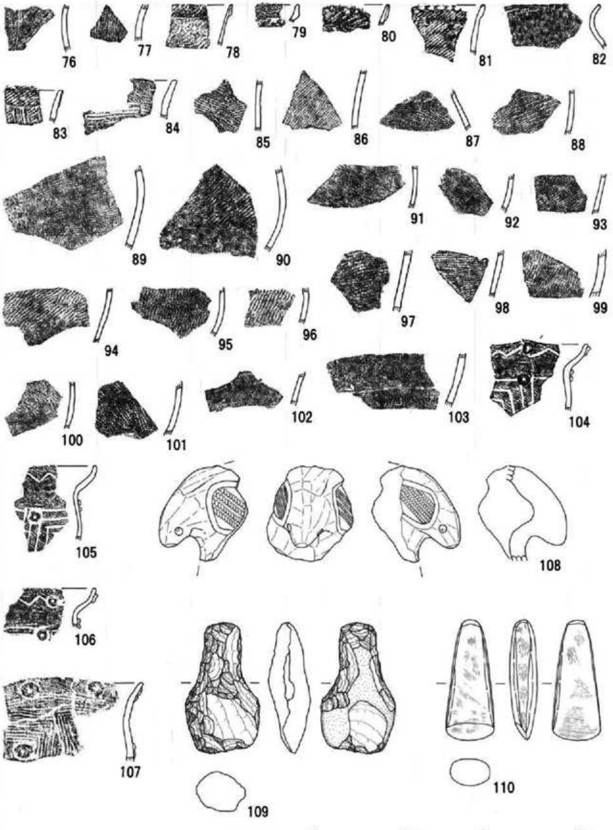
108は土偶型容器。腕部片側のみの検出である。短い腕部先端には穿孔が認められた。胸部及び背中には沈線で区画された中にＲＬ単節縄文が充填されている。腕部はヘラナデ調整である。

109は打製石斧。肩の張る撥型を呈する。片面一部に自然面が残る。完形。

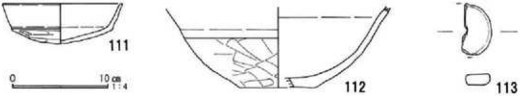
110は磨製石斧。ほぼ全面に研磨痕が認められた。完形。ピット１から出土した。



第40図　第19号住居跡出土遺物（3）



第41図　第19号住居跡出土遺物（4）



第42図　第19号住居跡出土遺物（5）

第17表　第19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器　壺	(12.2)	(7.2)	−	ABEHIKN	にぶい黄橙	B	口〜頸25%	
2	弥生土器　壺	−	(7.65)	−	ABHIK	灰黄褐	B	頸〜肩90%	
3	弥生土器　壺	−	(3.45)	−	ABCDHIKN	浅黄橙	B	肩部40%	
4	弥生土器　壺	−	(29.05)	−	ABHIKN	にぶい黄橙	B	肩〜胴30%	№51・52と同一個体。
5	弥生土器　壺	−	(14.15)	−	ABIKN	灰黄褐	B	胴部20%	内面摩耗顕著。
6	弥生土器　壺	−	(23.1)	8.4	ABDHIKMN	にぶい黄橙	B	肩〜底40%	内外面摩耗顕著。
7	弥生土器　壺	(10.5)	(23.0)	6.7	ABEHIKN	にぶい黄橙	B	50%	外面摩耗顕著。内面輪積痕有。底面木葉痕有。
8	弥生土器　壺	−	(21.65)	(8.2)	ABDGHIN	灰白	B	胴〜底20%	内外面摩耗顕著。
9	弥生土器　甕	(12.4)	(12.5)	−	ABHIJKN	外:にぶい黄橙 内:暗灰黄	B	口〜胴60%	
10	弥生土器　甕	(17.6)	(4.6)	−	ABHIKN	黒褐	B	口〜頸20%	
11	弥生土器　甕	(17.5)	(9.6)	−	ABCDHKN	にぶい橙	B	口〜胴60%	内外面摩耗顕著。
12	弥生土器　甕	(17.2)	(11.7)	−	ABDHIN	にぶい黄橙	B	口〜胴20%	外面摩耗顕著。
13	弥生土器短頸壺	(14.5)	15.4	6.6	ABDGHIKN	浅黄橙	B	60%	口縁部焼成前穿孔有。内外面摩耗顕著。赤彩。
14	弥生土器　壺	−	(19.5)	9.4	ABDHIKN	にぶい黄橙	B	胴〜底20%	底面木葉痕有。外面やや摩耗。内面摩耗顕著。
15	弥生土器　甕	−	(15.25)	7.7	ABIJN	にぶい黄橙	B	胴〜底40%	底面木葉痕有。
16	弥生土器　壺	−	(10.1)	(10.9)	ABHIJKN	にぶい黄橙	B	胴〜底20%	外面やや摩耗。
17	弥生土器　壺	−	(7.2)	(10.0)	ABEHIKN	にぶい黄橙	B	胴〜底100%	外面摩耗顕著。
18	弥生土器　壺	−	(3.5)	8.0	ABDHIKMN	にぶい黄橙	B	底部100%	底面木葉痕有。
19	弥生土器　壺	−	(2.3)	(7.2)	ABHIJK	灰黄褐	B	底部45%	底面木葉痕有。
20	弥生土器　壺	−	(12.7)	7.1	ABEHIN	にぶい黄橙	B	胴〜底30%	内面摩耗顕著。
21	弥生土器　壺	−	(4.8)	9.0	ABCDHJKN	にぶい黄橙	B	底部80%	内外面やや摩耗。
22	弥生土器　壺	−	(4.8)	(8.3)	ABCDJKMN	にぶい橙	B	底部25%	
23	弥生土器　壺	−	(3.2)	(8.6)	ABCDHIKMN	にぶい橙	B	底部100%	
24	弥生土器　壺	−	(3.85)	7.7	ABCHIKMN	外:橙 内:にぶい黄橙	B	底100%	
25	弥生土器　壺	−	(2.45)	7.1	ABDHIKN	にぶい黄橙	B	底部50%	
26	弥生土器　壺	−	(3.3)	(6.8)	ABCDHIKN	浅黄橙	B	底部100%	
27	弥生土器　壺	−	(2.6)	(5.1)	ADHIKLN	暗褐	B	底部25%	
28	弥生土器高坏	−	(5.6)	−	ABDHJKN	にぶい黄橙	B	脚部100%	
29	弥生土器高坏	−	(4.8)	(8.8)	ACDHIN	橙	B	脚部80%	
30	弥生土器高坏	−	(4.0)	(7.9)	ACDEHIJKN	赤	B	脚部80%	外面赤彩、剥離顕著。
31	弥生土器高坏	−	(4.5)	(7.0)	ABDIK	灰白＋赤褐	B	脚部100%	外面・胴部内面赤彩。内外面摩耗顕著。
32	弥生土器高坏	−	(3.6)	(7.8)	ABCIKN	にぶい黄橙	B	脚部100%	脚部焼成前穿孔二個一対二箇所有。
33	ﾐﾆﾁｭｱ土器	(4.5)	(3.55)	(5.0)	ABCIJKN	灰黄褐	B	80%	
34	弥生土器　壺	−	−	−	ABHIKN	暗灰黄	B	口縁部片	
35	弥生土器　壺	−	−	−	ABCEHIKN	浅黄橙	B	頸部片	
36	弥生土器　壺	−	−	−	ABDHIKN	灰黄褐	B	頸部片	
37	弥生土器　壺	−	−	−	ABEIKN	浅黄橙	B	肩部片	
38	弥生土器　壺	−	−	−	ABHIKN	褐灰	B	肩部片	
39	弥生土器　壺	−	−	−	ABCDHIKN	にぶい黄橙	B	肩部片	
40	弥生土器　壺	−	−	−	ABHIKN	灰黄褐	B	胴上部片	
41	弥生土器　壺	−	−	−	ABDHIKMN	黄灰	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
42	弥生土器　壺	−	−	−	ABCDHIKN	にぶい黄橙	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
43	弥生土器　壺	−	−	−	ABEHIKN	にぶい黄褐	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
44	弥生土器　壺	−	−	−	ABCHIKN	浅黄橙	B	胴上部片	
45	弥生土器　壺	−	−	−	ABEHIKN	灰黄褐	A	胴上部片	
46	弥生土器　壺	−	−	−	ABEHIKM	にぶい黄橙	B	胴上部片	
47	弥生土器　壺	−	−	−	ABHIJKN	灰黄褐	B	胴上部片	
48	弥生土器　壺	−	−	−	ABDHIKN	にぶい黄褐	B	胴上部片	
49	弥生土器　壺	−	−	−	ABDHIKMN	灰黄	B	頸〜胴片	P1出土。№50・66・68と同一個体。内面輪積痕有。
50	弥生土器　壺	−	−	−	ABCHIKMN	灰黄	B	肩部片	P1出土。№49・66・68と同一個体。

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
51	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIKN	灰黄	B	肩部片	№4・52と同一個体。
52	弥生土器 壺	−	−	−	ABDIKN	にぶい黄橙	B	肩〜胴片	№4・51と同一個体。
53	弥生土器 壺	−	−	−	ABGHIKMN	灰黄褐	B	肩〜胴片	
54	弥生土器 壺	−	−	−	ABCDHIK	にぶい黄橙	B	胴上部片	
55	弥生土器 壺	−	−	−	ABCHIKN	灰白	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
56	弥生土器 壺	−	−	−	ABEIKN	にぶい黄褐	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
57	弥生土器 壺	−	−	−	ABIJK	黒褐	B	胴下部片	
58	弥生土器 壺	−	−	−	ABCDHIK	浅黄橙	B	肩部片	
59	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIJKN	暗灰黄	B	胴上部片	
60	弥生土器 壺	−	−	−	ABEHIKM	にぶい黄橙	B	胴上部片	
61	弥生土器 壺	−	−	−	ABEHIKMN	外:にぶい黄橙 内:橙	B	胴上部片	№63と同一個体。
62	弥生土器 壺	−	−	−	ABIK	にぶい橙	B	胴上部片	
63	弥生土器 壺	−	−	−	ABDEHIKN	浅黄橙	B	胴上部片	№61と同一個体。
64	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIKN	にぶい黄橙	B	胴部片	摩耗顕著。
65	弥生土器 壺	−	−	−	BCHIKN	灰黄褐	B	胴下部片	
66	弥生土器 壺	−	−	−	ABEHIKMN	外:浅黄橙 内:灰黄	B	肩〜胴片	P1出土。№49・50・68と同一個体。内面輪積痕有。
67	弥生土器 壺	−	−	−	ABCDHIKN	暗灰黄	B	胴上部片	
68	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIKMN	浅黄	B	胴部片	P1出土。№49・50・66と同一個体。内面輪積痕有。
69	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIJKMN	灰黄褐	B	胴上部片	
70	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIKN	にぶい黄橙	B	胴部片	
71	弥生土器 壺	−	−	−	ABDHIKMN	浅黄	B	胴部片	
72	弥生土器 甕	−	−	−	ABIKM	にぶい褐	B	口縁部片	
73	弥生土器 甕	−	−	−	ABCDIKM	灰白	B	口縁部片	№74と同一個体。
74	弥生土器 甕	−	−	−	ABCIKM	にぶい黄橙	B	口〜胴片	№73と同一個体。
75	弥生土器 甕	−	−	−	ABEHKN	にぶい褐	B	口〜胴片	
76	弥生土器 甕	−	−	−	ABCDHIKN	にぶい黄褐	B	頸〜胴片	№77と同一個体。
77	弥生土器 甕	−	−	−	ABCEHIK	にぶい黄橙	B	頸部片	№76と同一個体。
78	弥生土器 甕	−	−	−	ACDHIN	灰黄褐	B	口〜頸片	
79	弥生土器 甕	−	−	−	BHI	黄灰	B	口縁部片	
80	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIN	黒褐	B	口縁部片	
81	弥生土器 甕	−	−	−	AHIK	黒	B	口〜頸片	
82	弥生土器 甕	−	−	−	ABCDHIKN	灰黄褐	B	口〜頸片	
83	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIN	灰黄褐	B	口〜頸片	
84	弥生土器 甕	−	−	−	ABCHIJKN	にぶい黄橙	B	口〜頸片	
85	弥生土器 甕	−	−	−	ABDGHIKN	外:黄褐 内:黄橙	B	胴上部片	
86	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIKN	にぶい黄褐	B	胴上部片	
87	弥生土器 甕	−	−	−	ABCGIKMN	にぶい黄橙	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
88	弥生土器 甕	−	−	−	ABGHIKM	暗褐	B	胴部片	
89	弥生土器 甕	−	−	−	ABCDHIKN	黒褐	B	胴部片	
90	弥生土器 甕	−	−	−	ABDHIKN	にぶい灰黄褐	B	胴部片	
91	弥生土器 甕	−	−	−	ABDHIKM	にぶい黄橙	B	胴部片	
92	弥生土器 甕	−	−	−	ABDGHIKN	灰黄褐	B	胴部片	
93	弥生土器 甕	−	−	−	ABCDHIKN	にぶい黄橙	B	胴部片	
94	弥生土器 甕	−	−	−	ABDEHIKN	灰黄褐	B	胴部片	
95	弥生土器 甕	−	−	−	ABDHIKN	灰黄褐	B	胴部片	
96	弥生土器 甕	−	−	−	ABCHIK	灰黄褐	B	胴部片	
97	弥生土器 甕	−	−	−	ABCIKM	にぶい黄橙	B	胴部片	
98	弥生土器 甕	−	−	−	ABGHIKN	黒褐	B	胴部片	
99	弥生土器 甕	−	−	−	ABEHIN	外:灰黄褐 内:黄褐	B	胴部片	
100	弥生土器 甕	−	−	−	ABCDIKN	灰黄褐	B	胴部片	
101	弥生土器 甕	−	−	−	BCDHIJKN	灰黄	B	胴部片	
102	弥生土器 甕	−	−	−	ABCHIKN	黒褐	B	胴下部片	
103	弥生土器 甕	−	−	−	ABCHIKN	にぶい黄橙	B	胴下部片	外面摩耗顕著。
104	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIKN	にぶい黄橙	B	口〜胴片	№105・106と同一個体。
105	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIKN	にぶい褐	B	口〜胴片	№104・106と同一個体。
106	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIKN	にぶい黄橙	B	口〜胴片	№104・105と同一個体。
107	弥生土器 甕	−	−	−	ABHKN	にぶい黄橙	B	口〜胴片	
108	土偶型容器	現存高(5.5)cm、胎土:ABHIK。色調:外:灰白、暗灰 内:暗灰。焼成:B。残存率:片側腕部のみ。							
109	打製石斧	最大長13.75cm、最大幅7.8cm、最大厚4.15cm。重量436g。粘板岩製。完形。							
110	磨製石斧	最大長12.75cm、最大幅5.05cm、最大厚2.9cm。重量265.6g。砂岩製。完形。							

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
111	土師器 坏	13.2	4.2	-	ABDN	にぶい橙	B	50%	
112	土師器 鉢	-	(8.4)	(7.8)	ACKLN	灰黄	B	30%	
113	土製紡錘車	最大径(5.5)cm、最大厚1.2cm。重量(20.2)g。胎土:ABJK。色調:浅黄。焼成:B。残存率:50%。							

111～113は古墳時代後期の遺物。18号住居跡に伴うものと思われる。111は土師器の坏蓋模倣坏、112は鉢である。113は土製の紡錘車。半分を欠く。

本住居跡の時期は、20号住居跡よりも新しい段階の弥生時代中期後半と思われる。

第20号住居跡（第37図）

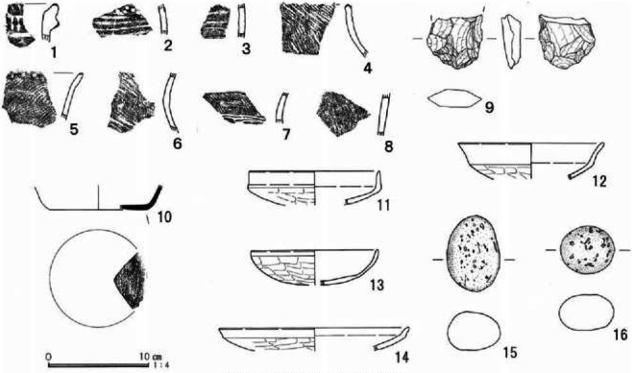
平成12年度調査第３区の126･127－143グリッドに位置する。南側を10号溝跡に切られており、東側は調査区外にある。西側では同時期の19号住居跡と重複しており、切り合い関係は明確にできなかったが、遺物の出土量などから本住居跡が19号住居跡よりも古いと思われる。

他の遺構と重複するため正確な規模は不明であるが、南北は現時点で5.12mを測る。平面プランも不明であるが、おそらく他の同時期の住居跡同様、隅丸の正方形か長方形を呈し、主軸方向はＮ－51°－Ｅを指すと思われる。確認面からの深さは19号住居跡と同じく0.5m前後を測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、灰色系の粘土質の土が数層堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

本住居跡に伴うピットは、４つ（Ｐ４～７）確認された。いずれも床面中央から北側に集中しているが、その位置から主柱穴とは考えにくい。Ｐ４～６は径0.2m前後の円形ないしいびつな楕円形を呈するが、Ｐ７のみ長軸0.54m、短軸0.46mと大きく、平面プランは隅丸長方形を呈する。

炉跡をはじめ、貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第43図）は、弥生土器壷（１～３）、甕（４～８）、打製石斧（９）がある。すべて覆土ないし床面からやや浮いた状態で出土した。すべて破片である。この他にも流れ込みの遺物として須恵器



第43図 第20号住居跡出土遺物

第18表　第20号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	残存率	備 考
1	弥生土器 壺	－	－	－	ABHIN	橙	B	口縁部片	
2	弥生土器 壺	－	－	－	ABDHIN	外:黄褐 内:褐灰	B	胴部片	
3	弥生土器 壺	－	－	－	ABCHIKN	にぶい黄橙	B	胴部片	
4	弥生土器 甕	－	－	－	AHIKN	黒褐	B	口～頸片	
5	弥生土器 甕	－	－	－	ABHIKN	褐灰	B	口～頸片	
6	弥生土器 甕	－	－	－	AHIJKN	にぶい黄褐	B	頸部片	
7	弥生土器 甕	－	－	－	ABDHIKMN	黒褐	B	頸部片	
8	弥生土器 甕	－	－	－	ABDHIKN	にぶい黄橙	B	胴下部片	
9	打製石斧	最大長(5.5)cm、最大幅(5.55)cm、最大厚(1.8)cm。重量(66.8)g。粘板岩製。刃部のみ。							
10	須恵器 坏	－	(2.5)	(9.8)	ABHN	灰黄	B	体～底20%	産地不明。
11	土師器 坏	(13.3)	(3.45)	－	ABEHK	橙	B	20%	外面摩耗顕著。
12	土師器 坏	(14.8)	(3.65)	－	ABDHIN	にぶい黄橙	B	20%	
13	土師器 坏	(13.0)	(3.55)	－	ACHIKN	橙	B	25%	
14	土師器 皿	(19.3)	(2.3)	－	ABDHIKN	にぶい橙	B	15%	
15	軽 石	長径7.65cm、短径5.35cm、最大厚3.9cm。重量80.9g。完形。							
16	軽 石	長径5.5cm、短径4.9cm、最大厚3.7cm。重量51.5g。完形。							

（10）や土師器（11～14）、軽石（15･16）なども検出された。

1～3は壺。1は口縁部片。突帯が1条巡り、口縁端部と突帯に刺突が刻まれている。2･3は胴部中段の破片。2はランダムに刻まれた刺突下に横位の平行沈線が巡る。3は平行沈線が横位に巡る。4～8は甕。4～7は縄文が施文される一群。4～5は口縁部から頸部にかけての破片、6･7は頸部片である。4･5はともに口縁端部に刻みを持つ。4･6は無節R、5はLR単節縄文、7はRL単節縄文が施文されており、7は縄文下に櫛歯状工具による平行沈線が横位に巡る。8は無文の胴下部片。斜位のヘラナデが施されている。9は打製石斧。上部大半を欠く。

10～16は18号住居跡及び9号溝跡に伴うものと思われる。10は8世紀前半の須恵器坏で体部から底部にかけての部位。底面は全面回転ヘラ削りである。11～14は古墳時代後期以降の土師器。11～13は坏。11は坏身模倣坏、12は坏蓋模倣坏、13は北武蔵型坏である。14は皿。坏蓋模倣坏を扁平化した器形を呈する。15･16は軽石。ともに完形。

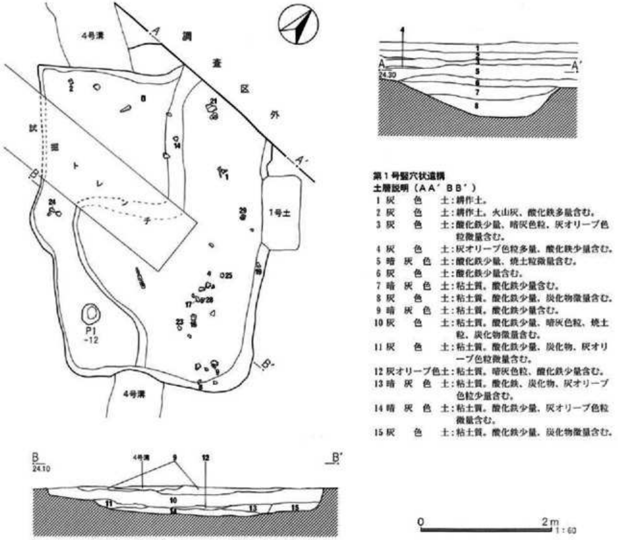
本住居跡の時期は、19号住居跡よりも古い段階の弥生時代中期後半と思われる。

2　竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構（第44図）

平成9年度調査第1区112･113－140･141グリッドに位置する。北西方向から南東方向に走る4号溝跡に北西部及び南側立ち上がりの一部や覆土上部を切られており、東壁北側では1号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。北東隅は調査区外にあり、本遺構中央から西壁北側にかけては試掘調査時に入れたトレンチにより欠く。

正確な規模は不明であるが、長軸5.15m、短軸3.53mを測る、平面プランは長方形を呈する。主軸方向はN－39°－Eを指す。確認面からの深さは西側が0.2m、東側が最大0.44mを測り、西側がテラス状を呈していた。いずれも底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は北東部の調査区境では二層（7･8層）、中央付近では七層（9～15層）確認された。混入物が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

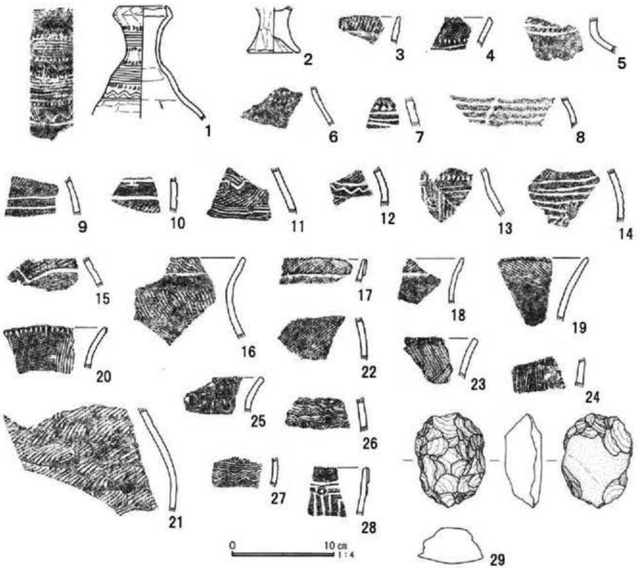


第44図　第1号竪穴状遺構

本遺構に伴うものとして南西隅の底面からは、ピットが１つ検出された。径0.3m前後の円形を呈し、底面からの深さ0.12mを測る。性格については不明である。

出土遺物（第45図）は、弥生土器壺（1・3～15）、甕（16～28）、高坏（2）、円盤状打製石器（29）がある。1・2・8・9・14・16・17・19・21・23～25・28・29は底面上から、その他は覆土から検出された。全形を知り得るものはなく、破片での検出が多い。なお、試掘調査出土遺物（第58図）のうち、第１区のトレンチから出土した１～７は本遺構に伴う可能性が高い。１～７の詳細については後述する試掘調査出土遺物の項を参照のこと。

1・3～15は壺。1は口縁部から胴上部にかけての部位。口縁部は受け口状、肩部から胴上部は瓢箪状を呈する。口縁部は無文でヘラナデが施されており、頸部以下は上から刺突列、平行沈線、刺突列２列、平行沈線、刺突列、波状文、横位の沈線１条が施文されている。文様帯以下は無文でヘラナデ調整である。3・4は口縁部片。ともに素口縁で、3はＬＲ単節縄文下が無文で斜位のヘラナデ調整が施されており、4はＬＲ単節縄文下に刺突列と横位の沈線が施文されている。5は頸部から肩部にかけての部位、6は肩部片である。5はＲＬ単節縄文地に平行沈線が巡り、以下は無文で斜位のヘラナデが施されている。6は刺突列２列下が無文で斜位のヘラナデ調整である。7～10は横位の平行沈線が描かれる一群。7～9は



第45図　第1号竪穴状遺構出土遺物

胴上部片、10は胴部中段の破片である。7はＬＲ単節縄文地に刺突列が刻まれ、下に平行沈線が巡る。8は沈線がやや太めである。9はＬＲ単節縄文下、10はＬＲ単節縄文上に平行沈線が巡る。11・12は波状文が描かれる一群。11は胴上部片、12は胴部中段の破片。11は3本一単位の波状文下にＬＲ単節縄文が施文され、縄文下には同一工具により横位の平行沈線が巡る。12は上下にＬＲ単節縄文が施文され、間に横位の沈線と波状文が巡る。13～15は胴上部片。13は重四角文、14は重三角文が描かれている。13は重四角文上に刺突列が刻まれ、14は重三角文上に平行沈線が巡る。15はＬＲ単節縄文下に弧状の沈線が巡り、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。

16～28は甕。16～22は縄文が施文される一群。16は口縁部から胴上部にかけて、17～19は口縁部から頸部にかけての部位、20は口縁部片、21は胴上部片、22は胴部中段の破片である。16は無文の頸部以外にＲＬ単節縄文が施文されている。無文部は横位のヘラナデ調整である。19・20は複合口縁にＬＲ単節縄文が施文されており、頸部は無文で横位のヘラナデ調整である。19は素口縁で口縁にＲＬ単節縄文が施文され、頸部以下は無文で斜位のヘラナデが施されている。20は口縁端部に刻みを持ち、ＬＲ単節縄文地に櫛歯状工具による平行沈線が垂下する。21・22は全面にＬＲ単節縄文が施文されている。23・24・

第19表　第1号竪穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	4.6	(11.2)	－	ABCHIJKN	灰白	B	口～胴80%	
2	弥生土器高坏	－	(4.65)	(5.2)	ABHIKN	にぶい黄橙	B	脚部85%	
3	弥生土器 壺	－	－	－	ABDHN	灰黄	B	口縁部片	
4	弥生土器 壺	－	－	－	ABCIN	浅黄	B	口縁部片	
5	弥生土器 壺	－	－	－	ABHK	にぶい黄橙	B	頸～肩片	
6	弥生土器 壺	－	－	－	ABHIK	にぶい黄橙	B	肩部片	
7	弥生土器 壺	－	－	－	ABHIKN	灰黄褐	B	胴上部片	
8	弥生土器 壺	－	－	－	ABEHKMN	外:灰黄 内:暗灰	B	胴上部片	
9	弥生土器 壺	－	－	－	ABHIK	にぶい黄橙	B	胴上部片	
10	弥生土器 壺	－	－	－	ABHN	灰黄褐	B	胴部片	
11	弥生土器 壺	－	－	－	ABDIKN	黒褐	B	胴上部片	
12	弥生土器 壺	－	－	－	AHIKN	にぶい黄褐	B	胴部片	
13	弥生土器 壺	－	－	－	ABHI	灰黄褐	B	胴上部片	
14	弥生土器 壺	－	－	－	ABDKMN	にぶい黄橙	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
15	弥生土器 壺	－	－	－	ABHIKMN	にぶい黄	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
16	弥生土器 甕	－	－	－	ABGHIKMN	黒褐	B	口～胴片	内外面摩耗顕著。
17	弥生土器 甕	－	－	－	ABDIKN	灰白	B	口～頸片	
18	弥生土器 甕	－	－	－	ABDHIKN	黒褐	B	口～頸片	
19	弥生土器 甕	－	－	－	ABDHKN	外:灰白,灰 内:黒褐	B	口～頸片	
20	弥生土器 甕	－	－	－	AHIKMN	黒褐	B	口縁部片	
21	弥生土器 甕	－	－	－	ABIKM	黒褐	B	胴上部片	
22	弥生土器 甕	－	－	－	ABDHIKN	灰黄褐	B	胴部片	
23	弥生土器 甕	－	－	－	ABHIKN	黒褐	B	口縁部片	
24	弥生土器 甕	－	－	－	ABCDIN	にぶい黄橙	B	胴部片	
25	弥生土器 甕	－	－	－	ABDHIK	褐灰	B	口縁部片	
26	弥生土器 甕	－	－	－	BEH	灰黄褐	B	胴部片	
27	弥生土器 甕	－	－	－	ABHIKN	黒褐	B	胴部片	
28	弥生土器 甕	－	－	－	ABDIKN	にぶい黄橙	B	口縁部片	
29	円盤状打製石器	最大長9.4cm、最大幅6.8cm、最大厚3.6cm。重量276.9g。粘板岩製。未製品？							

26･27は櫛歯状工具により文様が描かれる一群。23は口縁部片、24･26･27は胴部中段の破片である。23は素口縁で横位の羽状文が描かれている。24は縦位に施されており、26は３本一単位で波状文、27は４本一単位で横位の平行沈線と波状文が描かれている。25は無文の口縁部片。素口縁で内外面ともにヘラナデ調整である。28はコの字重ね文が描かれた口縁部片。複合口縁部は無文で横位のヘラナデ調整が施され、以下にコの字重ね文が描かれている。コの字上部には単孔のボタン状貼付文が付けられている。

２は高坏の脚部。小振りで内外面ともにヘラナデ調整である。赤彩はみられない。

29は円盤状打製石器。片面に自然面が残り、表面には全面に剥離が施されている。未製品か。

本遺構の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

3 溝　跡

第１号溝跡（第46･47図）

平成９年度調査第１区の111･112－140･141グリッドに位置する。本溝跡の南東部を併走する２･３号溝跡と重複しており、本溝跡が２･３号溝跡を切っている。

２･３号溝跡とともに北東方向から南西方向に走るが、北東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは5.42mを測り、２･３号溝跡に比べて最も長い。幅は0.7m前後を測る。深さは確認面からは0.15mと浅かったが、調査区境での土層断面では最大0.42mの深さであったことが確認された。断面形は逆台形を

呈する。覆土は三層（6～8層）からなり、最下層の8層のみ粘土質であった。ほぼ水平に堆積しており、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

底面からはピットが1つ検出された。長軸0.28m、短軸0.21mの長方形を呈し、底面からの深さは0.05mを測る。

遺物が検出されなかったため、本溝跡は2・3号溝跡よりも新しい時期のものとしか言えない。

第2号溝跡（第46･47図）

平成9年度調査第1区の111－140･141グリッドに位置する。本溝跡の北西部を1号溝跡、南東部を3号溝跡が重複しながら併走しており、新旧関係は1号溝跡が本溝跡を切り、本溝跡が3号溝跡を切っている。

1号溝跡と同じく北東方向から南西方向に走るが、北東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは1・3号溝跡に比べて2.68mと短い。幅は0.5m前後を測る。深さは確認面からは0.47mであったが、調査区境での土層断面では最大0.73mの深さであ ったことが確認された。断面形は北側を1号溝跡に切られているため定かではないが、おそらく逆台形を呈すると思われる。覆土は四層（9～12層）からなる。9層以下はすべて粘土質であり、下層の11･12層に混入物が多くみられた。ほぼ水平に堆積しており、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物は古墳時代後期の土師器小片が少量検出されているが、図示できるものはない。よって、本溝跡の時期は3号溝跡よりも新しい段階の古墳時代後期としか言えない。

第3号溝跡（第46･47図）

平成9年度調査第1区の111－140･141グリッドに位置する。本溝跡の北側を併走する1・2号溝跡と重複しており、本溝跡が1・2号溝跡に切られている。

1・2号溝跡と同じく北東方向から南西方向に走るが、北東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは3.13mを測る。幅及び断面形は北側立ち上がりを1・2号溝跡に切られているため不明である。深さは確認面からは0.38mであったが、調査区境での土層断面では最大0.67mの深さであったことが確認された。覆土は五層（13～17層）からなる。すべての層に混入物が認められ、中層の15層以下は粘土質であった。ややランダムな層位であったが、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

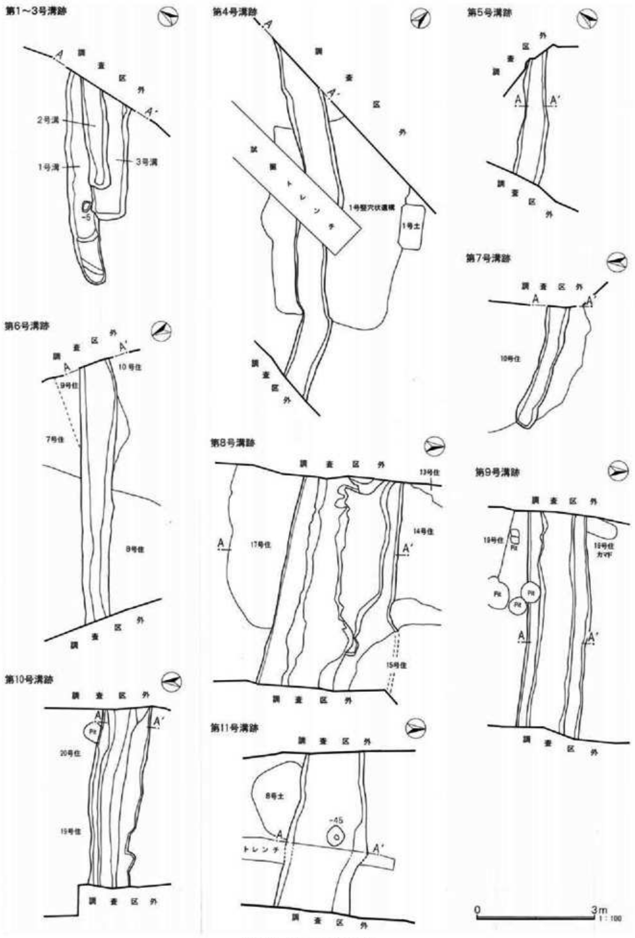
出土遺物は古墳時代後期の土師器小片が少量検出されているが、図示できるものはない。よって、本溝跡の時期は2号溝跡以前の古墳時代後期としか言えない。

第4号溝跡（第46･47図）

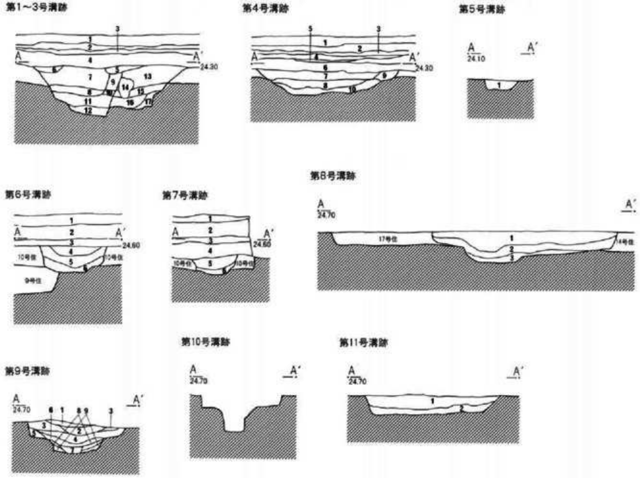
平成9年度調査第1区の112･113－140･141グリッドに位置する。112･113グリッド境付近で1号竪穴状遺構を切っており、また試掘調査時に入れたトレンチにより一部を欠く。

北西方向から南東方向にやや蛇行しながら走る。北西及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは8.4m、幅は0.72～0.96mを測る。深さは確認面からは0.06～0.26mであったが、調査区境での土層断面では最大0.37mの深さであったことが確認された。断面形は船底状を呈する。覆土は四層（7～10層）からなる。粘土質であり、すべての層に混入物が認められた。ほぼ水平に近いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物は古墳時代後期の土師器小片が若干検出されているが、図示できるものはない。後述する試掘調査出土遺物（第58図）に本溝跡に伴うと思われる古墳時代後期の土師器甕（8）があることから本溝



第46図　第1～11号溝跡



第1～3号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰色土：耕作土。
2 灰色土：耕作土。酸化鉄、マンガン粒少量含む。
3 暗灰色土：耕作土。酸化鉄、マンガン粒少量含む。
4 灰色土：酸化鉄、マンガン粒少量含む。
5 灰色土：酸化鉄少量含む。
6 灰色土：酸化鉄少量含む。5層より明るい。
7 灰色土：酸化鉄少量、炭化物微量含む。
8 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰色粒少量含む。
9 暗灰色土：酸化鉄少量含む。
10 灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
11 灰色土：粘土質。酸化鉄少量、焼土粒、炭化物微量含む。
12 暗灰色土：粘土質。酸化鉄少量、炭化物、灰オリーブ色粒・ブロック微量含む。
13 暗灰色土：酸化鉄少量、焼土粒、炭化物微量含む。
14 暗灰色土：酸化鉄少量、焼土粒、炭化物微量含む。13層より暗い。
15 灰色土：粘土質。酸化鉄少量、焼土粒、炭化物微量含む。
16 灰色土：粘土質。酸化鉄少量、焼土粒、炭化物、灰オリーブ色粒微量含む。
17 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰オリーブ色粒・ブロック少量含む。

第7号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰オリーブ色土：耕作土。
2 暗灰黄色土：耕作土。火山灰多量含む。
3 暗灰色土：酸化鉄、焼土粒少量含む。
4 黄灰色土：黄褐色粒、酸化鉄多量、炭化物少量含む。
5 灰色土：酸化鉄、白色粒少量含む。
6 暗灰色土：灰白色粒少量含む。

第4号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰色土：耕作土。
2 灰色土：耕作土。火山灰、酸化鉄多量含む。
3 灰色土：暗灰色粒、酸化鉄、マンガン粒少量含む。
4 灰色土：酸化鉄少量、暗灰色粒、焼土粒微量含む。
5 灰オリーブ色土：暗灰色粒、酸化鉄少量含む。
6 暗灰色土：酸化鉄少量、焼土粒微量含む。
7 灰色土：粘土質。酸化鉄少量、焼土粒微量含む。
8 暗灰色土：粘土質。酸化鉄少量、炭化物微量含む。
9 暗灰色土：粘土質。炭化物多量。酸化鉄少量含む。
10 暗灰色土：粘土質。酸化鉄少量、灰色粒・ブロック微量含む。

第8号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 暗灰色土：酸化鉄多量、白色粒少量含む。
2 暗青灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、白色粒少量含む。
3 灰色土：粘土質。灰白色粘土ブロック多量、酸化鉄少量含む。

第11号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 暗灰色土：酸化鉄、焼土粒・ブロック、炭化物多量含む。
2 灰色土：白色粒多量、酸化鉄少量含む。

第5号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 暗灰色土：粘土質。オリーブ灰色粒・ブロック、酸化鉄少量含む。

第6号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰オリーブ色土：耕作土。
2 暗灰黄色土：耕作土。火山灰多量含む。
3 暗灰色土：酸化鉄、焼土粒少量含む。
4 褐灰色土：酸化鉄少量、焼土粒微量含む。
5 灰色土：酸化鉄、白色粒少量含む。
6 暗灰色土：灰白色粒少量含む。

第9号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黒色土：白色粒少量含む。
2 灰色土：白色粒少量含む。
3 暗灰黄色土：酸化鉄多量含む。
4 灰黄色土：酸化鉄多量、白色粒少量含む。
5 黄灰色土：酸化鉄多量含む。
6 暗灰色土：酸化鉄、白色粒少量含む。
7 灰色土：酸化鉄、白色粒少量含む。
8 黄褐色土：酸化鉄多量含む。
9 黄灰色土：酸化鉄少量含む。

第47図　第1～11号溝跡断面図

跡の時期は古墳時代後期としか言えない。

第５号溝跡（第46·47図）

平成９年度調査第１区の116－139·140グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

北東方向から南西方向に走り、北東及び南西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは3.12mと短く、幅は0.5～0.74mを測る。確認面からの深さは0.15m前後を測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は粘土質の暗灰色土一層のみである。ブロック等を含んでいたが、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出されなかったため、本溝跡は不明と言わざるを得ない。

第６号溝跡（第46·47図）

平成12年度調査第３区の126·127－137·138グリッドに位置する。北西部では底面に影響はなかったが上部を８号住居跡に切られており、南東部では10号住居跡を切っている。また、直接的な切り合い関係にないが、南東部では本溝跡下に弥生時代中期後半段階の９号住居跡が位置している。

北西方向から南東方向に走り、北西及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは6.5m、幅は0.61～0.92mを測る。確認面からの深さは0.1mと浅かったが、、調査区境での土層断面では最大0.4m前後の深さであったことが確認された。断面形は逆台形を呈する。覆土は三層（４～６層）からなる。混入物が少量認められたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、重複する８·10号住居跡との新旧関係から10号住居跡より新しい段階の７世紀後半以降に掘削され、８号住居跡が構築される８世紀初頭以前に埋没したとしか言えない。

第７号溝跡（第46·47図）

平成12年度調査第３区の126－139グリッドに位置する。10号住居跡を切っている。

ほぼ東西方向に走るが、西側はやや北西に傾く。東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは3.19mと短く、幅は0.38～0.58mを測る。確認面からの深さは0.27mであり、断面形はやや船底状を呈する。覆土は二層（５·６層）からなる。混入物が少量認められたが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、10号住居跡との新旧関係から７世紀後半以降としか言えない。

第８号溝跡（第46·47図）

平成12年度調査第３区の126·127－141グリッドに位置する。北西部で14号住居跡、北東部で15号住居跡、南西部で17号住居跡と重複しているが、これらの住居跡すべてを本溝跡が切っている。

ほぼ東西方向に走り、東端及び西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは5.39mであり、幅は３m前後と広い。南北にテラス状の段を持ち、中央からやや南寄りが最も深く掘り込まれていた。確認面からの深さは、テラス状の段までが0.23～0.35m、南寄りの最も深い所で0.46mを測る。覆土は三層（１～３層）からなる。１·２層はほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われるが、３層には粘土ブロックが多くみられ、また遺物が多数出土したことから３層のみ人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物（第48～50図）は多数検出されている。遺物の出土状況は図示できなかったが、残存状態の良い土師器の大半は溝跡底面から検出された。伴う遺物は、土師器坏（８－１～11）、甕（８－12～27）、鉢（８－28）、椀（８－29·30）である。この他に流れ込みの遺物として弥生時代中期後半の土器（８－

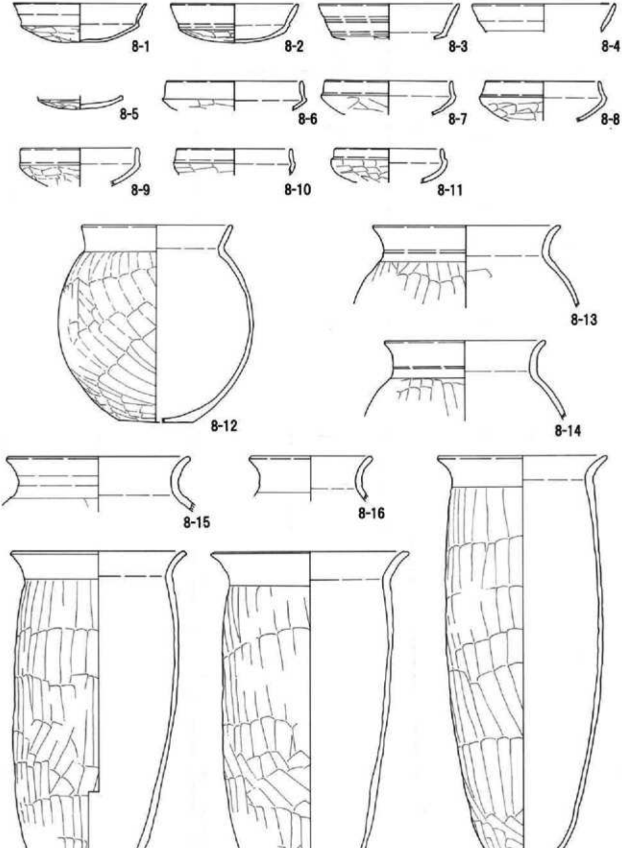
31～51）、古墳時代末以降の須恵器（８－52～55）も覆土から検出された。

８－１～11は土師器坏。１・３・４は有段口縁坏、２は坏蓋模倣坏、６～11は坏身模倣坏である。５は有段口縁坏か坏蓋模倣坏の底部である。有段口縁坏はやや浅身で口径14cm前後を測る。段は１・４が１段、３は２段で沈線化している。２の坏蓋模倣坏も有段口縁坏と同じくやや浅身であるが、口径はやや小さい。坏身模倣坏は口径13.5cm前後でやや浅身のもの（６・７）と口径12cm前後でやや深身のもの（８～11）がみられた。８－12～27は甕。12～16･24･25は丸胴の甕。大型（13･15）、中型（12･14･24）、小型（16･25）と法量にバラエティがみられた。17～23･26･27は長胴の甕。残存状態の良好なものが多い。器高が40cmを超えるものが多いが、22のように小型のものもみられた。いずれも大きく開く口縁部に最大径を持ち、胴部の膨らみは小さい。８－28は鉢。やや受け口状を呈する口縁部に最大径を持つ。８－29･30は椀。残存状態は比較的良好である。器形は異なるが、ともに最大径は胴部中段に持つ。29は30に比べて小振りである。39は口縁部に焼成前穿孔が１つみられた。30は底面に木葉痕が残る。

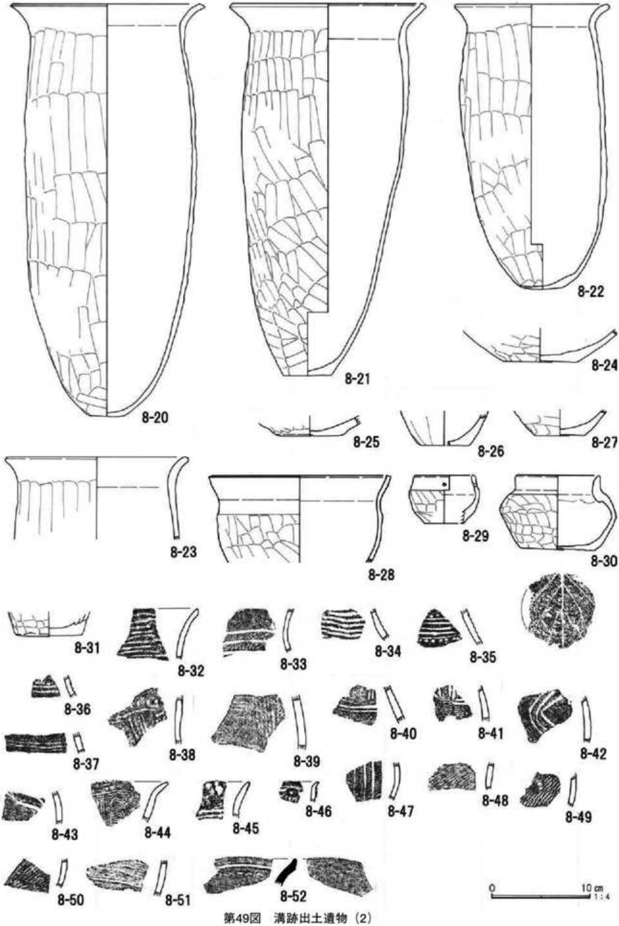
８－31～51は弥生時代中期後半の土器。32～43は壺。32は口縁部から頸部にかけての破片。全面に横位の平行沈線が巡る。33は頸部片。無文部下にＬＲ単節縄文地に横位の平行沈線が描かれている。無文部は横位のヘラナデ調整である。34～36は肩部片。34はやや太めの平行沈線が横位に巡る。35は平行沈線の上下、36は平行沈線上に刺突列が刻まれている。37～41は胴上部片。37は２本一単位の平行沈線が横位に巡る。38は刺突列下に横位に沈線が１条巡り、以下は４本一単位の櫛歯状工具が斜位に描かれている。39～41は重四角文が描かれる一群。39は摩耗が著しいため分かりづらいが、重四角文外にＲＬ単節縄文が施文されている。40は重四角文下にＬＲ単節縄文が施文されている。41はＬＲ単節縄文地に重四角文が描かれている。42･43は胴部中段の破片。ともにフラスコ文が描かれている。42はフラスコ文内外にＬＲ単節縄文、43はＲＬ単節縄文が施文されている。31･44～51は甕。31は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。44･51は櫛歯状工具により文様が描かれる一群。44は口縁部から胴上部にかけての破片、51は胴下部片である。44はくの字に大きく開く口縁部が無文で横位のヘラナデ調整が施されている。頸部は櫛歯が横位に巡り、以下は縦位に垂下する櫛歯脇に同一工具による波状文が描かれている。51はハケメに近い櫛歯が斜位に施文されている。45･46は口縁部から頸部にかけての破片。45は口縁端部に刻みを持ち、以下は無文で横位のヘラナデ調整が施されている。頸部には平行沈線が巡る。46は口縁部が無文で横位のヘラナデ調整である。頸部には横位の沈線が１条巡り、単孔のボタン状貼付文が付けられている。47はＲＬ単節縄文地にコの字重ね文が描かれた胴部中段の破片である。48～50は縄文が施文される一群。48は頸部片、49･50は胴部中段の破片である。48は無節Ｌ、49･50はＬＲ単節縄文が施文されている。

８－52～55は古墳時代末以降の須恵器甕。すべて破片である。52･55は産地不明、53･54は末野産である。52は口縁部から頸部にかけての破片、53は胴上部片、54は胴部中段の破片、55は胴下部片である。52は内外面ともに回転ナデ調整後、頸部に波状文が描かれている。外面には自然釉が付着している。53～55は外面がタタキ、内面には半円形のあて具痕が残る。

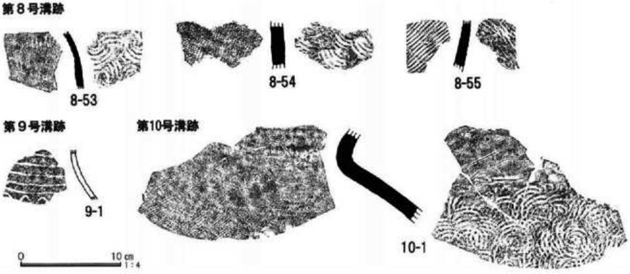
本溝跡の時期は、６世紀後半と思われる。



第48図　溝跡出土遺物（1）



第49図　溝跡出土遺物（2）



第50図　溝跡出土遺物（3）

第９号溝跡（第46・47図）

平成12年度調査第３区の126・127－142グリッドに位置する。北西部で18号住居跡のカマドを切っているが、18号住居跡はカマド以外を確認することができなかったため、結果としてカマドのみを切った形で確認された。よって、本来は本溝跡南側に存在した18号住居跡の床面北側も切っていると思われる。また、本溝跡南側にあるピット群は、18号住居跡に伴う可能性があるものの確証が得られないことから本溝跡との新旧関係は不明と言わざるを得ない。

ほぼ東西方向に走り、東端及び西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは5.5m、幅は1.6m前後を測る。８号溝跡と同じく南北にテラス状の段を持ち、中央部が最も深く掘り込まれていた。確認面からの深さは、テラス状の段までが0.14～0.25m、中央部の最も深い所で0.46mを測る。覆土は九層（１～９層）からなる。混入物の割合が少なく、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第50図）で図示可能なものは弥生土器壺（９－１）のみであるが、本溝跡に伴うものではない。９－１は頸部から肩部にかけての破片。ＬＲ単節縄文地に平行沈線が描かれおり、沈線下には波状文が描かれている。

伴う遺物は検出されなかったが、隣接する19・20号住居跡からは６世紀後半と８世紀初頭～前半段階の遺物が検出されており、前者が重複する18号住居跡、後者が本溝跡に伴うものと思われる。よって、本溝跡の時期は８世紀初頭から前半にかけての段階としておきたい。

第10号溝跡（第46・47図）

平成12年度調査第３区の126・127－143・144グリッドに位置する。北側で19・20号住居跡を切っており、北東部では20号住居跡に伴うピットも切っている。

ほぼ東西方向に走り、東端及び西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは4.55m、幅は0.96～1.4mを測る。８・９号溝跡と同じく南北にテラス状の段を持ち、中央部が最も深く掘り込まれていた。確認面からの深さは、テラス状の段までが0.18m、中央部の最も深い所で0.55mを測る。覆土は図示できなかったが、灰色系の土が数層堆積していた。混入物が少なく、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

第20表　溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
8-1	8号溝跡	土師器 坏	(13.8)	4.0	-	ABHJKN	橙	B	40%	
8-2	8号溝跡	土師器 坏	13.2	4.1	-	ABK	橙	B	70%	
8-3	8号溝跡	土師器 坏	(14.6)	(3.7)	-	ABHKN	にぶい赤褐	B	40%	
8-4	8号溝跡	土師器 坏	(14.9)	(2.95)	-	ABCHK	浅黄橙	B	口～体25%	
8-5	8号溝跡	土師器 坏	-	(1.4)	-	ABCDHIKN	にぶい褐	B	底部100%	
8-6	8号溝跡	土師器 坏	(14.2)	(3.05)	-	ABEHK	橙	B	20%	
8-7	8号溝跡	土師器 坏	(13.2)	(3.55)	-	ABCGHIK	にぶい橙	B	10%	
8-8	8号溝跡	土師器 坏	(12.0)	(4.15)	-	ABCEGHK	褐灰	B	20%	
8-9	8号溝跡	土師器 坏	(12.4)	(4.0)	-	ABCDHIJN	にぶい橙	B	20%	外面剥離顕著。
8-10	8号溝跡	土師器 坏	(12.0)	(2.75)	-	ABEHKN	にぶい赤褐	B	20%	
8-11	8号溝跡	土師器 坏	(11.2)	(3.55)	-	ABEHIKN	にぶい黄橙	B	20%	
8-12	8号溝跡	土師器 甕	(15.6)	20.55	7.5	ABDEGIMN	浅黄橙	B	80%	
8-13	8号溝跡	土師器 甕	(19.4)	(8.5)	-	ABCDHN	浅黄橙	B	口～胴25%	
8-14	8号溝跡	土師器 甕	(16.8)	(8.25)	-	ABCDIN	にぶい黄橙	B	口～胴25%	
8-15	8号溝跡	土師器 甕	(19.0)	(5.7)	-	ABCDHKN	浅黄橙	B	口縁部20%	
8-16	8号溝跡	土師器 甕	(12.8)	(4.7)	-	ABEHKN	橙	B	口縁部40%	
8-17	8号溝跡	土師器 甕	(18.3)	(35.9)	-	ABCDEKN	灰白	B	口～胴60%	
8-18	8号溝跡	土師器 甕	20.7	(32.5)	-	ABCDN	浅黄橙	B	口～胴80%	
8-19	8号溝跡	土師器 甕	17.6	43.0	(4.7)	ABEHKN	浅黄橙	B	80%	
8-20	8号溝跡	土師器 甕	20.3	42.8	3.7	ABDHJN	浅黄橙	B	75%	
8-21	8号溝跡	土師器 甕	(20.4)	38.6	(4.8)	ABDEHN	にぶい褐	B	60%	
8-22	8号溝跡	土師器 甕	16.0	29.7	5.15	ABCDHKN	にぶい橙	B	80%	
8-23	8号溝跡	土師器 甕	(19.0)	(8.5)	-	ABDHIKLN	にぶい橙	B	口～胴20%	
8-24	8号溝跡	土師器 甕	-	(3.5)	(8.0)	ABCEGHJN	灰白	B	底部45%	
8-25	8号溝跡	土師器 甕	-	(2.1)	(7.0)	ABCDHIN	橙	B	底部45%	
8-26	8号溝跡	土師器 甕	-	(3.6)	(5.0)	ABDKN	黒褐	B	底部45%	
8-27	8号溝跡	土師器 甕	-	(2.7)	(5.2)	ABCDHKN	明赤褐	B	底部45%	
8-28	8号溝跡	土師器 鉢	(18.8)	(9.0)	-	ABCHIKN	灰黄褐	B	口～胴25%	
8-29	8号溝跡	**土師器 椀**	6.3	(5.0)	-	ABHIKN	褐灰	B	50%	口縁部焼成前穿孔有。
8-30	8号溝跡	土師器 椀	(8.8)	7.75	7.9	ABDEHIN	灰白	B	80%	底面木葉痕有。
8-31	8号溝跡	弥生土器 壺	-	(2.45)	(6.9)	ABEHIKMN	橙	B	底部25%	
8-32	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKMN	灰白	B	口～頸片	内外面摩耗顕著。
8-33	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABCIKMN	浅黄	B	頸部片	
8-34	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい黄橙	B	肩部片	
8-35	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIKN	にぶい黄橙	B	肩部片	
8-36	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKM	にぶい黄橙	B	肩部片	
8-37	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIK	にぶい黄橙	B	胴上部片	
8-38	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHM	灰黄	B	胴上部片	
8-39	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKMN	黄灰	B	胴上部片	
8-40	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	黄灰	B	胴上部片	
8-41	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄橙	B	胴上部片	
8-42	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABHJKN	にぶい黄橙	B	胴部片	
8-43	8号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHKN	灰黄褐	B	胴部片	外面摩耗顕著。
8-44	8号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	灰黄褐	B	口～胴片	
8-45	8号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄橙	B	口～頸片	
8-46	8号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIKN	灰白	B	口～頸片	
8-47	8号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKMN	黒褐	B	胴部片	
8-48	8号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	AGHIK	黒褐	B	頸部片	
8-49	8号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	黄灰	B	胴部片	
8-50	8号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	黄灰	B	胴部片	
8-51	8号溝跡	土師器 甕	-	-	-	ABEHN	橙	B	胴下部片	
8-52	8号溝跡	須恵器 甕	-	-	-	AEHN	外:紫灰 内:灰	B	口～頸片	産地不明。外面自然釉付着。
8-53	8号溝跡	須恵器 甕	-	-	-	ABLN	黄灰	B	胴上部片	末野産。
8-54	8号溝跡	須恵器 甕	-	-	-	ALN	灰	B	胴部片	末野産。
8-55	8号溝跡	須恵器 甕	-	-	-	ACN	にぶい赤褐	B	胴下部片	産地不明。
9-1	9号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	灰白	B	頸～肩片	
10-1	10号溝跡	須恵器 甕	-	-	-	ABLN	紫灰	B	頸～肩片	末野産。外面自然釉付着。

出土遺物（第50図）で図示可能なものは、須恵器甕（10－1）のみである。頸部から肩部にかけての破片。末野産。頸部は内外面ともに回転ナデ調整が施されており、肩部外面にはタタキ、内面には円形のあて具痕が残る。

本溝跡の時期は、7世紀後半以降としか言えない。

第11号溝跡（第46・47図）

平成12年度調査第3区の126・127－144・145グリッドに位置する。南西部で7号土坑を切っている。

ほぼ東西方向に走り、東端及び西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは4.07m、幅は1.5～2.08m、確認面からの深さは0.28mを測り、断面形は横長の逆台形を呈する。覆土は二層（1・2層）からなる。上層の1層には焼土粒やブロック、炭化物などが多量に含まれており、ほぼ水平に堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

底面ほぼ中央からはピットが1つ検出された。径0.4m前後の円形を呈し、底面からの深さは0.45mを測る。性格は不明であるが、本溝跡に伴うものであることは間違いない。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は7号土坑より新しい段階の古墳時代後期としか言えない。

4 土 坑

第1号土坑（第51図）

平成9年度調査第1区の112－140グリッドに位置する。南西部で1号竪穴状遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。

長軸1.14m、短軸0.57mの長方形を呈する。立ち上がりはほぼ垂直に掘り込まれていた。底面は北西部に比べて南東部が一段低く掘り込まれており、北西部は東西でさらに段差が設けられていた。確認面からの深さは、最も深い南東部で0.3m、北西部の一段高い東側で0.25m、低い西側で0.2mを測る。覆土は四層（1～4層）からなる。いずれも粘土質であり、混入物は少ない。ややランダムな層位であったが、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第2号土坑（第51図）

平成9年度調査第1区の113－141グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、南側が調査区外にある。

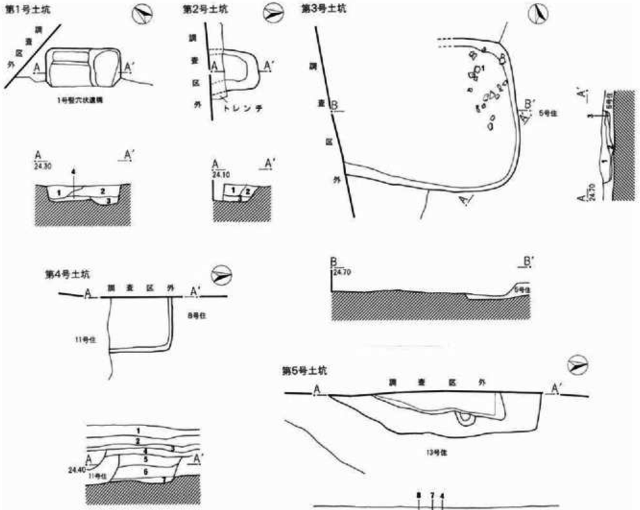
正確な規模は不明であるが、長軸0.73m以上、短軸0.7mの長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.27mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は3層（1～3層）からなる。いずれも粘土質であり、混入物は少ない。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

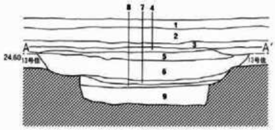
出土遺物（第53図）で図示可能なものは、土師器甕の底部（2－1）のみである。底径及び器形から長胴甕と思われる。器壁が厚い。

本土坑の時期は古墳時代後期としか言えない。

第3号土坑（第51図）

平成12年度調査第3区の126・127－135グリッドに位置する。東側で5号住居跡を切っており、西側は調査区外にある。北側立ち上がりは確認面の都合から途切れている。





第1号土坑
土層説明（AA′）
1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄少量、灰色粒微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量、灰オリーブ色粒微量含む。
3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量、灰オリーブ色粒微量含む。
　　　　　2層より明るい。
4 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量、灰オリーブ色粒微量含む。
　　　　　2・3層より明るい。

第2号土坑
土層説明（AA′）
1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量、炭化物、灰オリーブ色粒微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量、炭化物微量含む。
3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。

第3号土坑
土層説明（AA′）
1 オリーブ褐色土：黄褐色粒、酸化鉄多量、焼土粒、炭化物少量含む。
2 黒 褐 色 土：焼土粒、炭化物多量、酸化鉄少量含む。
3 黒 褐 色 土：灰白色粘土多量、酸化鉄少量含む。

第4号土坑
土層説明（AA′）
1 灰オリーブ色土：耕作土。
2 暗 灰 黄 色 土：耕作土。火山灰多量含む。
3 暗 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒少量含む。
4 灰 黄 色 土：酸化鉄少量、焼土粒、炭化物微量含む。
5 黄 灰 色 土：酸化鉄少量含む。
6 黄 灰 色 土：酸化鉄少量含む。5層より暗い。
7 暗 灰 色 土：酸化鉄多量含む。

第5号土坑
土層説明（AA′）
1 灰オリーブ色土：耕作土。
2 暗 灰 黄 色 土：耕作土。火山灰多量含む。
3 暗 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒少量含む。
4 暗 灰 色 土：酸化鉄、焼土粒、炭化物少量含む。
5 オリーブ黒色土：焼土粒、炭化物多量含む。
6 黄 灰 色 土：酸化鉄多量含む。
7 オリーブ灰色土：シルト質。酸化鉄、白色粒少量含む。
8 暗オリーブ灰色土：シルト質。白色粒少量含む。
9 緑 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、炭化物少量含む。

0　2m　1：60

第51図　第1～5号土坑

正確な規模は不明であるが、長軸2.82m以上、短軸2.35mの隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.15m前後を測る。立ち上がりは緩やかな部分と鋭角に掘り込まれた部分があり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は三層（1～3層）からなる。レンズ状に堆積していたが、混入物が多く認められたことから自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第53図）で図示可能なものは、弥生土器壺（3－1）のみであるが、本土坑に伴うものではない。3－1は胴下部から底部にかけての部位であり、文様はみられない。内外面ともにヘラナデ調整であり、底面には木葉痕が残る。甕の可能性もある。

本土坑の時期は5号住居跡との新旧関係から6世紀後半以降としか言えない。

第4号土坑（第51図）

平成12年度調査第3区の127－138グリッドに位置する。発掘調査時点では本土坑が8号住居跡を切り、南側で11号住居跡に切られているように思われたが、整理調査で8・11号住居跡の出土遺物を比較した結果、8号住居跡が11号住居跡よりも新しいことが判明したため、本土坑は8号住居跡に切られていたと思われ、11号住居跡との新旧関係については不明と言わざるを得ない。西側は調査区外にある。

正確な規模及び平面プランは不明であるが、検出できた南北は現時点で0.97m、東西は0.84mを測り、おそらく長方形か正方形を呈すると思われる。深さは確認面からは0.08mと非常に浅かったが、調査区境の土層断面では最大0.42mの深さであったことが確認された。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は三層（5～7層）からなる。混入物はほとんどみられない。ほぼ水平に堆積しており、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は8号住居跡との新旧関係から8世紀初頭以前としか言えない。

第5号土坑（第51図）

平成12年度調査第3区の127－140グリッドに位置する。13号住居跡の床面を切っており、西側大半は調査区外にある。

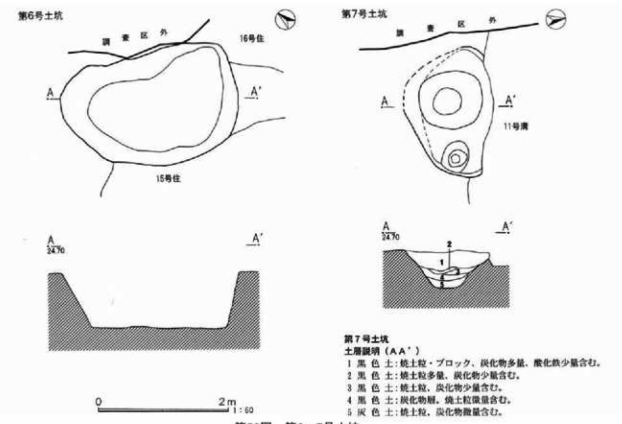
検出された範囲が少ないため正確な規模は不明であるが、現時点での南北は3.2m、東西は0.72mを測る。平面プランはおそらく長方形を呈すると思われる。深さは確認面からは0.58mであったが、調査区境の土層断面では最大0.82mの深さであったことが確認された。立ち上がりは緩やかであり、0.4m前後の深さで一旦テラス状となり、そして底面まではほぼ垂直に掘り込まれていた。底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は五層（5～9層）からなる。下層の7～9層はシルト質であった。ほぼ水平に近いがレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は13号住居跡との新旧関係から6世紀後半以降としか言えない。

第6号土坑（第52図）

平成12年度調査第3区の125・126－139・140グリッドに位置する。南西部で15号住居跡、北東部で16号住居跡と重複するが、新旧関係は把握できなかった。

長軸2.71m、短軸1.78mのややいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは0.85mを測る。立ち上がりはほぼ垂直に近い部分と鋭角に掘り込まれた部分があり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦で



第52図　第6・7号土坑

あった。覆土は図示できなかったが、炭化物を含む灰色系の粘土質の土が数層堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第53図）で図示可能なものは、弥生土器壺（6－1）、甕（6－2・3）のみである。すべて破片であり、覆土から検出された。

6－1は胴上部片。ＬＲ単節縄文下に刺突列が巡り、以下には重四角文が描かれている。2は口縁部片。端部も含めて外面にはＬＲ単節縄文が施文されている。3は胴部中段の破片。摩耗が著しいため分かりづらいが、無節Ｒが全面に施文されている。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

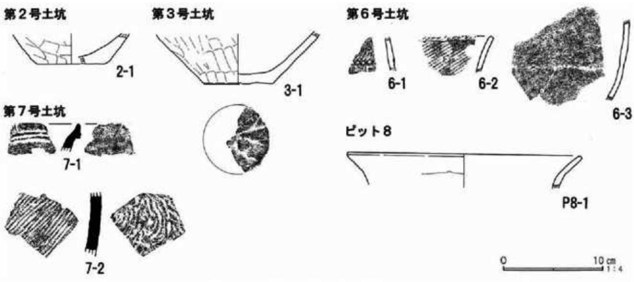
第7号土坑（第52図）

平成12年度調査第3区の127－144・145グリッドに位置する。北側立ち上がりを東西方向に走る11号溝跡に切られている。南側立ち上がりは発掘調査時に入れたトレンチにより欠く。

長軸2m、短軸1.36mのややいびつな楕円形を呈する。立ち上がりは東西がほぼ垂直に近く、南北は緩やかに掘り込まれていた。底面の東西にはピット状の掘り込みが設けられており、西側は径0.9m、東側は径0.4m前後の円形を呈する。確認面からの深さは西側のピット状底面までは0.53m、東側は0.58mを測る。覆土は五層（1～5層）からなる。すべての層に炭化物を含み、中層では炭化物層（4層）が認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第53図）で図示可能なものは、須恵器甕（7－1・2）のみである。ともに破片であり、覆土からの検出である。末野産。

7－1は口縁部から頸部にかけての破片。内外面ともに回転ナデ調整である。2は胴部中段の破片。外



第53図　土坑・ピット出土遺物

第21表　土坑出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
2-1	2号土坑	土師器　甕	–	(3.1)	(7.4)	AHJKN	黒	B	底部20%	
3-1	3号土坑	弥生土器　壺	–	(5.3)	(7.0)	ABHIJKMN	灰黄褐	A	胴～底40%	底面木葉痕有。
6-1	6号土坑	弥生土器　壺	–	–	–	ABCHIKN	外:黄橙　内:灰	B	0	外面摩耗顕著。
6-2	6号土坑	弥生土器　甕	–	–	–	ABHIKN	灰黄褐	B	口縁部片	
6-3	6号土坑	弥生土器　甕	–	–	–	ABHIKN	橙	B	胴部片	外面摩耗顕著。
7-1	7号土坑	須恵器　甕	–	–	–	ABLN	灰	B	口～頸片	末野産。
7-2	7号土坑	須恵器　甕	–	–	–	ABDLN	灰褐	B	胴部片	末野産。

面にタタキ、内面に半円形のあて具痕が残る。

本土坑の時期は、11号溝跡より古い段階の古墳時代後期としか言えない。

5　土器棺墓

第１号土器棺墓（第54図）

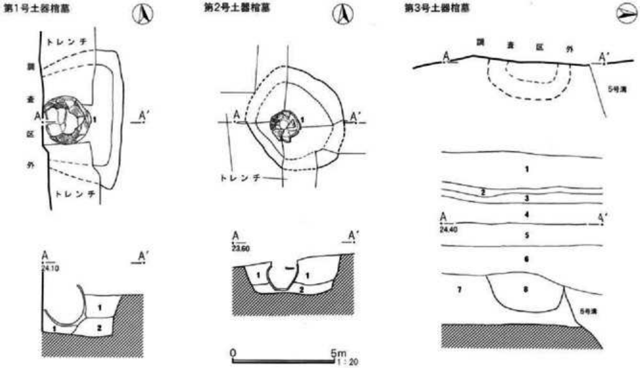
平成９年度調査第１区の113－141グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、南側立ち上がりは調査区外にある。

土器棺の埋設された土坑の正確な規模は不明であるが、検出された南北は現時点で0.4m、東西は0.67mを測る。平面プランはおそらくいびつな正方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.21mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや北側に傾くが、ほぼ平坦であった。

土器棺は土坑のほぼ中央部分に埋設されたと思われる。検出されたのは棺身である壺のみであり、肩部以上を故意に打ち欠かれた状態で確認された。棺蓋となる土器は検出されなかったが、棺身の壺に開けられた孔の状況からみると本来は存在していたと思われる。壺は土坑底面から0.04mの高さに南側にやや傾いた状態で埋設されており、周囲には粘土質の灰色土が埋められていた。壺の内部にも灰色土が入り込んでいたが、土中から骨などは検出されなかった。

出土遺物（第55図）は、棺身に使用された弥生土器壺（１－１）のみである。

１－１は壺の胴上部から底部にかけての部位。胴部は倒卵形を呈し、最大径を胴部中段よりやや上に持つ。文様は胴上部から中段下まで施文されている。胴上部は上から波状文、ＬＲ単節縄文、横位の沈線１



第1号土器棺墓
土層説明（AA′）
1 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量含む。
2 灰　色　土：粘土質。酸化鉄、灰色粒少量含む。1層より明るい。

第2号土器棺墓
土層説明（AA′）
1 暗オリーブ灰色土：粘土質。オリーブ灰色粒、酸化鉄少量含む。
2 灰　　色　　土：粘土質。暗オリーブ灰色粒、酸化鉄少量含む。

第3号土器棺墓
土層説明（AA′）
1 灰　色　土：耕作土。
2 灰　色　土：耕作土。火山灰、酸化鉄少量含む。
3 灰　色　土：耕作土。酸化鉄、マンガン粒少量含む。
4 灰　色　土：酸化鉄、マンガン粒少量含む。
5 灰　色　土：酸化鉄、マンガン粒少量含む。4層より暗い。
6 灰　色　土：酸化鉄、灰色砂少量含む。
7 灰　色　土：酸化鉄、灰色粒・ブロック少量含む。6層より暗い。
8 灰　色　土：酸化鉄少量含む。7層より明るい。

第54図　第1～3号土器棺墓

条、波状文５条が施文されており、波状文下は胴部中段下までＬＲ単節縄文が施文されている。以下は無文で斜・横位のヘラナデ調整である。底面には木葉痕が残る。

本土器棺墓の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第２号土器棺墓（第54図）

平成９年度調査第１区の115－140･141グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

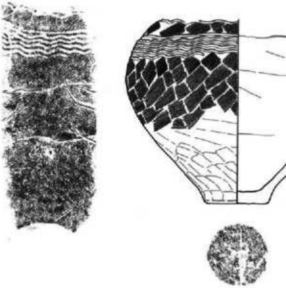
土器棺の埋設された土坑は、長軸0.54m、短軸0.44mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.18mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。

土器棺は土坑の中央からやや南西寄りに埋設されていた。調査段階では、棺身である壺のみが確認されていたが、壺の内部からは棺蓋に使用されたと思われる甕も検出された。壺は肩部以上を打ち欠いており、甕は胴下部のみの検出であったが、本来は底部まで残存していたと思われる。壺は底面から0.02mの高さにほぼ正位で埋設されており、周囲には粘土質の灰色系の土が埋められていた。壺の内部からは棺蓋の甕以外に骨などは検出されなかった。

出土遺物（第55図）は、棺身に使用された弥生土器壺（２－１）と棺蓋に使用された甕（２－２）のみである。

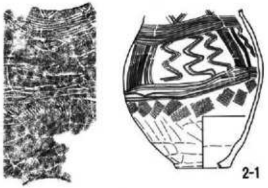
１は壺の胴上部から底部にかけての部位。最大径を胴部中段に持つが、胴部の膨らみは小さい。文様

第１号土器棺墓



1

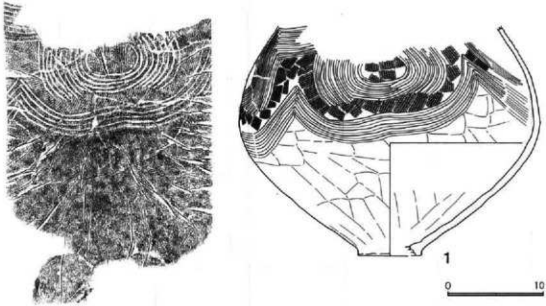
第２号土器棺墓



2-1

2-2

第３号土器棺墓



1

第55図　第1～3号土器棺墓出土遺物

第22表　第1号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	弥生土器　壺	-	(19.55)	7.0	ABHIJKN	灰白	B	胴～底90%	

第23表　第2号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	弥生土器　壺	-	(16.8)	(5.8)	ABEHKN	灰黄褐	B	胴～底40%	外面やや摩耗。
2	弥生土器　甕	-	(5.4)	-	ABHKN	にぶい黄橙	B	胴下部60%	

第24表　第3号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	弥生土器　壺	-	(24.35)	(6.8)	ABDEHIKN	にぶい黄褐	B	胴～底30%	

は胴上部から中段下まで施文されており、主に２本一単位の工具で描かれている。工具による横位の平行沈線が胴上部と中段下に複数巡り、胴上部の平行沈線上には鋸歯文が描かれており、胴上部と中段下を巡る平行沈線間には縦位の平行沈線と波状文を垂下させている。胴部中段の平行沈線下には無節Ｒが施文されており、以下は無文で斜・横位のヘラナデ調整が施されている。２は甕の胴下部。上にはＬＲ単節縄文が施文され、以下は無文で斜位のヘラナデ調整が施されている。

本土器棺墓の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第３号土器棺墓（第54図）

平成９年度調査第１区の116－140グリッドに位置する。北側で５号溝跡と立ち上がりの極一部が重複するが、新旧関係は不明である。なお、第３号土器棺墓は、確認面よりも上の層で棺身である壺が単独出土したことにより確認されたことから土器棺を埋設した土坑は平面的に確認することができず、調査区境での土層断面で掘り込みが確認されたにとどまる。

土坑の正確な規模及び平面プランは不明であるが、確認できた土坑の南北は0.4m、深さは0.19mを測る。立ち上がりはやや鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。

土器棺の埋設状況についても詳細は不明と言わざるを得ない。ただし、壺は胴上部の大半を欠くが、肩部以上を欠いていることから、おそらく本土器棺墓も肩部以上を打ち欠いて棺身とし、そして孔を覆うために別の土器を蓋として使用したと想定される。覆土については、調査区境での土層断面のみの観察であるが、1・2号土器棺墓と同じく灰色土が埋められていたと思われる。

出土遺物（第55図）は、棺身に使用されたと思われる弥生土器壺（３－１）のみである。

３－１は壺の胴上部から底部にかけての部位。胴部は算盤玉に近く、最大径を中段に持つ。文様は胴上部から中段下まで描かれている。胴上部には複数沈線によりフラスコ文が描かれており、下には弧状に平行沈線が巡る。フラスコ文内外及び弧状に巡る平行沈線上にはＬＲ単節縄文が充填されている。胴下部は無文で横・斜位のヘラナデ調整が施されている。

本土器棺墓の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

6　ピット

ピットは全調査区を通して計13基と検出数が非常に少ない。内訳は、平成９年度調査第１区が３基（Ｐ１～３）、平成12年度調査第３区が10基（Ｐ４～13）であり、平成９年度調査第２区からは確認されていない。第１区では３基が調査区全体に散在する形で検出された。第３区では集中箇所が大きく３つに

第25表　ピット計測表

No.	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　考	No.	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　考
P1	第1区115-140G	0.54	0.48	0.11		P8	第3区127-142G	0.66	0.49	0.46	18号住に伴う可能性有。
P2	第1区113-141G	0.91	0.65	0.26		P9	第3区127-142G	0.49	0.39	0.41	18号住に伴う可能性有。
P3	第1区112-141G	−	−	0.3		P10	第3区127-142G	0.37	0.22	0.3	18号住に伴う可能性有。
P4	第3区126・127-136G	0.48	0.42	0.26		P11	第3区127-143G	0.32	0.28	0.46	
P5	第3区126・127-136G	0.69	0.51	0.47		P12	第3区127-145G	0.58	0.51	0.33	
P6	第3区127-142G	0.54	0.49	0.33	18号住に伴う可能性有。	P13	第3区127-145G	0.46	0.41	0.11	
P7	第3区127-142G	0.46		0.3	18号住に伴う可能性有。						

第26表　ピット出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
8-1	ピット8	土師器　甕	(24.0)	(3.4)	-	ABGHIKMN	橙	B	口縁部20%	

分けられる。１つ目は調査区北側の126・127−136グリッドで２基（Ｐ４・５）、２つ目は調査区中央からやや南寄りの127−142・143グリッドで６基（Ｐ６〜11）、３つ目は調査区南側の127−145グリッドで２基（Ｐ12・13）である。第３区の２つ目に挙げたピット群（Ｐ６〜11）については、18号住居跡でも述べたとおり住居跡に伴う可能性があるが、その他のピットについてはいずれもほぼ単独での検出であり、規則性が見出せない。また、出土遺物が皆無に等しく、時期の特定も困難である。

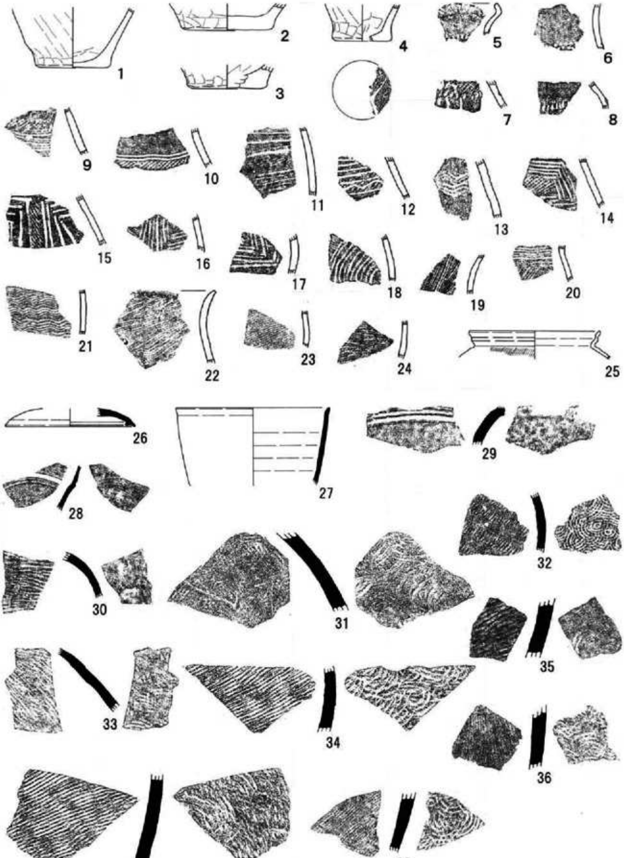
ピットについては性格も含めて不明な点が多いと言わざるを得ない。各ピットの計測値等については、第25表を参照のこと。

出土遺物は皆無に等しく、図示可能な遺物はピット８から出土した土師器甕（第53図Ｐ８−１）のみである。土師器の長胴甕の口縁部。内外面ともに横ナデ調整であり、外面に輪積痕が残る。

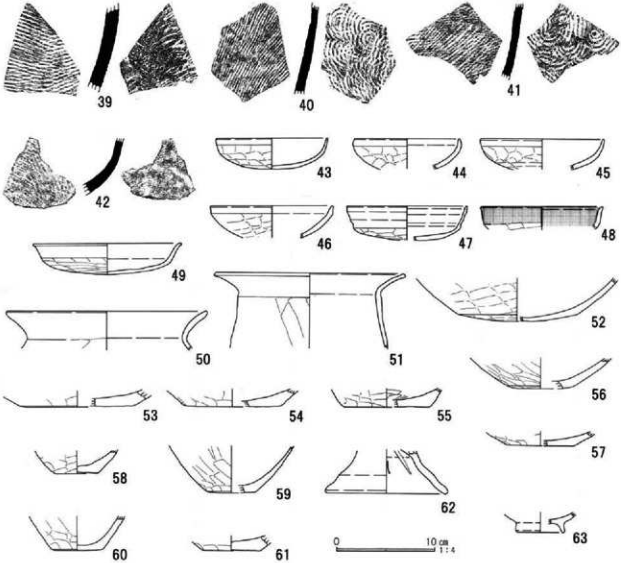
7　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器、古墳時代末以降の須恵器、土師器、近世の陶器などがある。古墳時代前期と近世は遺構が確認されなかったが、古墳時代前期の遺物は流れ込みとして住居跡から検出されていることから遺構外と遺構内出土遺物は時代・時期がほぼ合致する。弥生土器は全調査区から検出されているが、古墳時代前期以降の遺物は平成12年度調査第３区にほぼ限定される。以下、時代・時期及び遺物ごとに順を追って述べる。

第56図１〜24は弥生時代中期後半の土器。２・３・５〜18は壺。２は胴下部から底部にかけての部位、３は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。甕の可能性もある。５は口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は受け口状を呈する。口縁部は横位のヘラナデ調整、頸部はハケメに近い櫛歯状工具により縦位に施文され、下には刺突列が巡る。６は頸部片。無文部下に刺突列が２列刻まれている。無文部は横・斜位のヘラナデ調整である。７〜10・12・13は肩部片。７はＬＲ単節縄文下に刺突列が巡り、以下は縦位の沈線が描かれている。８は無文部下に刺突列が巡る。無文部は横位のヘラナデである。９はＬＲ単節縄文下に横位の平行沈線が巡る。10は無文部下に２本一単位の沈線が横位に巡り、以下はＬＲ単節縄文が施文されている。12はＬＲ単節縄文地に横位の平行沈線が巡り、下部には平行沈線間に波状文が１条描かれている。13は上下が無文で横・斜位のヘラナデ調整が施されており、間に２本一単位の波状文が複数描かれている。11・14〜17は重四角文が描かれる一群。11・16・17は胴部中段の破片、14・15は胴上部片である。14は重四角文内にＬＲ単節縄文、15は重四角文間にＲＬ単節縄文が充填されている。16・17は２



第56図　遺構外出土遺物（1）



第57図　遺構外出土遺物（2）

本一単位で描かれている。18はフラスコ文が描かれた胴上部片。フラスコ文外にＲＬ単節縄文が施文されている。19～24は甕。19～21は櫛歯状工具により文様が描かれる一群。19は頸部片、20は頸部から胴上部にかけての部位、21は胴部中段の破片である。19は縦･斜位に施文されており、ハケメに近い。20は５本一単位で横位に描かれており、下に同一工具で羽状文と思われる文様が描かれている。21は４本一単位で波状文が横位に巡る。22～24は縄文が施文される一群。22は口縁部から胴上部にかけての部位、23･24は胴部中段の破片である。22は無節Ｌ、23･24はＬＲ単節縄文が施文されている。

第56図25は古墳時代前期の土師器甕。口縁部から胴上部にかけての部位。口縁部はＳ字状を呈し、胴上部は口縁部より膨らむ。器壁が薄い。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面はハケメ調整である。

第56図26～38、第57図39～42は古墳時代末以降の須恵器。産地不明のものもあるが、末野産が多い。26は蓋。口縁部内面にかえりが付く。やや小振りである。27は椀。口縁部から体部までほぼ直線的に小さく開く。28は壺の口縁部から頸部にかけての破片。内外面ともに回転ナデ調整であり、口縁部下には１条の沈線が横位に巡る。29～42は甕。29は口縁部から頸部にかけての破片、30･31･33は肩部片、32

第27表　遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	第3区	弥生土器 甕	-	(6.05)	(7.6)	ABHKMN	灰白	B	胴～底100%	
2	第3区	弥生土器 壺	-	(2.8)	(9.4)	ABCHIKMN	にぶい橙	B	底部100%	
3	第3区	弥生土器 壺	-	(2.5)	8.3	ABDHIKM	浅黄	B	底部30%	
4	第3区	弥生土器 甕	-	(3.8)	(6.2)	ABDHIN	にぶい黄橙	B	底部30%	底面木葉痕有。
5	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHMN	にぶい黄橙	B	口～頸片	
6	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHK	外:黄橙 内:灰黄	B	頸部片	
7	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCIKN	にぶい黄橙	B	肩部片	
8	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	灰白	B	肩部片	
9	第2区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	灰白	B	肩部片	
10	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐	A	肩部片	
11	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIKMN	黄灰	B	胴上部片	
12	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHN	にぶい黄橙	B	肩部片	
13	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外:灰黄 内:黄灰	B	肩部片	外面摩耗顕著。
14	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKMN	灰白	B	胴上部片	
15	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい黄橙	B	胴上部片	
16	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKM	浅黄橙	B	胴上部片	
17	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	AIJKMN	灰	B	胴部片	外面やや摩耗。
18	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIN	にぶい黄橙	B	胴上部片	
19	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰褐	B	頸部片	
20	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIK	灰黄褐	B	頸～胴片	
21	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	黒褐	B	胴部片	
22	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIKN	にぶい黄橙	B	口～頸片	
23	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	黒褐	B	胴部片	
24	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKMN	外:黒褐 内:褐	B	胴部片	
25	第3区	土師器 甕	(13.7)	(2.9)	-	ABHKN	にぶい橙	B	口縁部15%	
26	第1区	須恵器 蓋	(13.5)	(1.85)	-	AB	灰白	B	20%	産地不明。
27	第3区	須恵器 椀	(16.0)	(8.0)	-	ABHLN	灰白	B	口～体20%	末野産。
28	第3区	須恵器 壺	-	-	-	AHN	灰	A	口～頸片	産地不明。
29	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABCHN	灰	B	口～頸片	産地不明。
30	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABLN	灰	B	肩部片	末野産。
31	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABCHJKLN	灰白	B	肩部片	末野産。
32	第1区	須恵器 甕	-	-	-	ABN	灰白	B	胴上部片	産地不明。
33	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABHLN	灰	A	肩部片	末野産。
34	第3区	須恵器 甕	-	-	-	AHLN	褐灰	B	胴部片	末野産。
35	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABHL	灰	B	胴下部片	末野産。
36	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABN	灰	B	胴下部片	産地不明。
37	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABLN	灰褐	B	胴下部片	末野産。
38	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABH	黄灰	B	胴下部片	産地不明。
39	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABLN	灰白	B	胴下部片	末野産。
40	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABH	黄灰	B	胴下部片	産地不明。
41	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABHN	灰白	B	胴下部片	産地不明。
42	第3区	須恵器 甕	-	-	-	ABLN	灰	B	胴～底片	末野産。
43	第3区	土師器 坏	(11.6)	3.2	-	ABHIKN	橙	A	45%	外面やや摩耗。
44	第3区	土師器 坏	(11.0)	(3.15)	-	ABCHIKN	橙	B	20%	外面やや摩耗。
45	第3区	土師器 坏	(12.9)	(3.15)	-	ABDHIKN	橙	B	30%	内外面摩耗顕著。
46	第3区	土師器 坏	(12.8)	3.3	-	ABEHKN	橙	B	20%	内外面摩耗顕著。
47	第3区	土師器 坏	(12.5)	(3.55)	-	ABEGHKN	明赤褐	B	45%	
48	第3区	土師器 坏	(12.7)	(2.4)	-	ABCN	にぶい橙	B	20%	比企型坏。口縁部外面・内面赤彩。
49	第2区	土師器 皿	(15.4)	3.25	-	ABEHKN	橙	B	40%	
50	第3区	土師器 甕	(20.8)	(4.1)	-	ABDHIKM	にぶい橙	B	口縁部20%	
51	第3区	土師器 甕	(19.8)	(7.7)	-	ABCDHN	にぶい黄橙	B	口～胴25%	
52	第3区	土師器 甕	-	(4.5)	(11.3)	ABCDHMN	にぶい橙	B	胴～底35%	外面摩耗顕著。
53	第3区	土師器 甕	-	(1.7)	(12.2)	ABHIKMN	橙	B	底部25%	
54	第3区	土師器 甕	-	(1.85)	(10.3)	ABHN	灰黄褐	B	底部30%	
55	第3区	土師器 甕	-	(1.5)	(9.0)	ABCHKN	淡赤橙	B	底部25%	
56	第3区	土師器 甕	-	(3.2)	(7.0)	ABCDN	外:黒 内:黄橙	B	底部40%	
57	第3区	土師器 甕	-	(1.55)	(6.9)	ABDHMN	灰黄褐	B	底部30%	
58	第2区	土師器 甕	-	(2.4)	4.4	ABDKM	淡黄	B	底部100%	
59	第3区	土師器 甕	-	(4.9)	(5.2)	ABGHKN	にぶい黄橙	B	胴～底20%	

番号	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
60	第3区	土師器 甕	-	(3.6)	(5.4)	ABDHKN	灰黄	B	底部40%	
61	第3区	土師器 甕	-	(1.6)	(6.0)	ABCHIN	にぶい黄褐	B	底部40%	
62	第3区	土師器 高坏	-	(4.0)	(12.7)	ABDHN	にぶい赤褐	B	脚部20%	外面上部摩耗顕著。
63	第2区	陶器 椀	-	(2.15)	(5.1)	−	浅黄	-	高台部30%	内外施釉。

は胴上部片、34は胴部中段の破片、35～41は胴下部片、42は胴下部から底部にかけての破片である。29は口縁部下に横位の沈線が巡る。30～42は外面にタタキ、内面は30・42以外が円形ないし半円形のあて具痕が残る。30・42の内面は回転ナデ調整である。

第57図43～62は古墳時代後期以降の土師器。43～48は坏。43～45は北武蔵型坏、46は北武蔵型暗文坏、47は有段口縁坏、48は比企型坏である。北武蔵型坏は口径12cm前後を測るが、やや浅身のもの（43・44）と深身のもの（44）がある。46は北武蔵型暗文坏の器形であるが、内面に暗文はみられない。47の有段口縁坏は段が２段である。47の比企型坏は浅身で口縁端部のみ外反する。口縁部外面及び内面に赤彩が施されている。49は皿。坏蓋模倣坏を扁平化した器形を呈し、口縁端部のみ外反する。50～61は甕。50・51・58～61は長胴、52～57は丸胴の甕である。後者は胴下部から底部ないし底部のみの検出である。62は高坏。脚部のみの検出である。内外面ともに横ナデ調整であるが、内面にはヘラによる刻みがみられた。

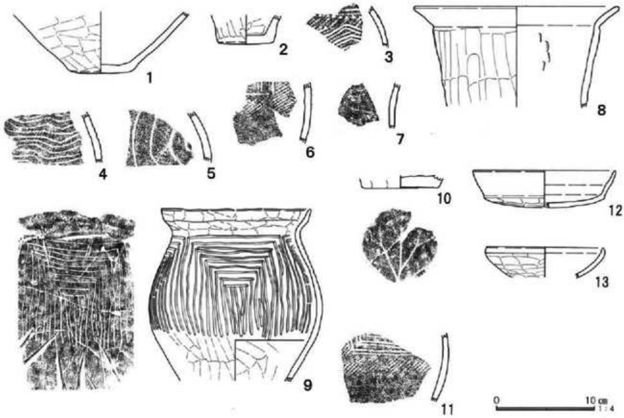
63は近世の陶器椀の高台部。今回の報告では唯一の近世遺物である。内外面ともに透明釉が施釉されており、貫入がみられた。

8 試掘調査出土遺物

上之土地区画整理地内では平成７年度にトレンチによる試掘調査が実施されている。トレンチは平成９年度調査第１区では調査区中央からやや東寄り、平成12年度調査第３区では調査区北側に設定されており、各トレンチからは遺物が少量検出されている。出土遺物は、弥生土器と古墳時代後期以降の土師器である。第58図１～８が平成９年度調査第１区、９～13が平成12年度調査第３区からの検出である。これらの遺物はトレンチ付近に位置する遺構に伴う可能性が高く、第１区出土の弥生土器（１～７）は１号竪穴状遺構、土師器（８）は４号溝跡、第３区出土の弥生土器（９～11）は９号住居跡、土師器（12・13）は５～８号住居跡のいずれかに伴うと思われる。以下、各調査区のトレンチ別に述べる。

１～８は第１区出土。１～７は弥生時代中期後半の土器。１・３～６は壺。１は胴下部から底部にかけての部位。無文で内外面ともにヘラナデ調整である。甕の可能性もある。３～５は胴上部片、６は胴部中段の破片である。３は横位に巡る平行沈線下に刺突列を刻み、以下はＬＲ単節縄文地に２本一単位の波状文を複数描いている。４は全面に１本描きの波状文が横位に複数巡る。５は沈線で渦巻き文が描かれており、沈線間にＲＬ単節縄文が充填されている。６は重四角文が描かれており、周囲にＬＲ単節縄文が施文されている。重四角文以下は無文で横位のヘラナデ調整が施されている。２・７は甕。２は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。７は頸部片。附加条一種ＲＬ＋Ｒが施文されている。８は古墳時代後期の土師器甕。口縁部から胴上部までの部位である。口縁部に最大径を持ち、開きが大きい。胴上部以下は下に向かってすぼまる。

９～13は第３区出土。10・11は壺。10は底部。内外面はヘラナデ調整である。底面には木葉痕が残る。



第58図　試掘調査出土遺物

第28表　試掘調査出土遺物観察表

番号	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	第1区	弥生土器 壺	−	(6.4)	(6.4)	ABDHIKM	浅黄	B	胴～底40%	
2	第1区	弥生土器 甕	−	(3.05)	5.7	ABHIKN	にぶい黄橙	B	底部90%	
3	第1区	弥生土器 壺	−	−	−	ABDIKN	にぶい黄橙	B	胴上部片	
4	第1区	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIK	灰黄褐	B	胴上部片	
5	第1区	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIK	にぶい黄橙	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
6	第1区	弥生土器 壺	−	−	−	ABHIKN	灰黄褐	B	胴部片	
7	第1区	弥生土器 甕	−	−	−	ABHIKN	黒褐	B	頸部片	
8	第1区	土師器 甕	(21.3)	(10.5)	−	ABDHIKN	にぶい黄橙	B	口～胴25%	
9	第3区	弥生土器 甕	(15.5)	(17.75)	−	ABHIKN	灰黄	B	口～胴50%	
10	第3区	弥生土器 壺	−	(1.3)	7.8	ABCHIKMN	浅黄橙	B	底部90%	底面木葉痕有。
11	第3区	弥生土器 壺	−	−	−	ADHIK	黒褐	B	胴部片	
12	第3区	土師器 坏	(14.8)	3.8	−	ABEHKN	橙	B	25%	
13	第3区	土師器 坏	(12.2)	(3.1)	−	AHIJKN	橙	B	20%	

甕の可能性もある。11は胴部中段の破片。２本一単位で重四角文が描かれており、周囲にはＬＲ単節縄文が施文されている。文様帯以下は無文で横位のヘラナデ調整である。９は甕。底部を欠く。口縁部は受け口状を呈し、最大径を持つ胴部は球形を呈する。口縁部から頸部は横位のヘラナデ、胴部には沈線によりコの字重ね文が描かれている。胴下部は無文で斜・縦位のヘラナデ調整である。12･13は土師器坏。12は坏蓋模倣坏、13は北武蔵型坏である。12は浅身、13はやや深身である。

V　調査のまとめ

前中西遺跡における調査報告は、区画整理事業と民間開発に伴う報告を合わせて今回で４回目となる。過去の調査報告については第３章で述べたとおりであるが、今回報告した内容は過去の調査成果をほぼトレースするものと言える。ただ、遺跡の主体となる弥生時代に関しては集落跡の時期や墓域との関係、出土遺物について新たな知見を得ることができた。紙数に限りがあるため、ここでは弥生時代についてのみ述べることとし、近接する弥生時代中期後半の大規模集落跡である北島遺跡と比較することで現時点における前中西遺跡の特徴、あるいは気付いた点について簡単に述べてまとめとしたい。

まず、集落跡について。今回の報告地点は、既に大半が報告済の第２次調査（平成９年度調査）及び第６次調査（平成12年度調査）のうち、まだ報告していなかった箇所についての報告であり、平成13年度に報告した第１・２次調査地点とは河川（衣川）を挟んだ北側に隣接して位置する。

今回報告した弥生時代の住居跡は８軒である。河川南側の第１・２次調査では９軒の住居跡が確認されているが、今回の報告により河川の北側にも弥生時代の集落跡が広がっていることが明らかとなった。ただし、河川南北で確認された住居跡はすべて同時期のものではなく、若干の時期差を持つ。出土遺物については後述するが、これまで本遺跡出土土器は主に中期末から後期初頭に位置づけられるものとして認識されていた。しかし、今回報告した土器はその様相から若干古い段階に位置付けられ、中期後半の北島式土器に相当する。よって、本遺跡にも北島遺跡同様、中期後半の集落跡が存在することが確実となり、集落跡は河川北側から南側への変遷が辿れることとなった。また、本報告地点から東へ300mの河川北側では、平成20年度の第９次調査により中期後半の住居跡が多数確認されており、中には８ｍ前後の大型住居跡が数軒検出されている。以上のことから想定すると、河川北側の微高地上には北島遺跡に匹敵する規模で中期後半の集落跡が広がっている可能性が考えられる。

前中西遺跡では、遺跡範囲東側で実施された平成14年度報告の第４～６次調査でも中期後半の住居跡が6軒確認されていることから本遺跡における弥生時代中期後半の集落跡は、衣川北側及び遺跡範囲東側に広がっており、中期末から後期初頭にかけての集落は衣川の南側に営まれていることが判明した。そして、これらの集落跡に伴う墓域は、過去の調査により方形周溝墓や土器棺墓が多数確認されており、乳幼児葬である土器棺墓は集落内外で確認されているが、方形周溝墓は河川南側の第１・２次調査で３基、遺跡範囲東側の第４～６次調査で13基が確認されている。河川南側の第１・２次調査の第３号方形周溝墓以外はすべて平面形態が四隅の切れるタイプであるが、出土遺物は河川南側の第１・２次調査検出の３基からは中期後半、第４～６次調査検出の13基からは中期末から後期初頭にかけての土器が検出されている。ちなみに河川南側検出の第３号方形周溝墓は、出土土器が中期後半に相当するが、平面形態は溝が全周、ないし１～２箇所隅の切れるタイプと思われることから時期が下る可能性もある。

本遺跡における集落跡と墓域の関係については、中期後半段階は集落跡が衣川北側と遺跡範囲東側に営まれ、墓域は衣川南側に広がっている。そして、中期末から後期初頭にかけての段階は、集落跡が衣川南側にあり、墓域は遺跡範囲東側に広がっていると考えられる。以上が現時点における本遺跡の弥生時代の集落跡と墓域に関する見解である。

次に出土遺物について。遺物は、弥生土器、石器（打製石斧・磨製石斧・磨石）、翡翠製垂飾、土偶型

容器などが住居跡から検出された。以下、上記の遺物について順に述べる。

土器は前述のとおり、これまで本遺跡出土土器は北島遺跡に後続する中期末から後期初頭にかけての段階として認識されてきたが、今回報告の出土土器は中期後半の北島式に相当する。器種は壺・甕・高坏のみであり、筒形土器や無頸壺、鉢などは過去の調査分を含めても現時点では認められない。系統としては、在地系、中部高地の栗林式系、南関東の宮ノ台式系などがみられ、北島遺跡とほぼ同じ様相を呈するが、壺に関しては北島遺跡では見られない系統のものも認められた。

壺は北島式土器の特徴である鋸歯文、フラスコ文、重四角文、重三角文、波状文と平行沈線などが文様の主要素として認められるが、フラスコ文と重三角文の割合は少ない。また、文様のないものとして全面ヘラナデ調整による壺（第38図７・８）や器形的には甕に近い全面ミガキ調整で赤彩の施された短頸壺（第39図13）なども存在する。異系統の土器としては、渦巻き文内に縄文を充填するものが破片で３点（第18図65・第23図18・第58図５）検出されており、河川南側の第１・２次調査でも第３号土器棺墓の棺身に使用された壺に渦巻き文が描かれている。この系統は東北地方南部周辺に出自が求められるものと思われ、本遺跡では少数ながら認められているが、北島遺跡では今のところ確認されていない。

甕は縄文施文の在地系と羽状文やコの字重ね文などの文様が描かれる栗林式系が主体となり、両者の折衷形もいくつか認められた。また、口縁部に指頭圧痕が施される宮ノ台式系のものも若干存在する。

高坏は全形の分かるものは少ないが、文様は口唇部にのみ縄文が施文され、以下は無文で全面ミガキないしヘラナデ調整で、ミガキ調整の土器には赤彩が施されるものが多くみられた。

石器は打製・磨製の石斧、磨石などが検出されているだけである。今回の報告分では北島遺跡でみられた扁平状の磨石や剥片状の掻器などは検出されていないが、平成19年度に実施された第８次調査では北島遺跡とほぼ同じ内容の石器が検出されていることから石器組成に関しては北島遺跡と同じ様相を呈すると思われる。

16号住居跡から検出された翡翠製の垂飾は、何を模したものか不明であるが、側面に両側から穿孔されていることから首飾りとして使用されたものと思われる。翡翠は本遺跡では平成20年度の第９次調査でも勾玉が出土しており、また時代及び時期は異なるが、周辺遺跡でも飯塚南遺跡では弥生時代中期前半の再葬墓から勾玉が出土し、また一本木前遺跡でも古墳時代前期の方形周溝墓の主体部から勾玉が出土している。本遺跡以外は墓からの検出であるが、妻沼低地上には翡翠を持つ遺跡がいくつか存在しており、弥生時代から古墳時代にかけて本遺跡周辺では、新潟方面から翡翠を得るルートを持っていたことが窺える。

土偶型容器は本報告分だけでなく、平成13年度報告の河川南側の第１・２次調査でも検出されていたが、遺構外の出土であったことから時期の特定は慎重にならざるを得なかった。しかし、今回の報告で北島式段階の19号住居跡から検出されたことにより中期後半にも土偶型容器が存在することが明らかとなった。本遺跡周辺では土偶型容器の初源は弥生時代中期中頃の池上遺跡に求めることができるが、中期中頃に続いて中期後半にも土偶型容器が存在することが確実になった点は貴重な成果と言える。

以上、紙数の都合もあり、駆足で述べた。前中西遺跡の発掘調査は周知されている遺跡範囲の僅かしか行われていないが、おぼろげながら遺跡の全容が明らかになってきた。調査は今後も継続して実施される予定であることから弥生時代のみならず他の時代についてもより一層その様相を把握できるようになると

思われる。また、弥生時代に関しては中期後半の住居跡に重複するものがあることから細分化できることは間違いない。今後の課題としてさらなる資料の蓄積を待って検討していきたい。

引用・参考文献

熊谷市遺跡調査会　2001　『諏訪木遺跡』

熊谷市教育委員会　1979　『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』

1980　『中条遺跡群・中島遺跡』

1982　『中条遺跡群Ⅲ　権現山古墳・常光院東遺跡』

1982　『中条遺跡群』

1983　『めづか』

1988　『寺東・八反田・東耕地・入川・深町遺跡』

1999　『横間栗遺跡』

2000　『寺東遺跡・別府氏館跡』

2001　『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡・肥塚古墳群14・15・16号墳』

2002　『前中西遺跡Ⅱ』

2003　『前中西遺跡Ⅲ』

2004　『籠原裏遺跡』

2007　『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第2号墳』

2008　『藤之宮遺跡』

熊谷市前中西遺跡調査会　1999　『前中西遺跡』

埼玉県遺跡調査会　1971　『横塚山古墳』

埼玉県教育委員会　1984　『池守・池上』

1988　『埼玉の中世城館跡』

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1989　『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集

1989　『北島遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集

1991　『北島遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集

1991　『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

1993　『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集

2002　『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集

2002　『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集

2003　『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集

2004　『北島Ⅷ／田谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集

2007　『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集

2008　『諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第351集

写 真 図 版

第１・２区全景（真上から）

第１・２区全景（北から）

図版2

第3区全景（真上から）

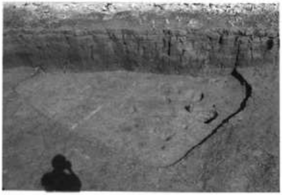
第3区全景（東から）

第１区全景（西から）

第３区北側全景（南東から）

第３区南側全景（北東から）

図版4



第1号住居跡

第5号住居跡

第2号住居跡

第5号住居跡カマド

第3号住居跡

第5号住居跡遺物出土状況（1）

第4号住居跡

第5号住居跡遺物出土状況（2）

第８号住居跡遺物出土状況（１）

第８号住居跡遺物出土状況（２）

第８号住居跡遺物出土状況（３）

第８号住居跡遺物出土状況（４）

第9号住居跡

第10号住居跡

第11・12号住居跡

第12号住居跡

図版6

第13・14号住居跡・第５号土杭

第16号住居跡遺物出土状況（２）

第15号住居跡

第16号住居跡遺物出土状況（３）

第16号住居跡

第17号住居跡

第16号住居跡遺物出土状況（１）

第18号住居跡カマド

第19・20号住居跡

第19号住居跡遺物出土状況

第1～3号溝跡

第5号溝

第4号溝跡

第6号溝跡

第7号溝跡

図版8

第8号溝跡

第 8 号溝跡遺物出土状況（1）

第 8 号溝跡遺物出土状況（2）

第 8 号溝跡遺物出土状況（3）

第 8 号溝跡遺物出土状況（4）

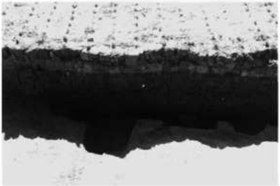
第 8 号溝跡遺物出土状況（5）

第 9 号溝跡

第10号溝跡

第11号溝跡

第７号土杭


第２号土杭

第１号土器棺墓（北から）

第４号土杭

第１号土器棺墓（東から）

第６号土杭

第２号土器棺墓

図版10

第５号住居跡　第14図23

第15号住居跡　第31図３

第８号住居跡　第18図54

第15号住居跡　第31図４

第15号住居跡　第31図１

第15号住居跡　第31図５

第15号住居跡　第31図２

第15号住居跡　第31図６

図版11

第15号住居跡　第31図 8

第16号住居跡　第34図 1

第15号住居跡　第31図 9

第16号住居跡　第34図 2

第15号住居跡　第31図 9 底面

第16号住居跡　第34図 3

第15号住居跡　第31図12

第16号住居跡　第34図 4

図版12

第19号住居跡　第38図 1

第19号住居跡　第38図 5

第19号住居跡　第38図 2

第19号住居跡　第38図 7

第19号住居跡　第38図 3

第19号住居跡　第38図 7 底面

第19号住居跡　第38図 4

第19号住居跡　第38図 8

第19号住居跡　第38図９

第19号住居跡　第39図13

第19号住居跡　第38図10

第19号住居跡　第39図14

第19号住居跡　第38図11

第19号住居跡　第39図15

第199号住居跡　第38図12

第19号住居跡　第39図15底面

図版14

第19号住居跡　第39図17

第19号住居跡　第39図29

第19号住居跡　第39図18

第19号住居跡　第39図30

第19号住居跡　第39図18底面

第19号住居跡　第39図31

第19号住居跡　第39図20

第19号住居跡　第39図32

第19号住居跡　第39図28

第19号住居跡　第39図33

第１号竪穴状遺構　第45図１

第１号土器棺墓　第55図1-1

第２号土器棺墓　第55図2-1

第２号土器棺墓　第55図2-2

第３号土器棺墓　第55図3-1

遺構外出土遺物　第56図１

試掘調査出土遺物　第58図９

図版16

第８号住居跡　第19図71

第５号住居跡　第14図８

第５号住居跡　第14図２

第５号住居跡　第14図９

第５号住居跡　第14図３

第８号住居跡　第17図１

第５号住居跡　第14図６

第８号住居跡　第17図３

第５号住居跡　第14図７

第８号住居跡　第17図17

図版17

第 8 号住居跡　第17図18

第 8 号住居跡　第18図34

第 8 号住居跡　第17図22

第10号住居跡　第23図 6

第8号住居跡　第17図28

第14号住居跡　第29図 3

第 8 号住居跡　第17図30

第14号住居跡　第29図13

第 8 号住居跡　第18図32

第19号住居跡　第42図111

図版18

第８号溝跡　第48図8-1

第８号溝跡　第48図8-2

第８号溝跡　第48図8-3

第８号溝跡　第49図8-29

第８号溝跡　第49図8-30

第８号溝跡　第49図8-30底面

遺構外出土遺物　第57図43

遺構外出土遺物　第57図49

第４号住居跡　第12図 2

第５号住居跡　第14図14

第14号住居跡　第29図６

第８号住居跡　第18図35

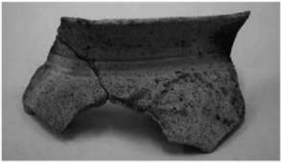
第８号住居跡　第18図36

第14号住居跡　第29図７

第８号溝跡　第48図8-12

第８号住居跡　第18図37

第11号住居跡　第25図５


第８号溝跡　第48図8-13

図版20

第８号溝跡　第48図8-17

第８号溝跡　第48図8-18

第８号溝跡　第48図8-19

第８号溝跡　第48図8-20

第第８号溝跡　第48図8-21

第８号溝跡　第48図8-22

第１号住居跡　第８図１～４、第２号住居跡　第９図１～7、第３号住居跡　第11図５～7
第４号住居跡　第12図４～７、第５号住居跡　第14図26～36

第８号住居跡　第18図55～66、第19図67～70

図版22

第９号住居跡　第21図7～29

第９号住居跡　第21図30～53

第10号住居跡　第23図10～19、第11号住居跡　第25図6～19

第12号住居跡　第26図１～３、第13号住居跡　第28図５～７
第14号住居跡　第29図15～17、第15号住居跡　第31図13～18

図版24

第15号住居跡　第31図19～31

第15号住居跡　第31図32・33、第32図34～45

第16号住居跡　第34図7～25

第16号住居跡　第34図26～39

図版26

第19号住居跡　第40図34～49

第19号住居跡　第40図50～69

第19号住居跡　第40図70～75、第41図76～89

第19号住居跡　第41図90～107

図版28

第20号住居跡　第43図１～８、第１号竪穴状遺構　第45図３～28

第８号溝跡　第49図32～51、第９号溝跡　第50図９-１、第６号土杭　第53図１～３

遺構外出土遺物　第56図５～24、試掘調査出土遺物　第58図3～7・11

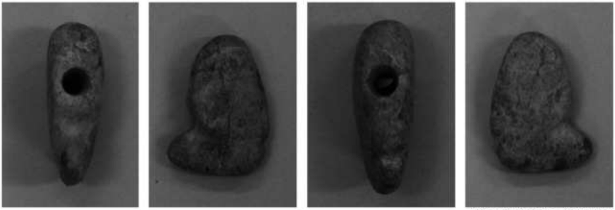
第８号住居跡　第17図７～12、第10号住居跡　第23図２～４

図版30

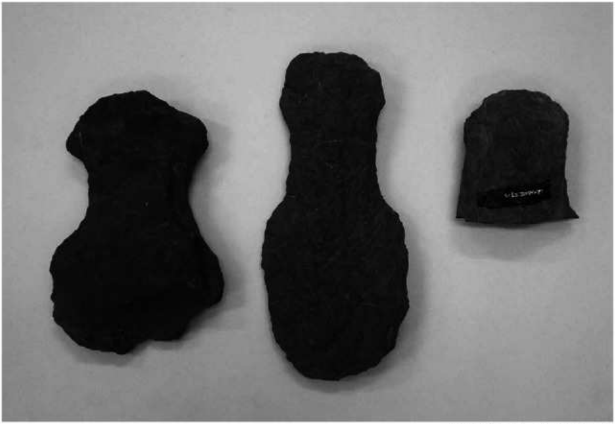
第13号住居跡　第28図１、第14号住居跡　第29図１・２
第８号溝跡　第49号８-52、第50図８-53～55、第10号溝跡　第50図10-1

遺構外出土遺物　第56図28～38・第57図39～42

第19号住居跡　第41図108

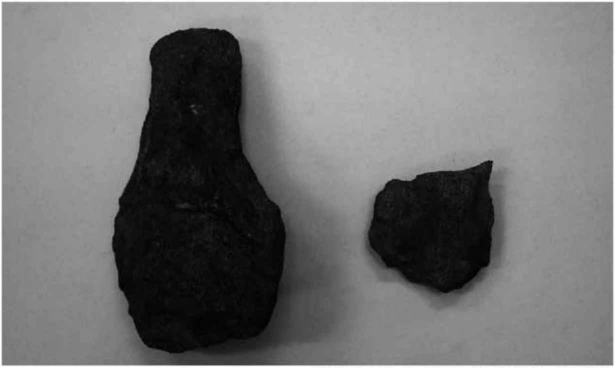


第16号住居跡　第35図44



第16号住居跡　第35図40～42

図版32



第19号住居跡　第41図109、第20号住居跡　第43図 9

第19号住居跡　第41図110

第16号住居跡　第35図43

第 1 号竪穴状遺構　第43図 9

第３号住居跡　第11図３

第５号住居跡　第14図22

第５号住居跡　第14図21、第７号住居跡　第16図２、第８号住居跡　第18図51～53

第20号住居跡　第43図15･16

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえなかにしいせきよん
書名	前中西遺跡Ⅳ
副書名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅴ
巻次	—
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第３集
編集者名	松田　哲
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360－0107 熊谷市千代329番地　熊谷市立江南文化財センター　TEL048-536-5062
発行年月日	西暦2009（平成21）年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (° ′ ″)	東緯 (° ′ ″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
前中西遺跡（まえなかにしいせき）	熊谷市中西四丁目（くまがやし なかにし 4ちょうめ） 2539番地1他（ばんち ほか）	11202	092	36° 8′ 41″	139° 24′ 09″	19980203 ～ 19980331	604.4	区画整理 街路築造 工事
						20000918 ～ 20010330	481.30	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前中西遺跡	集落跡 墓	弥生時代中期後半	住居跡　8軒 竪穴状遺構　1基 土坑　1基 土器棺墓　3基	弥生土器・石器 土偶型容器 翡翠製垂飾	弥生時代中期後半の住居跡から大量の遺物が出土し、土偶型容器の腕部や翡翠製の垂飾も出土した。
		古墳時代後期	住居跡　10軒 溝跡　6条 土坑　3基	須恵器・土師器 土錘・砥石	
		奈良時代	住居跡　2軒 溝跡　1基	須恵器・土師器 土錘・砥石	
		時期不明	溝跡　3基 土坑　3基		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第３集

前　中　西　遺　跡　Ⅳ

―熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書 Ⅴ―

平成21年3月19日

発行／ 埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／ 株 式 会 社　シ ョ ー シ ン